沖縄市文化財調査報告書　第49集

比屋根遺跡

－災害時緊急避難通路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2021（令和3）年3月
沖縄市教育委員会

沖縄市文化財調査報告書　第 49 集

比屋根遺跡

－災害時緊急避難通路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2021（令和 3）年 3 月
沖 縄 市 教 育 委 員 会

巻頭図版１　調査区遠景　北西より

巻頭図版２　調査区遠景　北より

はじめに

本報告書は沖縄市が行う災害時緊急避難通路整備工事に伴い、埋蔵文化財発掘調査を実施した「比屋根遺跡」の調査成果をまとめたものです。

比屋根（方言ではヒャーグン）は、比屋根小学校が開校する等、人口が増加し都市化が進んでいますが、古い文献にもその名が見られる歴史ある集落であり、昔から現在へとつながる人々の営みの証が残されている地域です。

比屋根遺跡は、『琉球国由来記（1713 年）』によると、比屋根の旧集落北東側の丘陵に所在するオシアゲ森（ムイ）と呼ばれる御嶽であり、拝所等が複数見られる比屋根地域において重要な場所となっています。

今回、比屋根遺跡の一部の発掘調査を行い、グスク時代から近世・近代にかけての遺構や遺物が多数出土し、比屋根地域の形成・発展をはじめ、沖縄市東部の集落形成の歴史の一端を垣間見ることができました。

この調査成果が学術研究の一助になり、市民の歴史文化への理解を深め、多くの方々に活用していただけることを願います。

今回の発掘調査ならびに、本報告書を作成するに際し、ご指導ご協力をいただいた皆様に、深く感謝申し上げます。

2021（令和 3）年 3 月

沖縄市教育委員会
教育長　比嘉　良憲

例　言

・本書は、沖縄県沖縄市字比屋根に所在する比屋根遺跡の発掘調査報告書である。

・調査は災害時緊急避難通路整備工事に伴う事前の記録保存調査として沖縄市役所道路課が費用を負担し、沖縄市教育委員会が実施したものである。

・本書は、平成 27（2015）年度に実施した比屋根遺跡の埋蔵文化財発掘調査成果を、平成 29（2017）・令和 2（2020）年度に資料整理作業を行い、まとめたものである。

・本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて世界測地系に基づくものである。

・第 1 図は、国土地理院の電子地形図 25000 から調査地周辺のデータを取得し、編集、加筆したものである。

・第 2 図は、米軍が 1948 年に作成した地形図を合成して調整を行ったものに、編集、加筆したものである。この地形図のデジタル化画像は沖縄県立公文書館が所蔵しており、承認を得て掲載した。

・資料整理作業にあたり、調査体制の項で記した多くの方々に指導・資料の同定をいただいた。記して謝意を表したい。

・本書の編集は縄田雅重の指示のもと、有限会社ティガネーの川端博明・慶田秀美・喜屋武朋子・譜久里昌代・友寄英人が行った。

・本書の執筆は沖縄市立郷土博物館の縄田雅重・島田由利佳、有限会社ティガネーの川端博明・慶田秀美・譜久里昌代・喜屋武朋子が行った。

・本書の執筆は下記の分担によった。

第Ⅰ章・第Ⅱ章　第 2 節・第Ⅳ章	縄田雅重
第Ⅱ章　第 1 節	島田由利佳
第Ⅲ章　第 1 ～ 4 節	川端博明
第Ⅲ章　第 4 節	譜久里昌代（貝製品・骨製品・貝類遺体）
	喜屋武朋子（脊椎動物遺体）
	慶田秀美　（遺物観察一覧表）

・発掘調査で得られた出土遺物・図面・写真等の記録類は、沖縄市立郷土博物館に保管されている。

目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過……1
第１節　調査に至る経緯……1
第２節　調査体制……1
第３節　発掘調査の経過……3
第４節　整理作業の経過……6
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……7
第１節　自然的環境……7
第２節　歴史的環境……7
第Ⅲ章　調査方法と成果……11
第１節　調査の方法……11
第２節　層序……13
第３節　遺構……19
1．石積み……19
2．集石……24
3．貝溜まり……24
4．土坑１……26
5．土坑２……27
6．土坑３……28
第４節　遺物……31
1．土器・カムィヤキ……32
2．青磁……34
3．白磁……42
4．青花……44
5．その他の輸入陶磁器……46
6．本土産陶磁器……48
7．沖縄産陶器……49
8．円盤状製品……59
9．土製品……59
10．瓦……59
11．金属製品……61
12．銭貨……62
13．石器……65
14．貝製品・骨製品……65
15．自然遺物……71
第Ⅳ章　総括……83

挿　表

第 1 表　土層観察表 18
第 2 表　出土遺物一覧 31
第 3 表　土器・カムィヤキ出土一覧 32
第 4 表　土器観察一覧 32
第 5 表　青磁出土一覧 34
第 6 表　青磁観察一覧 1 ～ 3 34
第 7 表　白磁出土一覧 42
第 8 表　白磁観察一覧 42
第 9 表　青花出土一覧 44
第 10 表　青花観察一覧 44
第 11 表　その他の輸入陶磁器出土一覧 46
第 12 表　その他の輸入陶磁器観察一覧 46
第 13 表　本土産陶磁器出土一覧 48
第 14 表　本土産陶磁器観察一覧 49
第 15 表　沖縄産陶器出土一覧 1 ～ 2 49
第 16 表　沖縄産陶器観察一覧 1 ～ 2 51
第 17 表　円盤状製品出土一覧 59
第 18 表　円盤状製品観察一覧 59
第 19 表　土製品観察一覧 59
第 20 表　瓦観察一覧 59
第 21 表　瓦出土一覧 61
第 22 表　金属製品出土一覧 61
第 23 表　金属製品観察一覧 1 ～ 2 61
第 24 表　銭貨出土一覧 62
第 25 表　銭貨観察一覧 62
第 26 表　石器出土一覧 65
第 27 表　石器観察一覧 65
第 28 表　貝製品・骨製品出土一覧 66
第 29 表　貝製品・骨製品観察一覧 67
第 30 表　貝類遺体の生息場所類型表 71
第 31 表　貝類遺体の分類と生息場所類型 73
第 32 表　貝類遺体出土一覧（巻貝 1 ～ 2） 74
第 33 表　貝類遺体出土一覧（二枚貝 1 ～ 3） 76
第 34 表　ブタ・イノシシ出土一覧 79
第 35 表　ウシ・ウマ出土一覧 80
第 36 表　ジュゴン・海獣・ヤギ・トリ・イヌ・種不明出土一覧 81
第 37 表　魚類出土一覧 81

挿図図版

第 1 図　調査区周辺の遺跡 8
第 2 図　調査区の位置 9
第 3 図　調査区のグリッド設定図 11
第 4 図　調査区の現況 12
第 5 図　調査区のセクションポイント 14
第 6 図　調査区　断面図 1 15
第 7 図　調査区　断面図 2 16
第 8 図　調査区　断面図 3 17
第 9 図　石積み　位置図 20
第 10 図　石積み 1　基底部　平面・立面図 21
第 11 図　石積み 2　平面・立面図 22
第 12 図　近世～グスク時代遺構　位置図 23
第 13 図　集石　平面・断面図 24
第 14 図　貝溜まり　平面・断面図 25
第 15 図　獣骨出土状況　平面・断面図 25
第 16 図　土坑 1　平面・断面図 26
第 17 図　土坑 2　平面・断面図 27
第 18 図　土坑 3　平面・断面図 28
第 19 図　近世造成土の検出状況 29
第 20 図　調査区の完掘状況 30
第 21 図　土器 33
第 22 図　青磁 1 37
第 23 図　青磁 2 38
第 24 図　青磁 3 39
第 25 図　青磁 4 40
第 26 図　青磁 5 41
第 27 図　白磁 43
第 28 図　青花 45
第 29 図　その他の輸入陶磁器 47
第 30 図　本土産陶磁器 53
第 31 図　沖縄産陶器 1 54
第 32 図　沖縄産陶器 2 55
第 33 図　沖縄産陶器 3 56
第 34 図　沖縄産陶器 4 57
第 35 図　沖縄産陶器 5 58
第 36 図　円盤状製品・土製品・瓦 60
第 37 図　金属製品 1 63
第 38 図　金属製品 2 64
第 39 図　銭貨 64
第 40 図　石器 68
第 41 図　貝製品 1 69
第 42 図　貝製品 2・骨製品 70
第 43 図　貝類遺体種別検出状況 72
第 44 図　貝類遺体層別検出状況 72
第 45 図　貝類遺体生息場所類型組成 72

写真図版

巻頭図版１　調査区遠景　北西より
巻頭図版２　調査区遠景　北より
図 版 1　調査状況１ 4
図 版 2　調査状況２ 5
図 版 3　整理作業状況 6
図 版 4　調査区の現況・伐採後状況 87
図 版 5　石積み１ 88
図 版 6　石積み２ 89
図 版 7　層序 90
図 版 8　集石・貝溜まり 91
図 版 9　貝溜まり・獣骨 92
図版 10　土坑１・土坑２ 93
図版 11　土坑３・ピット 94
図版 12　近世の遺物包含層・近世の造成土検出状況 95
図版 13　完掘状況 96
図版 14　土器 97
図版 15　青磁１ 98
図版 16　青磁２ 99
図版 17　青磁３ 100
図版 18　青磁４ 101
図版 19　青磁５ 102
図版 20　白磁 103
図版 21　青花 104
図版 22　その他の輸入陶磁器 105
図版 23　本土産陶磁器 106
図版 24　沖縄産陶器１ 107
図版 25　沖縄産陶器２ 108
図版 26　沖縄産陶器３ 109
図版 27　沖縄産陶器４ 110
図版 28　沖縄産陶器５ 111
図版 29　円盤状製品・土製品・瓦 112
図版 30　金属製品１ 113
図版 31　金属製品２・銭貨 114
図版 32　石器 115
図版 33　貝製品・骨製品 116
図版 34　巻貝１ 117
図版 35　巻貝２ 118
図版 36　二枚貝１ 119
図版 37　二枚貝２ 120
図版 38　二枚貝３ 121
図版 39　脊椎動物遺体１ 122
図版 40　脊椎動物遺体２ 123
図版 41　脊椎動物遺体３ 124

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

比屋根遺跡は比屋根の旧集落の北東側に位置し、大殿（ウフドゥン）等の拝所や獅子屋が所在するオシアゲ森（ムイ）と呼ばれる丘陵に位置する。この比屋根遺跡が所在する丘陵に災害時緊急避難通路の整備が行なわれることとなった。

沖縄市役所道路課より 2013（平成 25）年 11 月 26 日付で「文化財の所在の有無及びその取扱いについて（照会）」を受け、同年 12 月 12 日付で「文化財の所在の有無及びその取扱いについて（回答）」において、計画予定地には比屋根遺跡が所在し保護対象であり、調整が必要である旨の回答を行なった。

その後、2015（平成 27）年 3 月 16 日から 19 日にかけて 10 ヶ所、2015（平成 27）年 6 月 24・25 日にかけて 3 ヶ所の計 13 ヶ所で試掘調査を実施し、一部で、近代から古くはグスク時代に溯る可能性のある遺物包含層を確認した。災害時緊急避難通路整備が、埋蔵文化財へ影響を与えるため記録保存調査を実施することで調整を行なった。費用は沖縄市役所道路課が負担し、調査は沖縄市教育委員会で実施することとなった。

沖縄市長より文化財保護法第 94 条第 1 項に基づき、2015（平成 27）年 10 月 19 日付け沖市道第 1019006 号「埋蔵文化財発掘の通知について」が県宛てに提出され、沖縄県教育委員会より 2015（平成 27）年 10 月 26 日付け教文第 1145 号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」が出され、発掘調査を実施するよう通知が行なわれた。

2015（平成 27）年 11 月 18 日より、現場における発掘調査業務に着手し、2016（平成 28）年 2 月 12 日に調査は終了した。

第２節　調査体制

2015（平成 27) 年度　発掘調査業務

調査主体	沖縄市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	狩俣　智
	〃	教育部長	比嘉　良憲
	〃	教育部次長	崎山　尚也
調査主管	沖縄市立郷土博物館	館長	新里　邦一
調査総括	〃	文化財係長	比嘉　清和
調査担当者	〃	学芸員	縄田　雅重
植生調査協力	沖縄市文化財調査審議会	会長	池原　直樹
事業協力者			八田　夕香
			比嘉　二規

発掘作業支援業務委託　　有限会社　ティガネー

2017（平成 29) 年度　資料整理業務

調査主体	沖縄市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	狩俣　智
	〃	教育部長	森川　政寿
	〃	教育部次長	森山　雅人
調査主管	沖縄市立郷土博物館	館長	新里　邦一
	〃	副館長	尾崎　江利子
調査総括・担当者	〃	文化財係長	縄田　雅重
事業協力者			八田　夕香

出土遺物整理作業業務委託　有限会社　ティガネー

2020（令和 2) 年度　資料整理及び報告書発刊業務

調査主体	沖縄市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	比嘉　良憲
	〃	教育部長	島袋　秀明
	〃	教育部次長	兼本　正人
調査主管	沖縄市立郷土博物館	館長	盛島　久代
	〃	副館長	徳嶺　智彦
	〃	副主幹	比嘉　清和
調査総括・担当者	〃	文化財係長	縄田　雅重
指導・助言	沖縄県教育庁文化財課	主任専門員	新垣　力
	沖縄県立埋蔵文化財センター	主任専門員	瀬戸　哲也
事業協力者			島田　由利佳
			曽木　菊枝
			長堂　綾
			八田　夕香

資料整理及び報告書発刊作業等支援業務委託　有限会社　ティガネー

第 3 節　発掘調査の経過

現地での発掘調査は 2015（平成 27）年 11 月 18 日から開始し、2016（平成 28）年 2 月 12 日までの日程で行った。それに先駆け、11 月 8 日に調査区周辺の植生調査を実施している。以下、主な作業内容についてその概要を時系列に記す。

・現況の記録作業［2015（平成 27）年 11 月 18 日～同月 27 日］

調査区とその周辺の調査前の現況は、雑草が繁茂し低木や高木も散見される状態であった。さらに、調査区の北東に隣接する獅子屋と伊礼門中の拝所が所在する方形状の平坦な区画から、その西側を通る里道へと繋がる小道の東西端部に 2 基の石積みが残存していた。調査はまず、地形測量を含めたこれら現況の記録作業及び石積みの精査を行うべく、2015 年 11 月 18 日に伐採作業から開始した。伐採作業と並行して磁気探査を行い、調査区表層下の安全を確認後に石積みの精査を実施した。11 月 27 日までに、現況の地形測量と 2 基の石積みの写真測量及び撤去を済ませ、重機掘削に備えた。

・重機掘削［2015（平成 27）年 11 月 30 日～ 12 月 4 日］

表土層・現代の造成・攪乱層除去を目的とした重機掘削は、調査区内の土層観察用セクションベルトの位置を割付後に行い、調査区の南半から北半へと進めた。作業期間は 11 月 30 日から 12 月 4 日である。

・人力掘削［2015（平成 27）年 12 月 7 日～ 2016（平成 28）年 1 月 22 日］

人力掘削は 12 月 7 日に調査区内の遺物包含層検出状況の写真撮影を行い、翌日から着手した。まず調査区の短軸方向にサブトレンチを 2 箇所設定して斜面地での層の堆積状況の把握から始めた。掘削の結果、近世の遺物包含層と、同時期と推定される造成土（整地土）の堆積を再確認した。そこで、造成土までの掘削を第一段階、造成土の掘削を第二段階として区切り、作業を進めた。第一段階は 12 月 8 日から翌年の 2016 年 1 月 10 日にかけて実施した。第一段階の掘削作業中に、集石・貝溜まりや、近世期の造成土（整地土）上面で遺構を数基発見している。第二段階の掘削もサブトレンチの掘削を先行させ、本格的な掘削は 1 月 12 日から開始した。近世期の造成土（整地土）の掘削と並行して調査区内の土層観察用セクションベルトを除去し、1 月 15 日からは造成土直下のグスク時代の遺物包含層の掘削を行い、1 月 22 日には調査に伴う掘削作業を全て終了させた。各遺構の実測等の記録作業もこの期間内において随時行っている。

・現地見学会［2016（平成 28）年 1 月 24 日］

今回の調査結果を一般公開すべく、現地見学会の計画・準備を行ったが、当日はあいにく雨天のため、見学会の中止を余儀なくされた。ただし、中止が分からず来場する方々を想定して、調査区の南東約 50mにある比屋根地域のアシビナーに仮設テントを設置し、調査写真のパネルと出土遺物を展示して来場者への対応を行った。

・最終記録作業と調査区の現状復旧［2016（平成 28）年 1 月 25 日～ 2 月 12 日］

調査区壁面の写真撮影・写真測量実施し、調査区完掘状況の俯瞰・斜め写真撮影をドローンにて行った。全ての撮影データを確認後、即座に調査区の埋め戻し作業を開始し、現地での発掘調査は 2 月 12 日に全て完了した。

伐採作業（重機）

伐採作業（人力）

磁気探査（表層）

磁気探査（経層）

石積みの精査

現況の地形測量

石積みの写真測量

石積みの除去

図版 1　調査状況 1

重機掘削

重機掘削

人力掘削

遺構掘削

遺構の写真測量

完掘状況の写真測量

現地見学会

現地見学会用パネル展示

図版２　調査状況２

第４節　整理作業の経過

整理作業の業務は 2017（平成 29）年度と 2020（令和 2）年度の 2 年度行い、両方とも業務委託として実施した。以下、各年度の主な作業の概要を時系列に記す。

１．2017（平成 29）年度の整理作業

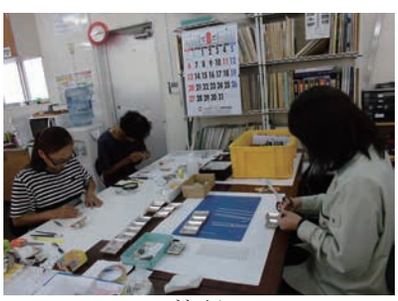
2017（平成 29）年度は出土遺物の基礎整理作業を行った。対象となる遺物は約 1,900 点で、具体的な作業としては、注記・接合・復元・集計・金属製品の保存処理である。

7 月 27 日～ 8 月 23 日にかけて注記作業を行った後、接合及び実測用遺物の選定作業を 9 月 22 日まで行った。ピックアップ遺物の復元作業を 10 月 4 日で終了し、最後に集計作業を実施した。

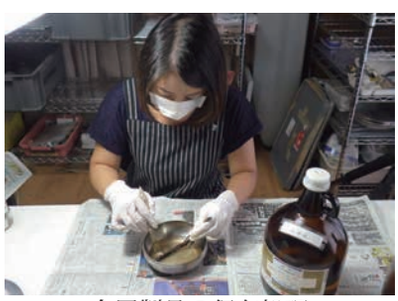
出土遺物の中には保存処理が必要な金属製品が含まれていたため、それらの保存処理も上記作業と並行して実施した。

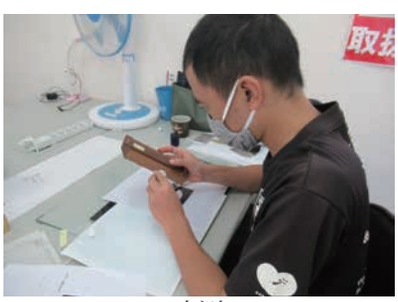
２．2020（令和 2）年度の整理作業

2020（令和 2）年度は実測・写真・本報告書の作成と印刷・製本を行った。2017（平成 29）年度の基礎整理で選定された遺物の実測・トレース・写真撮影等を行い、最終工程として文書・挿図・写真図版等全てのデジタルデータを Adobe InDesign で統合し、編集を行った。

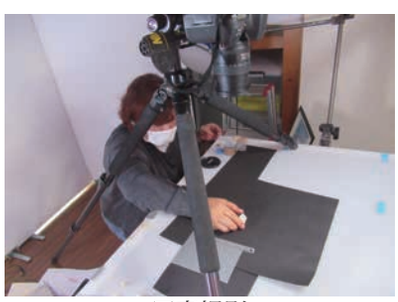

注記

接合


金属製品の保存処理


実測

トレース


写真撮影

同定

集計・分類

報告書編集

図版３　整理作業状況

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第 1 節　自然的環境

沖縄市は、沖縄島の中央部に位置し、県都・那覇市から北東に約 20㎞の距離にある。総面積 49 ㎢、人口 142,973 人、世帯数 64,380 世帯 (沖縄市人口統計 2021 年 1 月 1 日現在) である。地形としては、中城湾に面する東海岸部の低地から西北部の丘陵地へと斜面地域が広がっており、市域の 9 割は標高 100 m以下である。この地形は地質に由来し、その大きな特徴として、市域を流れる比謝川や天願川をおおよその境界とし、沖縄島の北側と南側で地質が異なる。その境界部分にあたる本市域は、北側は沖縄島北域に広く発達している名護層であり、約 4,000 ～ 7,000 万年前に形成された変成岩からなる。南側には沖縄島南部一帯に広く発達する、約 200 ～ 500 万年前に形成された泥岩からなる島尻層が見られる。加えてその島尻層域中央部（胡屋～知花）には基盤の島尻層を琉球層群石灰岩層と砂礫層が不整合に広く覆っている。その地域の特徴的な地形として、石灰岩層の浸食残留地形（円錐カルスト）が列をなして点在する。島尻層域東部（古謝～与儀）は標高 100 m以下の小起伏の丘陵地形となる。その丘陵上を広い盆状の谷（浅谷）が刻み、沖積層をもつ平坦な谷底低地と傾斜が緩やかな孤立上の丘が混在する。

比屋根遺跡は、沖縄市比屋根に所在、旧比屋根集落の北東、標高約 47 mに位置し、島尻層群泥岩層の小丘陵上に形成され、丘陵東斜面は急傾斜となっているが、西側斜面は比較的緩やかとなる。

第 2 節　歴史的環境

沖縄市の市域には先史時代の遺跡である室川貝塚や仲宗根貝塚などがあり、少なくとも約 4,000 年前から人々が暮らしていたことが分かっている。グスク時代には、越来グスクや知花グスクをはじめ遺跡が点在しており、沖縄市東部には、比屋根遺跡、大里エーヤマ遺跡、満喜世遺跡、与儀遺跡等が確認されている。そのうち比屋根遺跡や大里エーヤマ遺跡、与儀遺跡については、麓にそれぞれの集落を望む丘陵上に立地し、地域の拝所も所在することから、集落の変遷がうかがえる場所となっている。

琉球国時代には、行政区として間切 (現在の市町村にあたる) 制度がつくられ、沖縄市域の大半は越来間切となった。1666 年には越来間切から与儀・比屋根・西原 (現美里) 以下 15 村を分離して美里間切が新設された。

1879 年には廃藩置県によって沖縄県となり、その後、それまでの間切が村に改められ、越来村、美里村が生まれた。太平洋戦争末期には、沖縄県は壮絶な地上戦にみまわれ、多くの犠牲者を出した。

戦後、越来村は、コザ村を経てコザ市となり、1974 年コザ市と美里村が合併して「沖縄市」が誕生した。

比屋根地域は、琉球国時代には美里間切に含まれ、『絵図郷村帳（1649 年)』にその名が見られる古い集落である。比屋根遺跡が所在する小丘陵は『琉球国由来記（1713 年)』に「オシアゲ森（ムイ)」と記載される御嶽に相当する。頂上部には「大殿（ウフドゥン)」と呼ばれる比屋根地域の拝所があり、『琉球国由来記』に記載されている「比屋根之殿」に当たると考えられている。

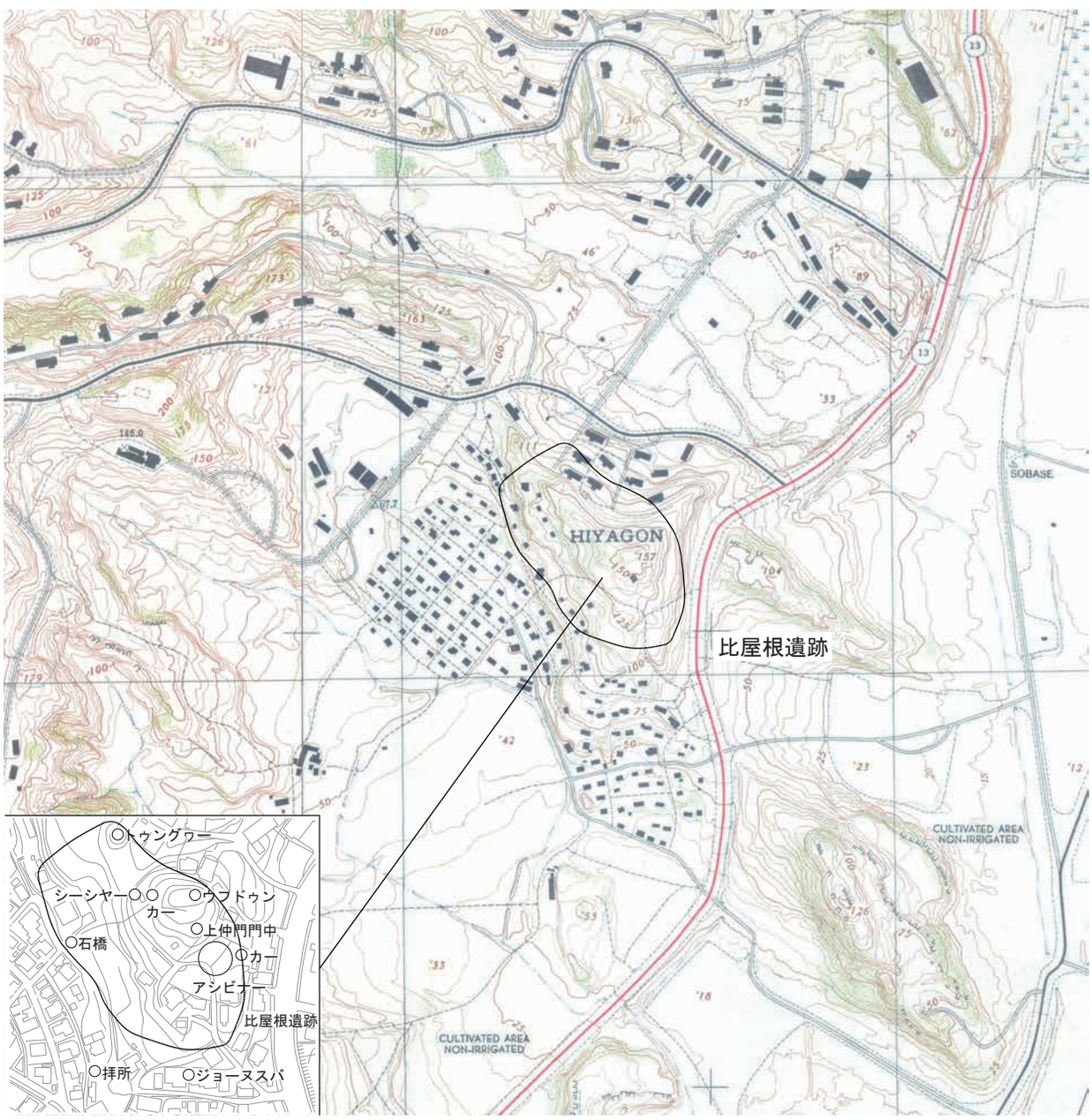
比屋根遺跡の所在する丘陵の南から南西にかけての斜面には、方形状の平坦な区画が階段状に複数見られ、比屋根地域の獅子屋や門中の拝所が複数所在し、その他は耕作地等になっている。この区画には、古い屋敷跡と考えられるものもあり、戦前の比屋根集落の前身だった可能性が考えられる。

また丘陵の北西側には、独立した小山があり、『琉球国由来記』では「小獄」と記載され、「佐久

第１図　調査区周辺の遺跡

真之殿」に比定されると考えられる「殿小（トゥングワー）」が所在する。元々「オシアゲ森」と「小獄」はなだらかにつながった地形だったが、戦後の造成で削られ「小獄」は小山状となっている。本来は大殿が丘陵頂上部に位置し、殿小は北西側になだらかに下る丘陵突端部に位置していたと考えられる。

比屋根遺跡は、沖縄市教育委員会が 1981（昭和 56）年度に実施した遺跡詳細分布調査で、土器や青磁等の中国産陶磁器、沖縄産陶器等が表採され、グスク時代から近世・近代にかけての遺跡であることが確認されている。比屋根遺跡を含む丘陵一帯は、古くはグスク時代から近世・近代を経て現在にいたるまで、脈々と人の営みの痕跡が見られ、集落の変遷過程を考える上で貴重な場所である。



第２図　調査区の位置

※この位置図は 1948 年に米軍が作成した地形図に今回の調査区を加筆したものである。

参考文献

沖縄市教育委員会	『沖縄市の埋蔵文化財』遺跡分布調査報告書	1982 年
沖縄県	『土地分類基本調査　沖縄本島中南部地域　「那覇」「沖縄市南部」「糸満」「久高島」5 万分の 1』	1983 年
沖縄市教育委員会	『沖縄市史　第 2 巻　資料編 1 文献資料にみる歴史』	1984 年
沖縄市教育委員会	『室川貝塚』　沖縄市文化財調査報告書第 20 集	1997 年
沖縄市教育委員会	『馬上原遺跡』　沖縄市文化財調査報告書第 22 集	2000 年
沖縄市教育委員会	『沖縄市の遺跡』沖縄市文化財調査報告書第 28 集	2002 年
沖縄市役所	『沖縄市史　第 4 巻　自然・地理・考古編　－ 自然編 － 』	2007 年
沖縄市役所	『沖縄市史　第 4 巻　自然・地理・考古編　－ 地理・考古編 － 』	2008 年
沖縄市役所	『沖縄市史　第 3 巻　民俗編 － CD 編 － 』	2015 年
沖縄市役所	『2015 年　沖縄市市勢要覧』	2015 年
沖縄市立郷土博物館	『沖縄市の自然　やんばるの入口』	2016 年

第Ⅲ章　調査方法と成果

第１節　調査の方法

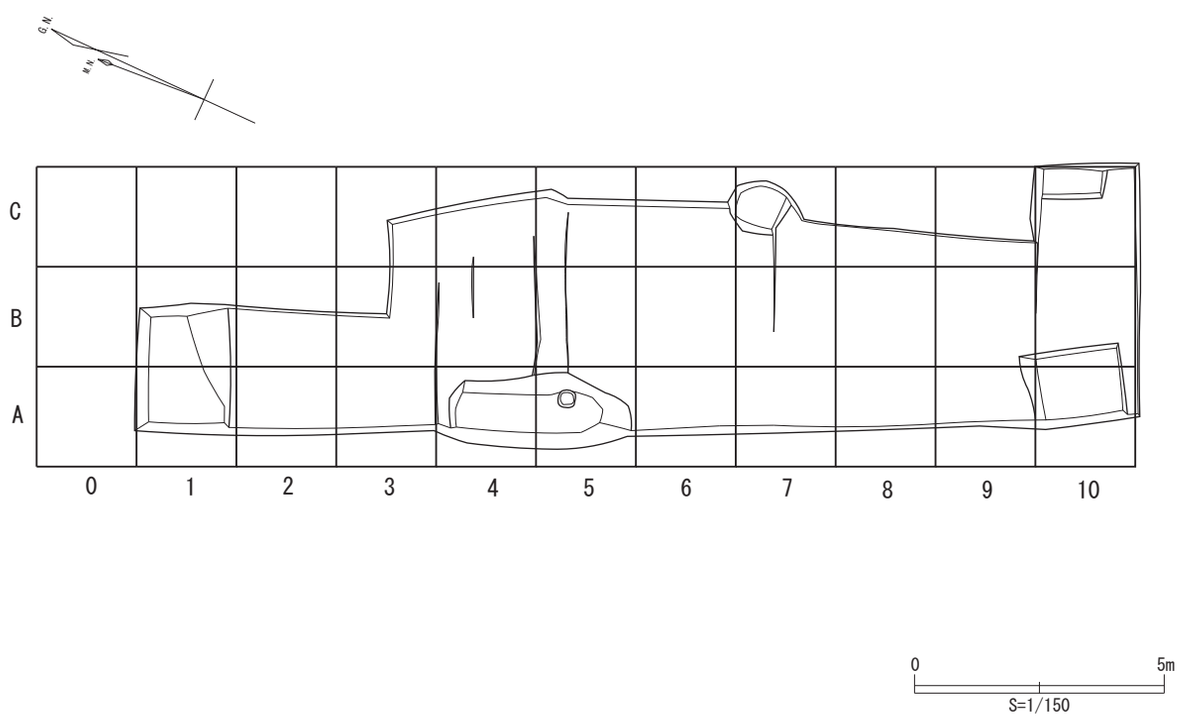
今回の調査区は北西から南西にかけて傾斜する丘陵斜面と頂部の境付近に位置しており、その地目は、集落の拝所への導線となる里道である。里道部分以外は下草や樹木が繁茂しており、それらに埋もれる形で石積み遺構が２基残存していた。

本格的作業の準備として、まずは調査区及びその周辺の伐採・除根作業から開始した。伐採・除根作業後に現況の観察と記録作業（現況の写真撮影、地形測量、石積み遺構の精査・測量・撤去）を実施した。調査区の設定は、避難通路整備計画の設計図に工事による影響範囲を落とし込み、その座標値をもとに現地で割付を行った。そして、発掘調査の管理に供するため、調査区にメッシュをかけて区割りを行うグリッドシステムを用いた（第３図）。グリッドは２ｍメッシュで、調査区の長辺を主軸に、調査区の北西隅を起点にして南東方向に０から 10、北東方向にＡからＣと表記した。これら作業と並行して調査区範囲の表層を磁気探査して安全を確認後に重機掘削を開始した。

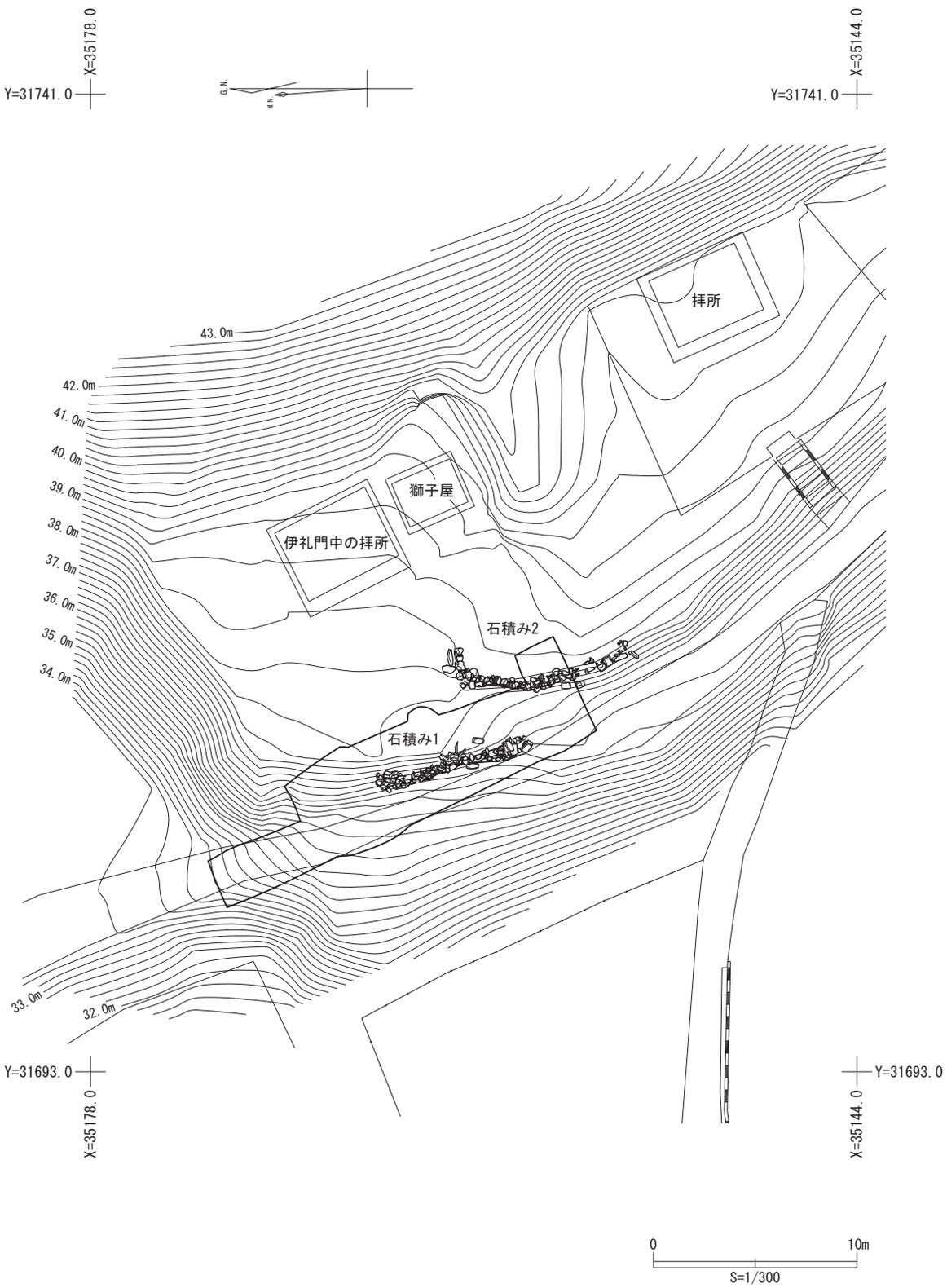
重機掘削は、層序が把握されている、試掘坑のポイントから開始して、遺物包含層の上面を目安に掘り広げていく手法をとった。人力掘削は斜面の傾きに対して直交する方向に設けた土層観察用セクションベルトに沿うようにサブトレンチの掘削を先行させ、掘削する土層の順序と遺物の包含状況の把握に努めた。出土遺物の取り上げには前述のグリッドシステムを用いた。

日々の作業記録や遺構の詳細等の記録写真撮影には、デジタル一眼レフカメラとアナログ一眼レフカメラ（ポジティブカラーフィルム）を併用して行った。

各土層断面及び遺構の実測は全てデジタル写真測量を用い、解析作業を行うことで３次元の点群データを生成してオルソ画像を作成し、CAD ソフトでデジタルトレースを行っている。



第３図　調査区のグリッド設定図


X=35178.0
Y=31741.0
G.N.
M.N.
X=35144.0
Y=31741.0
拝所
43.0m
42.0m
41.0m
40.0m
39.0m
38.0m
37.0m
36.0m
35.0m
34.0m
獅子屋
伊礼門中の拝所
石積み2
石積み1
33.0m
32.0m
Y=31693.0
X=35178.0
Y=31693.0
X=35144.0
0
10m
S=1/300

第４図　調査区の現況

第２節　層序

今回の調査区は南西側に傾斜する丘陵斜面地に位置しており、標高は 34 m～ 39 mを測る。この斜面の堆積土の層厚は 1.5 ～ 1.8 mである。先に実施された試掘調査において近世からグスク時代にかけての遺物包含層等が確認されていたが、今回の本調査においてこれらの詳細がより具体的となった。なお、後述の基本層はそれぞれ土質・色調等でさらに細分されているが、これら各層の詳細については層序一覧表を参照願いたい。

基本層序

堆積土の層序は５つに区分されるため、これらを当該区域の基本層序として設定した。

Ⅰ層：表土及び現代の攪乱土

現況の表土・本調査前に実施した試掘坑の埋め戻し土・現代の攪乱土の３種 (Ⅰａ～Ⅰｃ層) に大きく分けられる。タバコのパッケージ片やガラス片等の現代の廃棄物が出土する。

Ⅱ層：近現代の造成土

表土の直下にあたる近現代の造成土である。調査区北東に隣接する敷地の堆積で、２基の石積み遺構の裏込め土にあたる。石積みの補修の際に乱された層とその下層の２種（Ⅱａ・Ⅱｂ層）に分けられる。直径約５～ 20cm 程度の小礫や炭片・焼土片・貝殻片を微量に含む砂質土である。

Ⅲ層：近世の遺物包含層

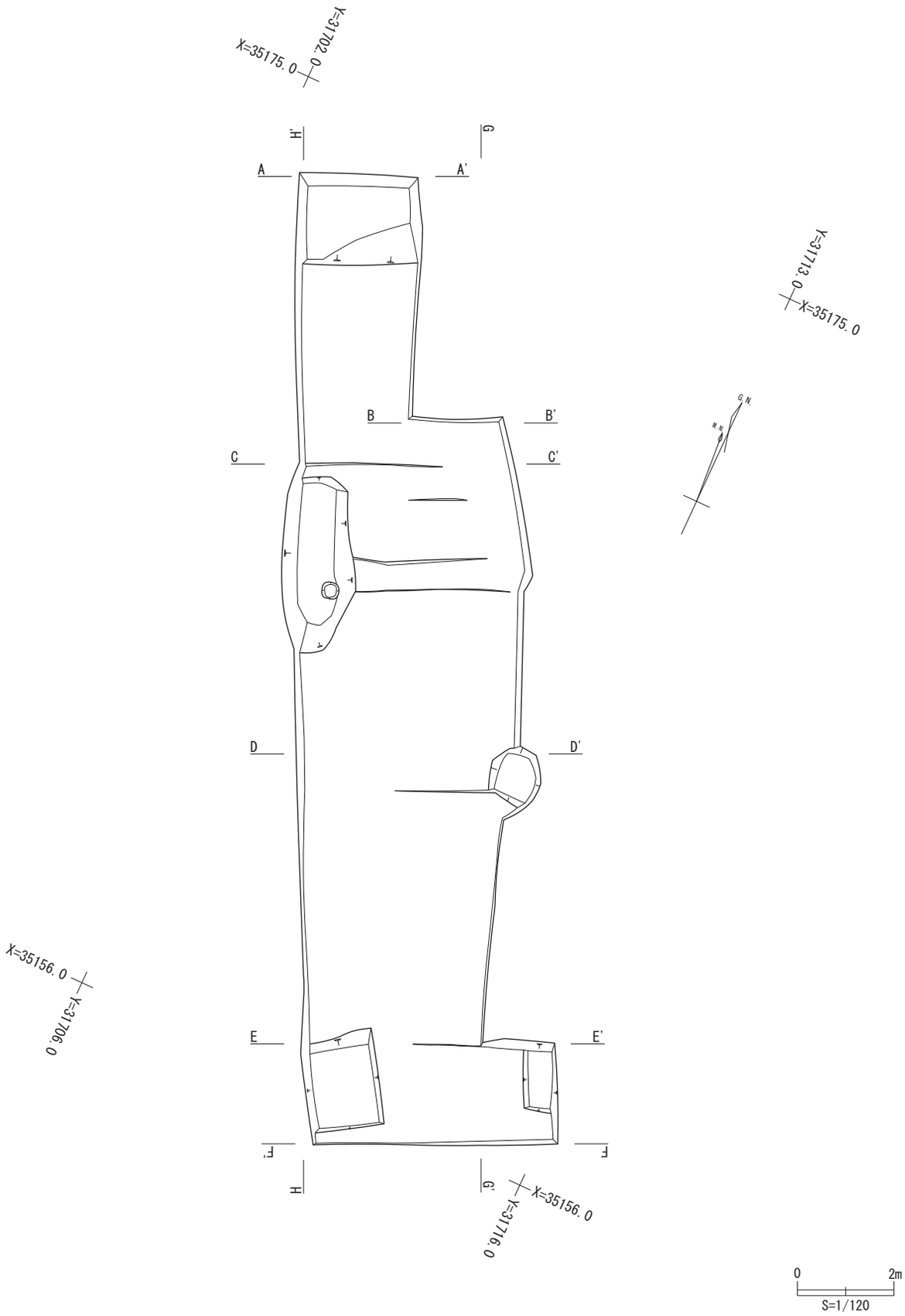
本調査区において最も厚い堆積土である。貝殻・貝製品・獣骨片・土器・カムィヤキ・陶磁器片等が出土する。陶磁器類は、グスク時代から近世にかけての遺物が出土する。この遺物包含層は大きく３層に区分され（Ⅲａ・Ⅲｂ・Ⅲｃ層）、Ⅲａ・Ⅲｂ層は黄褐色～黒褐色系の砂質土である。Ⅲａ層には遺棄された貝殻が多数出土する混土貝層が含まれ、この層は後述する貝溜まりの埋土となる。Ⅲｃ層はにぶい黄色系の粘質土で、地山の泥岩層（クチャ）を由来とする人為的に入れられた近世の造成土と考えられる。

Ⅳ層：グスク時代の遺物包含層

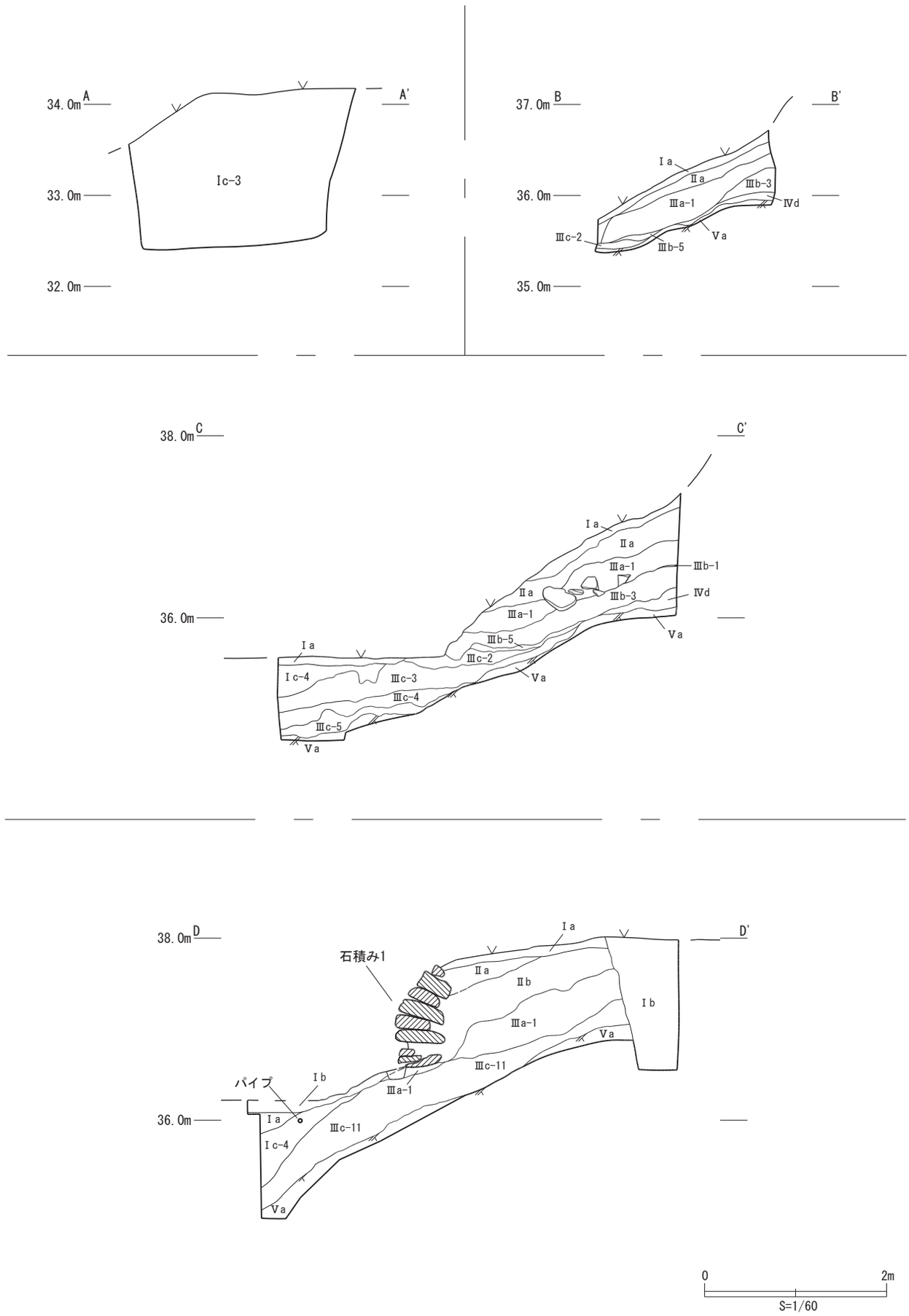
主に調査区中央付近の北東端部付近での堆積がみられる。暗灰黄色～黒褐色系の砂質土で、４層に区分された遺物包含層（Ⅳａ～Ⅳｄ層）と後述する土坑３の埋土（Ⅳｅ層）の５種に分けられる。遺物はグスク土器片・青磁片のみである。

Ⅴ層：地山

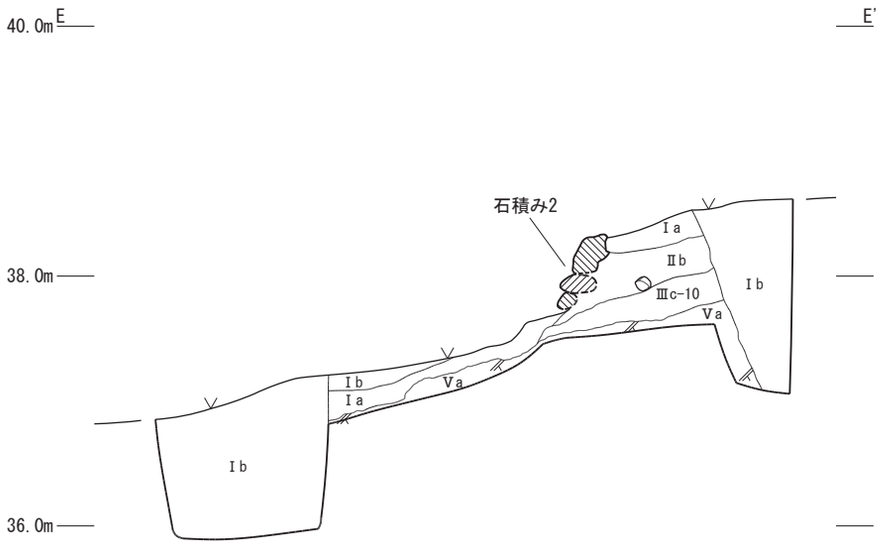
島尻層群泥岩層（クチャ）である。風化気味で柔らかい岩質のものと、硬い岩質の２種に分けられる。

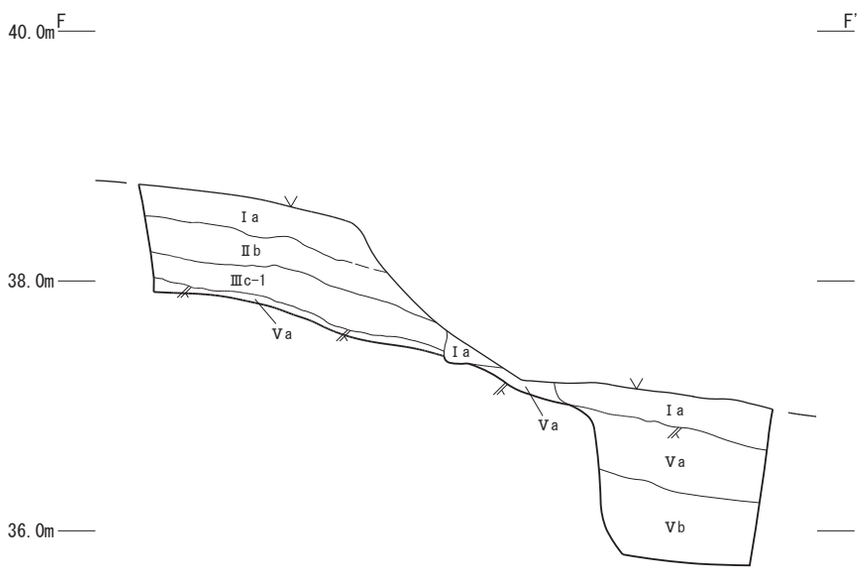


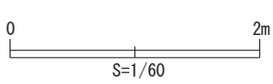
第５図　調査区のセクションポイント


34.0m A
A'
33.0m
32.0m
Ic-3
37.0m B
B'
36.0m
35.0m
Ⅰa
Ⅱa
Ⅲb-3
Ⅲa-1
Ⅳd
Ⅲc-2
Ⅲb-5
Ⅴa
38.0m C
C'
36.0m
Ⅰa
Ⅱa
Ⅲa-1
Ⅲb-1
Ⅲb-3
Ⅳd
Ⅲb-5
Ⅲc-2
Ⅴa
Ⅰc-4
Ⅲc-3
Ⅲc-4
Ⅲc-5
38.0m D
D'
36.0m
石積み1
Ⅰa
Ⅱa
Ⅱb
Ⅰb
Ⅲa-1
Ⅴa
Ⅲc-11
パイプ
Ⅰb
Ⅲa-1
Ⅰc-4
Ⅲc-11
0
2m
S=1/60

第６図　調査区　断面図１


40.0m
E
E'
38.0m
36.0m
石積み2
Ⅰa
Ⅱb
Ⅲc-10
Ⅰb
Va
Ⅰb
Ⅰa
Va
Ⅰb


40.0m
F
F'
38.0m
36.0m
Ⅰa
Ⅱb
Ⅲc-1
Va
Ⅰa
Va
Ⅰa
Va
Vb


0
2m
S=1/60

第７図　調査区　断面図２

G'
H'
0
2m
S=1/120
40.0m G
38.0m
36.0m
34.0m
32.0m
40.0m H
38.0m
36.0m
34.0m
32.0m

第８図　調査区　断面図３

第１表　土層観察表

基本層序	層名	種別	記号	土色名	特徴
Ⅰ層	Ⅰａ	表土	10YR5/2	灰黄褐色砂質土	調査区現況の地表土。
	Ⅰｂ	攪乱土	2.5Y5/3	黄褐色砂質土	前回の試掘坑№１・№２・№10の埋め戻し土。
	Ⅰc-1		2.5Y5/2	暗灰黄色粘性砂質土	樹根による攪乱土である。
	Ⅰc-2		2.5Y5/3	黄褐色砂質土	地表土直下に部分的にみられる攪乱土。
	Ⅰc-3		2.5Y5/3	黄褐色砂質土	調査区が位置する丘陵部を北西方向へ大きく削平した後、埋め戻された攪乱土である。
	Ⅰc-4		2.5Y4/2	暗灰黄色粘性砂	比較的新しい時期に埋め戻され、その後水道管を埋設している。タバコのパッケージ片やガラス片等現代に属する遺物が出土する。
	Ⅰc-5		2.5Y5/3	黄褐色粘性砂質土	Ⅰｃ層と同時期攪乱土と推定しているが、Ⅰｃ層より色調が明るめであるので、Ⅱ層の可能性もある。
Ⅱ層	Ⅱａ	近・現代層	2.5Y5/4	黄褐色粘性砂質土	やや粘質気味であるが、締りは良くない。クチャの破砕が由来となる粒（Φ 10～20mm 程度）を微量に含む。貝殻の細片も微量に混じる。
	Ⅱｂ	近・現代層	10YR6/3	にぶい黄橙色砂質粘土	石積み２の裏込土である。締りが悪く、乾燥し易い土質である。炭片・焼土片・貝殻片を微量に含み、Φ５～20㎝程度の小礫も少量含まれる。
Ⅲ層	Ⅲa-1	遺物包含層（近世）	2.5Y5/3	黄褐色粘性砂質土	やや粘質気味で締りが良い。クチャの破砕が由来となる粒（Φ１～2㎝）とともに、炭片・焼土片・貝殻片を微量に含む。グスク時代から近世の陶磁器片が出土する。
	Ⅲa-2	貝溜まり層	2.5Y4/2	暗灰黄色貝殻片混じり粘性砂質土	やや粘性気味であるが、貝殻片を多く含む（80％程度）ため、締りは良くない。グスク時代から近世にかけての陶磁器片に加え、刀子と考えられる鉄製品が出土している。また、層の下位より牛の下顎骨も出土している。
	Ⅲb-1	遺物包含層（近世）	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘性砂質土	粘性気味で締りが良い。クチャの風化が由来の砂質土がブロック状に入るため、他の遺物包含層に比してシルト気味である。炭片・焼土片・貝殻片を微量に含み、グスク時代から近世の陶磁器片が出土する。
	Ⅲb-2		2.5Y5/3	黄褐色粘性砂質土	粘性気味で締りは良いが、Ⅲｃ層よりは良くない。炭片・焼土片・貝殻片を微量に含むが、Ⅲｃ層よりは少ない。グスク時代から近世の陶磁器片が出土する。
	Ⅲb-3		5Y4/3	暗オリーブ粘性砂質土	やや粘質気味で締りが良い。クチャの破砕が由来となる粒（Φ３～5㎝）を多く含み、炭片・焼土片・貝殻片を微量に含む。グスク時代から近世の陶磁器片が出土する。
	Ⅲb-4		5Y3/2	オリーブ黒色粘性砂質土	やや粘質気味で締りが良い。炭片・焼土片を少量含み、貝殻片の出土は遺物包含層の中でも最も少ない。グスク時代から近世にかけての陶磁器片が出土する。
	Ⅲb-5		2.5Y3/1	黒褐色粘性砂質土	色調･土質ともにⅣｄ層に似るが､粘性は弱く､締りも良くない。焼土片を微量に含む。
	Ⅲc-1	遺物包含層（近世の造成土）	2.5Y6/3	にぶい黄色砂質粘土	粘性気味の砂質土で、締りは良い。クチャの破砕が由来となる粒（Φ３～5㎝）を微量に含んでいる。
	Ⅲc-2		2.5Y6/3	にぶい黄色砂質粘土	やや粘性気味で締りが良い。クチャの破砕が由来となる粒（Φ１～2㎝）を多く含み、貝殻片を微量に含む。造成土の中でも比較的均質で安定している。
	Ⅲc-3		2.5Y6/3	にぶい黄色砂質粘土	土質は粘質気味であるが､締りは良くない｡クチャの破砕が由来となる粒（Φ１～2㎝）を微量に含んでいる。
	Ⅲc-4		2.5Y6/3	にぶい黄色砂質粘土	色調はⅢａ層と同じである。土質もⅢａ層と似るが、やや粘性が強く、締りは同程度である。クチャの破砕が由来となる粒（Φ１～2㎝）の混入は比較的多い。
	Ⅲc-5		2.5Y6/4	にぶい黄色砂質粘土	Ⅳｄ層と同じく､クチャの破砕が由来となる粒（Φ 10～20mm 程度）を多く含むが、比較的粘性が強く、締りが良い。貝殻片を含めた遺物は出土しない。
	Ⅲc-6		2.5Y7/4	浅黄色砂質粘土	粘性は強いが、締りは良くない。全体的な特徴はⅢａ層に近似する。
	Ⅲc-7		5Y5/1	灰色砂質粘土	Ⅲｄ層とⅣ層が混じり合ったような色調となる。土質は粘性が強く、締りが良い。炭片と焼土片を微量に含んでいる。
	Ⅲc-8		2.5Y7/4	浅黄色砂質粘土	色調･土質ともにⅢｄ層に近似するが、貝殻片を含んでいるのが、本層の特徴である。
	Ⅲc-9		5Y5/1	灰色砂質粘土	粘性は強いが締りは良くない。焼土片と貝殻片を微量に含んでいる。
	Ⅲc-10		2.5Y6/2	灰黄色砂質粘土	やや粘性で締りは良い。クチャの破砕が由来となる粒の混入は少なく均質である。
	Ⅲc-11		2.5Y6/4	にぶい黄色砂質粘土	やや粘性気味で締りが良い。クチャの破砕が由来となる粒（Φ１～2㎝）の混入は見られるものの、造成土の中でも比較的均質で安定している。
Ⅳ層	Ⅳａ	遺物包含層（グスク時代）	2.5Y4/2	暗灰黄色砂質土	やや粘性気味で締りが良い。混入している炭片・焼土片は、Φ 50mm～100mm 程度と粒が比較的大きい。
	Ⅳｂ		2.5Y3/2	黒褐色粘性砂質土	土質はⅣａ層と近似し、やや粘性気味で締りが良いが、色調は暗い。
	Ⅳｃ		2.5Y4/1	黄灰色粘性砂質土	土質はⅣｂ層と近似し、やや粘性気味で締りが良いが、下層の地山（クチャ）と同質の土がブロック状に入る。炭片と焼土片が微量に含まれる。
	Ⅳｄ		2.5Y3/1	黒褐色粘性砂質土	土質はⅣｂ層・Ⅳｃ層に近似するが、焼土片の混入が目立つ。貝殻片も微量に含まれている。
	Ⅳｅ	土坑３の埋土	5Y4/1	灰色砂質粘土	水分を多く含み、粘性も強いが、締りはあまり良くない。貝殻片・炭片・焼土片を微量に含んでいる。遺物はグスク時代のもの（グスク土器片・青磁片）のみが出土している。
Ⅴ層	Ⅴａ	地山	2.5Y6/3	にぶい黄色シルト	本来は硬質であるクチャの岩盤が風化した層である。酸化鉄を由来とする縞状の節理が全体的にみられるも、破砕して脆弱となった個所も散見される。
	Ⅴｂ		2.5Y5/1	黄灰色シルト	風化や破砕がみとめられない硬質のクチャの岩盤層である。

第 3 節　遺構

本調査区では近代からグスク時代にかけての石積み・集石・貝溜まり・土坑・ピットが確認されている。これら遺構の年代も近代からグスク時代にかけてと時期幅がある（第 9 ～ 20 図）。

以下、遺構ごとにその概要を述べる。

1. 石積み

この遺構は調査区の南半部において、南北方向に 2 基確認されている。これらの石積みは現地表土上に露出しており、調査前からその存在は確認済みであった。

これらの石積みは、調査区の北東に隣接する獅子屋と伊礼門中の拝所がある方形状の平坦な区画から調査区西端部を南北方向に走行する里道へと繋がる小道の東西端部にそれぞれ構築されている。

この小道は里道から敷地へアプローチの際の傾斜を解消するために等高線上に設えてある。

以下、各石積みの観察所見を記す。

1）石積み 1（第 9・10 図　図版 5）

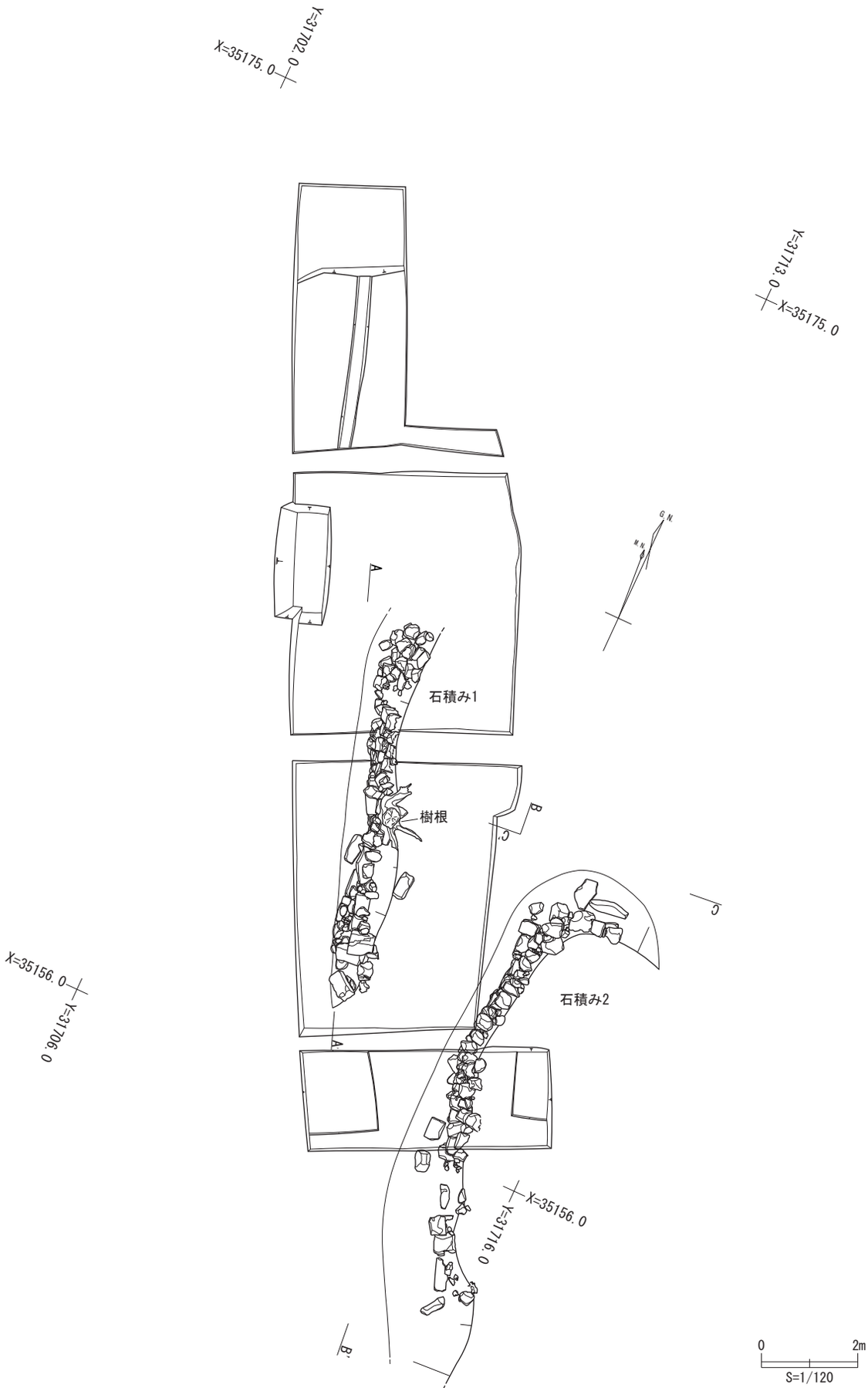
この石積みは調査区の西に隣接する里道の東側斜面に構築されている。長軸方向の残存長は約 8.0 m、高さ約 0.8 ～ 0.9 m、幅約 0.6 ～ 0.9m を測る。この石積みを構成する各石は不統一で、間知石・割石・野面石が混在しているため、全て転用石材と考えられる。各石の長径は約 20 ～ 60cm である。各石の配置は基本的に横長手を意識しているが、積み方に規則性は無く乱雑である。里道の東側斜面の崩落防止を目的に作られたのであろう。

石積みの基底部付近は地中に埋没していたため、地表に露出していた石積み部分を除去後に精査を実施したところ、各石材の最も広い平坦面を天端とする 8 つの石で構成された石列が残存していた。各石材の長径は約 40 ～ 50cm、短径は約 20 ～ 40cm を測る。これら基底石は、近世の遺物包含層（Ⅲ a 層）を切り込んで据えられており、石積み背後の裏込め土は近現代の造成土（Ⅱ a・Ⅱ b 層）を充填している。

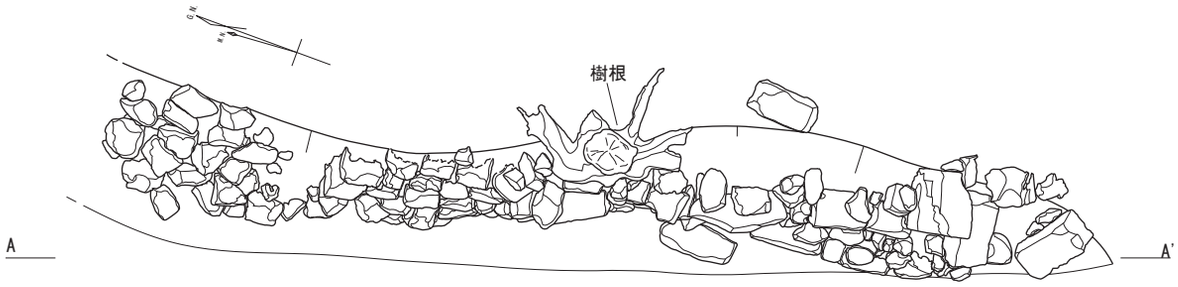
この石積みに関連する遺物は、裏込め土及び基底石直下からの出土である。青磁や染付の破片が出土しているが、近現代のガラス片や陶磁器類も混在している。

2）石積み 2（第 9・11 図　図版 6）

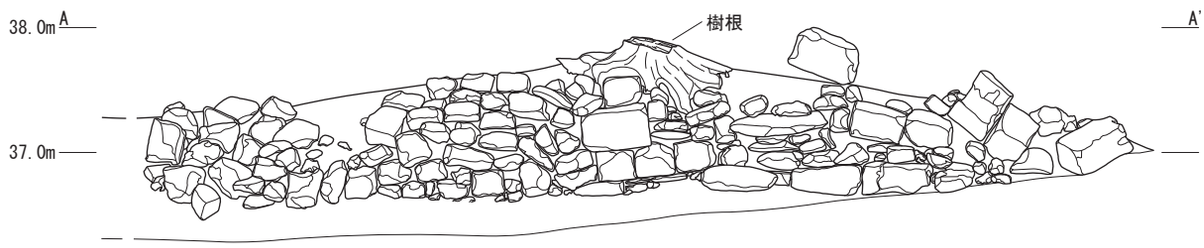
この石積みは調査区の東に隣接する平坦部の西縁辺に構築されている。この平坦部は石積みの北端部を東側に屈曲させており、長軸方向の残存長は約 9.6 m、高さ約 0.9 m、幅約 0.4 ～ 0.9m を測る。この石積みを構成する各石は不統一で、間知石・割石・野面石が混在し、各石の長径は約 20cm ～ 60cm である。石積み 1 と同様、積み方に規格は無く乱雑である。このことから、石積み 1 と同様に、敷地平坦部の西側縁辺の崩壊を防ぐために、作られたのであろう。この石積みの最下段は近現代の造成土（Ⅱ a 層）上に設えてあり、石積み背後の裏込め土も同じ近現代の造成土を充填している。


X=35156.0
Y=31716.0
B'
X=35156.0
Y=31716.0
石積み2
A'
C
B
C'
樹根
石積み1
A
G N
M N
X=35175.0
Y=31713.0
X=35175.0
Y=31702.0
0
2m
S=1/120

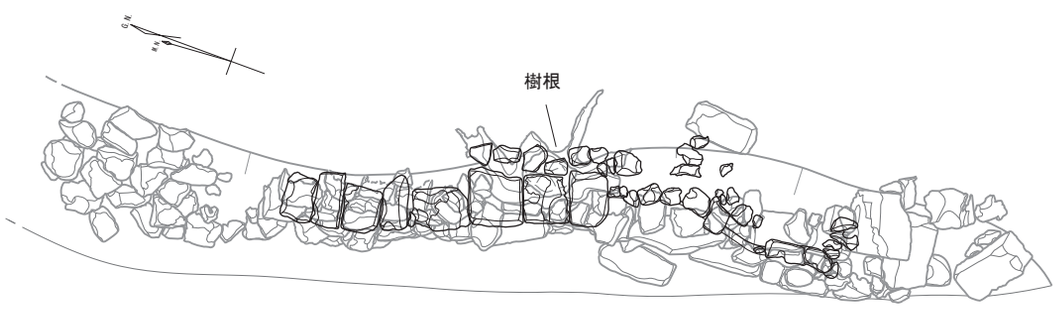
第９図　石積み　位置図



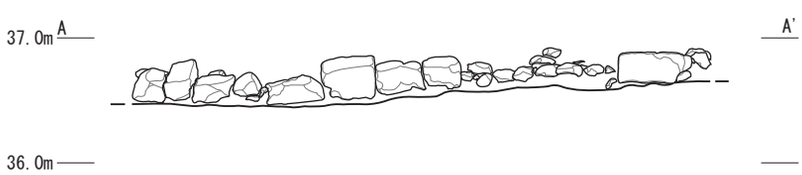
石積み1　平面図



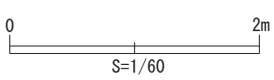
石積み1　立面図



基底部　平面図

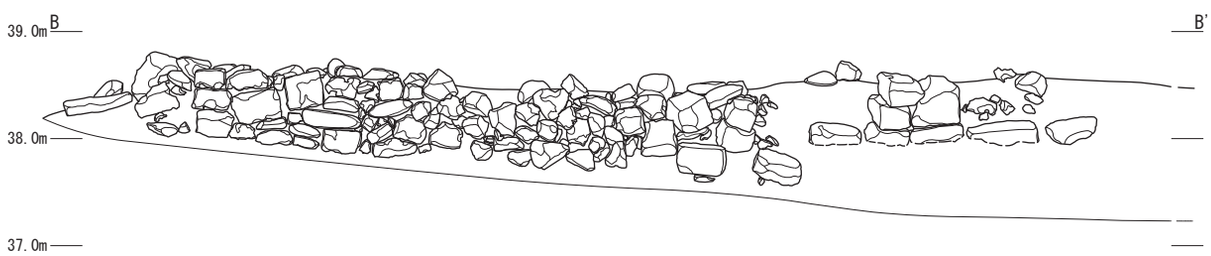


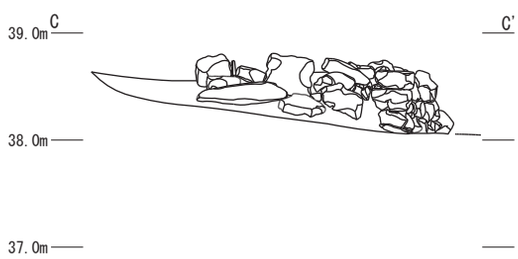
基底部　立面図



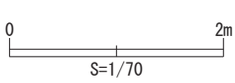
第 10 図　石積み 1　基底部　平面・立面図

石積み2　平面図

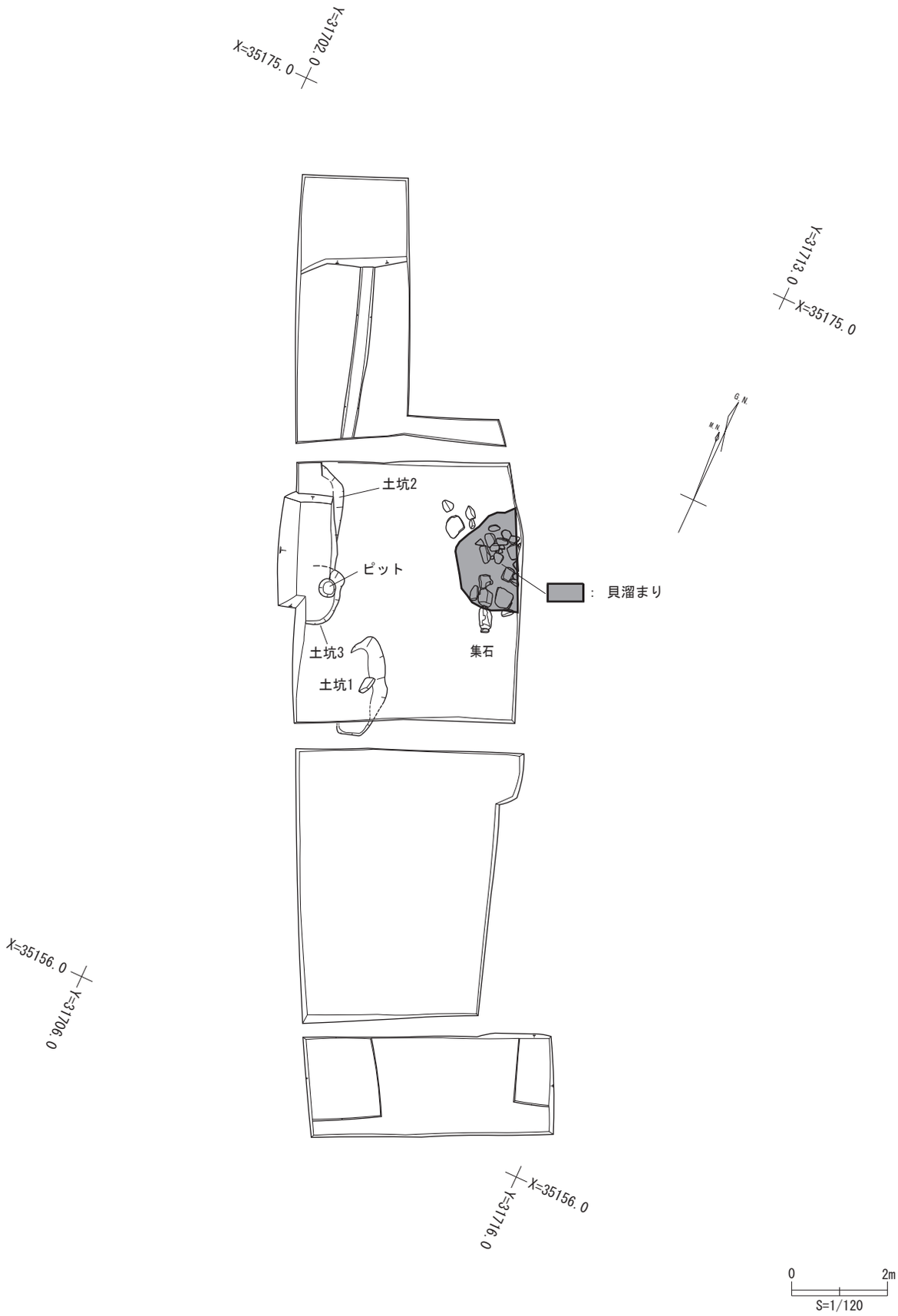




石積み2　立面図



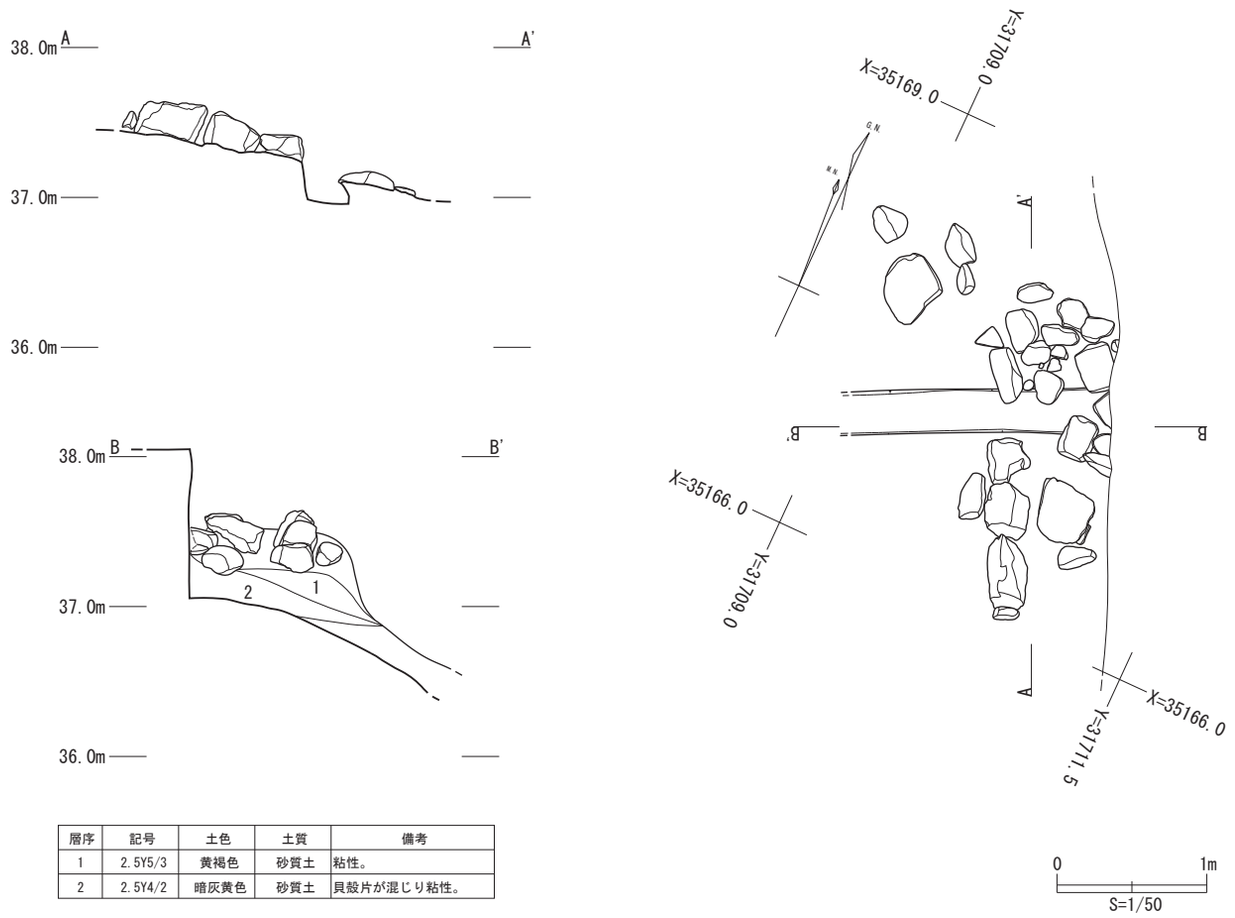
第 11 図　石積み 2　平面・立面図



第 12 図　近世～グスク時代遺構　位置図

2. 集石（第 13 図　図版 8）

この遺構は調査区の中央やや北より付近の 4C・5C 区で確認した。各石の長径は約 10 ～ 50cm である。遺構の性格を示す意図的な石の配置は見られないが、斜面と平坦部の境目付近の石が横長手に立石して残存していることから、元々はその付近での土留め用の石材であった可能性が考えられる。調査区内での集石の範囲は、長径約 2.8 m、短径約 1.6m を測り、その範囲は東側の調査区外へ広がる可能性がある。各石との共伴遺物は無かったため明確な帰属時期は不明であるが、各石の接地面が近世の遺物包含層（Ⅲ a 層）上面の直上であることから、古くは近世につくられた可能性がある。

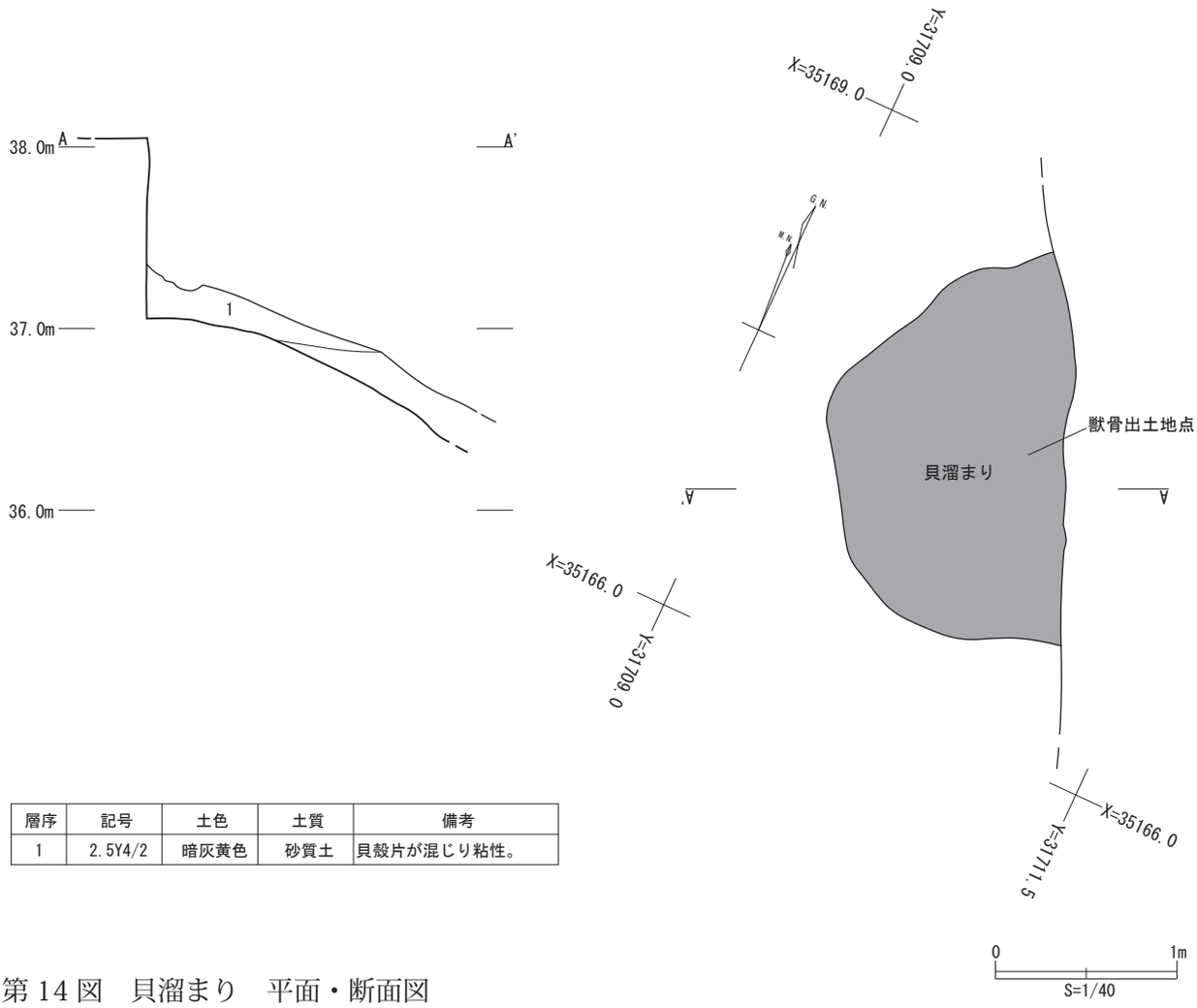


層序	記号	土色	土質	備考
1	2.5Y5/3	黄褐色	砂質土	粘性。
2	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質土	貝殻片が混じり粘性。

第 13 図　集石　平面・断面図

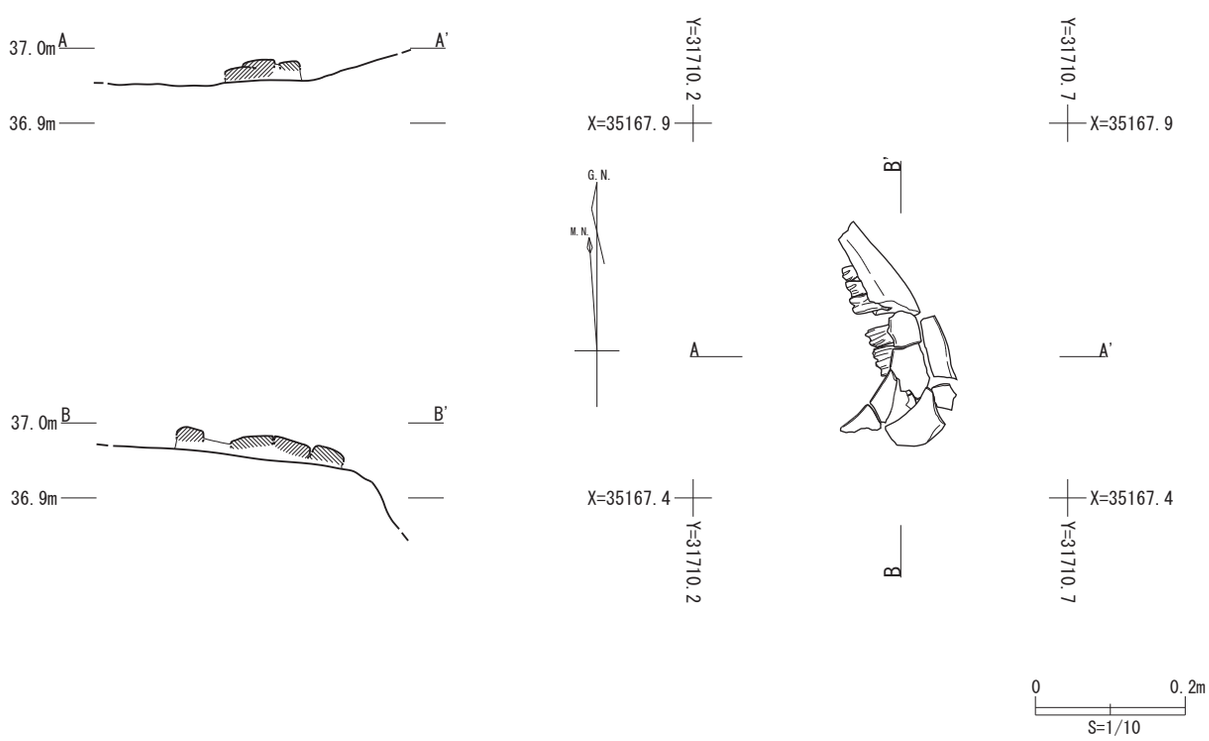
3. 貝溜まり（第 14・15 図　図版 8・9）

この遺構は 4C・5C 区において集石直下で確認した。近・現代層であるⅡ層とこの層に埋没していた集石を除去すると、貝殻片を多量に含む楕円形状の輪郭がみとめられた。その範囲は調査区の東側の調査区外へと広がりを見せているため全体の大きさは不明であるが、調査区内での範囲は、長径約 2.2m、短径約 1.3m を測る。埋土は単層でその層厚は約 40cm である。土質は暗灰黄色の砂質土で、やや粘質であるが、貝殻片を多く含むためその締まりは良くない。土坑のような明瞭な掘り方は無いが、貝殻片が無くなり、締まりの良い土に変化するまでが埋土の範囲と想定し掘削を行った。遺物は埋土中から多量の貝殻片に加え、貝製品（第 41・42 図、図版 33）・陶器片・鉄製品が出土し、遺構の底面付近において、牛の下顎骨が 1 点出土している。この下顎骨は埋納したものかは不明である。



層序	記号	土色	土質	備考
1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質土	貝殻片が混じり粘性。

第 14 図　貝溜まり　平面・断面図

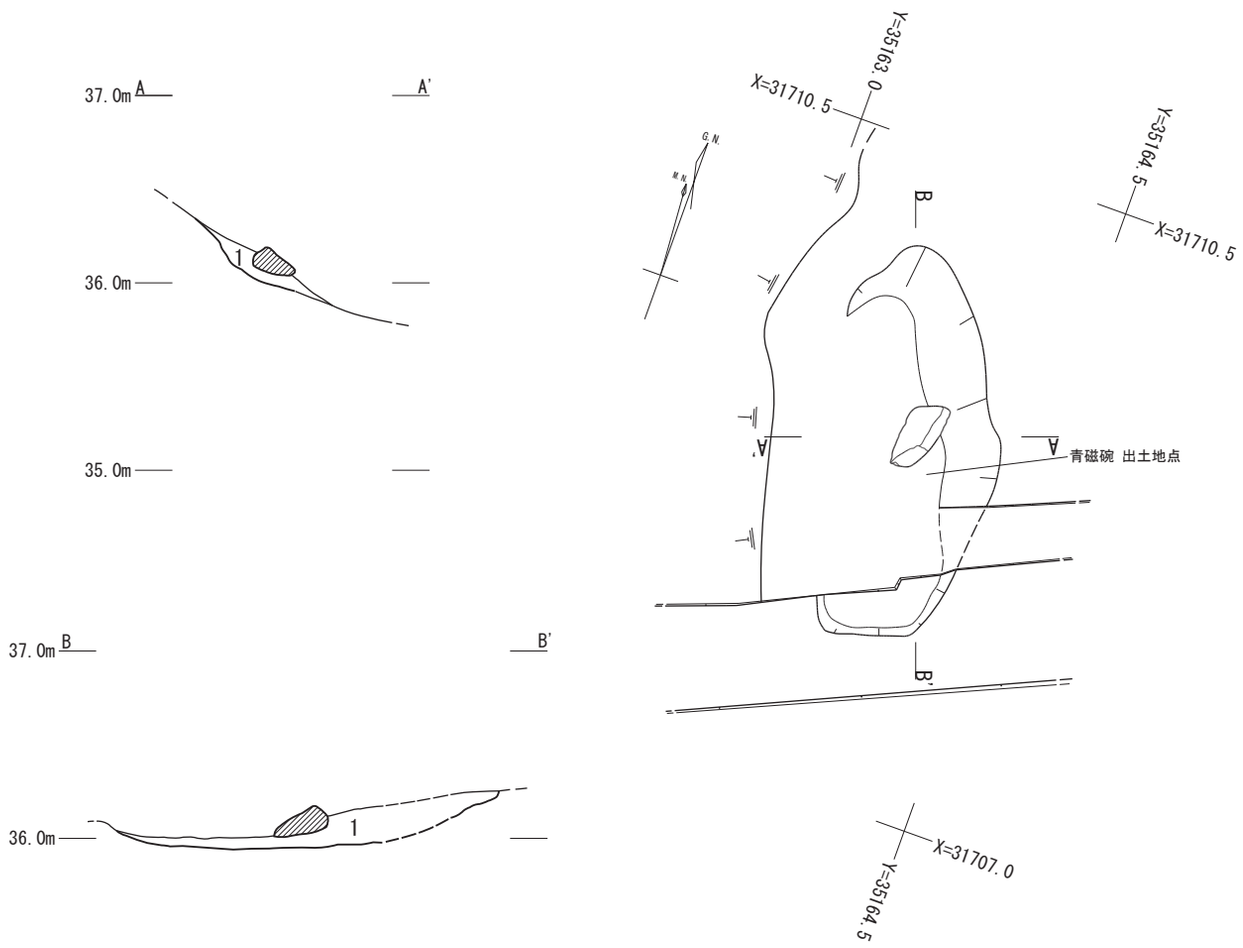


第 15 図　獣骨出土状況　平面・断面図

4. 土坑 1（第 16 図　図版 10）

この遺構は調査区の中央やや西より付近の 5A・5B・6A・ 6 B 区で確認した。遺構の平面形状は楕円形で、その規模は長径約 2.1m、短径約 1m、深さ約 20cm である。埋土は単層で黄褐色の砂質土である。この埋土の特徴が近・現代の土層に酷似していたため、当初は攪乱と考えていたが、遺構の輪郭を精査中に、ほぼ完形の青磁碗 1 点（第 24 図 18）が遊離した状態で出土し、その後も近・現代の遺物は出土しなかったため、遺構として扱った。

遺物は埋土から青磁の細片や獣骨片が出土している。遺構の性格は不明であるが、この土坑の検出層位が近世の造成土（Ⅲ c 層）上面であることから判断すれば、その帰属時期は近世の可能性が考えられる。



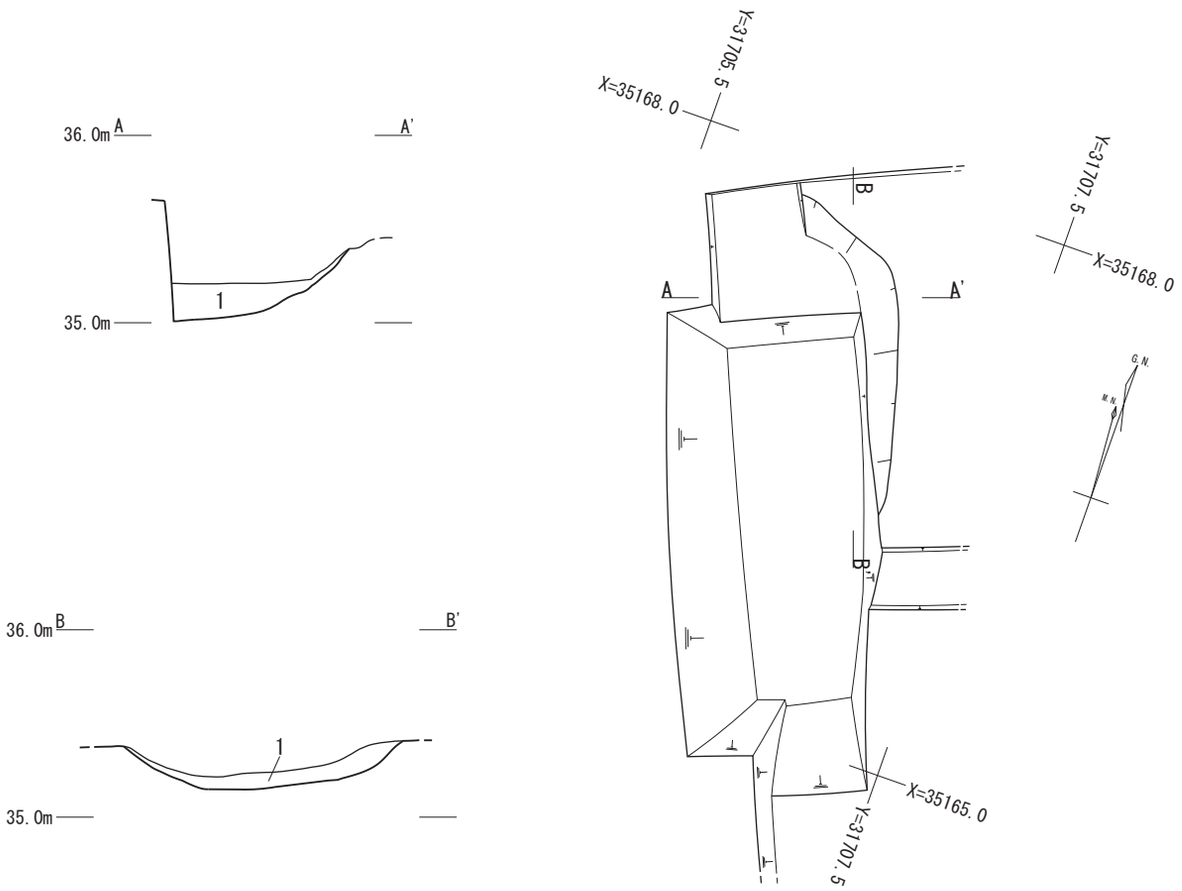
層序	記号	土色	土質	備考
1	2.5Y3/2	黒褐色	砂質土	粘性。

0　1m
S=1/40

第 16 図　土坑 1　平面・断面図

5. 土坑２（第 17 図　図版 10）

この土坑は 4A 区で確認した。遺構の大半が調査区南西端部の仮設水道管敷設工事の攪乱によって失われており、残存する範囲は長径約 1.8 m、短径約 40cm、深さ約 20cm である。埋土は単層で褐灰色の砂質土である。この埋土は本調査前に実施した試掘調査時の試掘坑№５において近世の遺物包含層として認識されていた。遺物は白磁や青花を含む陶磁器の細片が出土している。遺構の性格は不明であるが、この土坑の検出層位が近世の造成土（Ⅲｃ層）上面であることから判断すれば、その帰属時期は近世以降であろう。



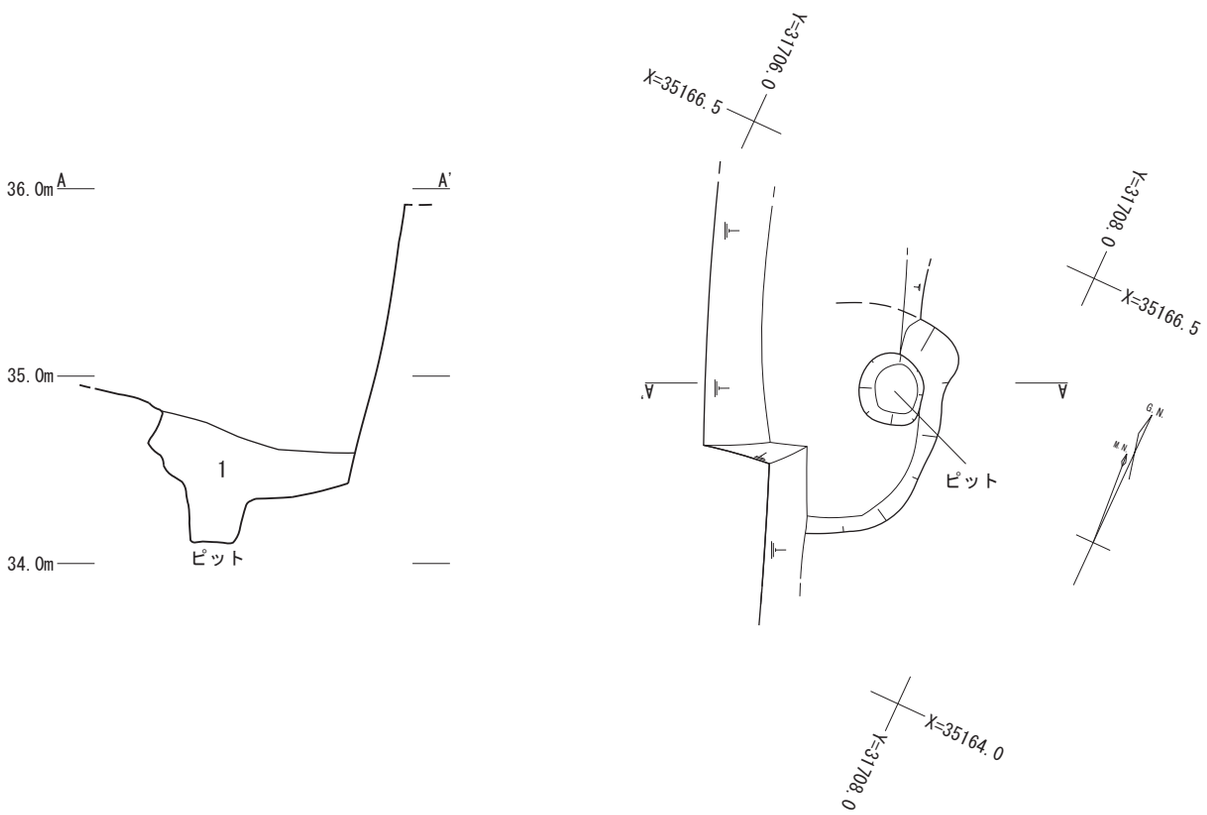
層序	記号	土色	土質	備考
1	10YR4/1	褐灰色	砂質土	粘性。

0　1m
S=1/40

第 17 図　土坑２　平面・断面図

6. 土坑 3（第 18 図　図版 11）

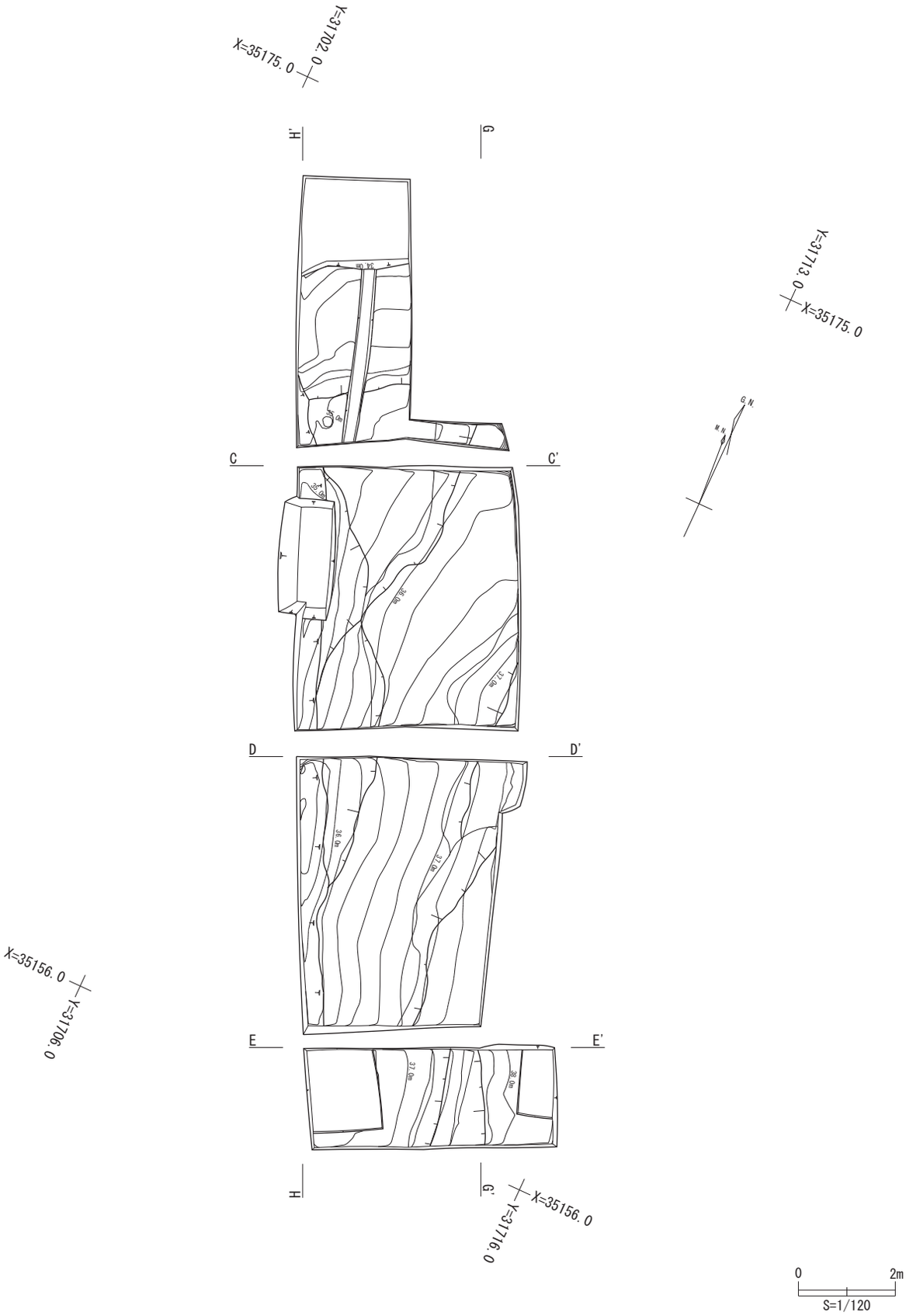
この土坑は 5A 区で確認しており、調査区南西壁を境に調査区外へと続く。遺構の平面形状は隅丸の方形で、その大きさは、調査区外を含めた長径約 1.6m、短径約 1.3m、深さ約 20 ～ 50cm である。埋土は単層で灰色の砂質土である。掘り方の北東隅付近にピット状の小穴 1 基が穿たれており、ピットの大きさは長径 38cm、短径 34cm、深さ 22cm を測る。この小穴の埋土は土坑本体と同質・同色である。小穴を含めたこの土坑の性格は不明である。この土坑の帰属時期を示す遺物は出土していないが、この土坑の検出層位が近世の造成土（Ⅲ c 層）直下であることから判断すれば、その帰属時期はグスク時代の可能性が考えられる。



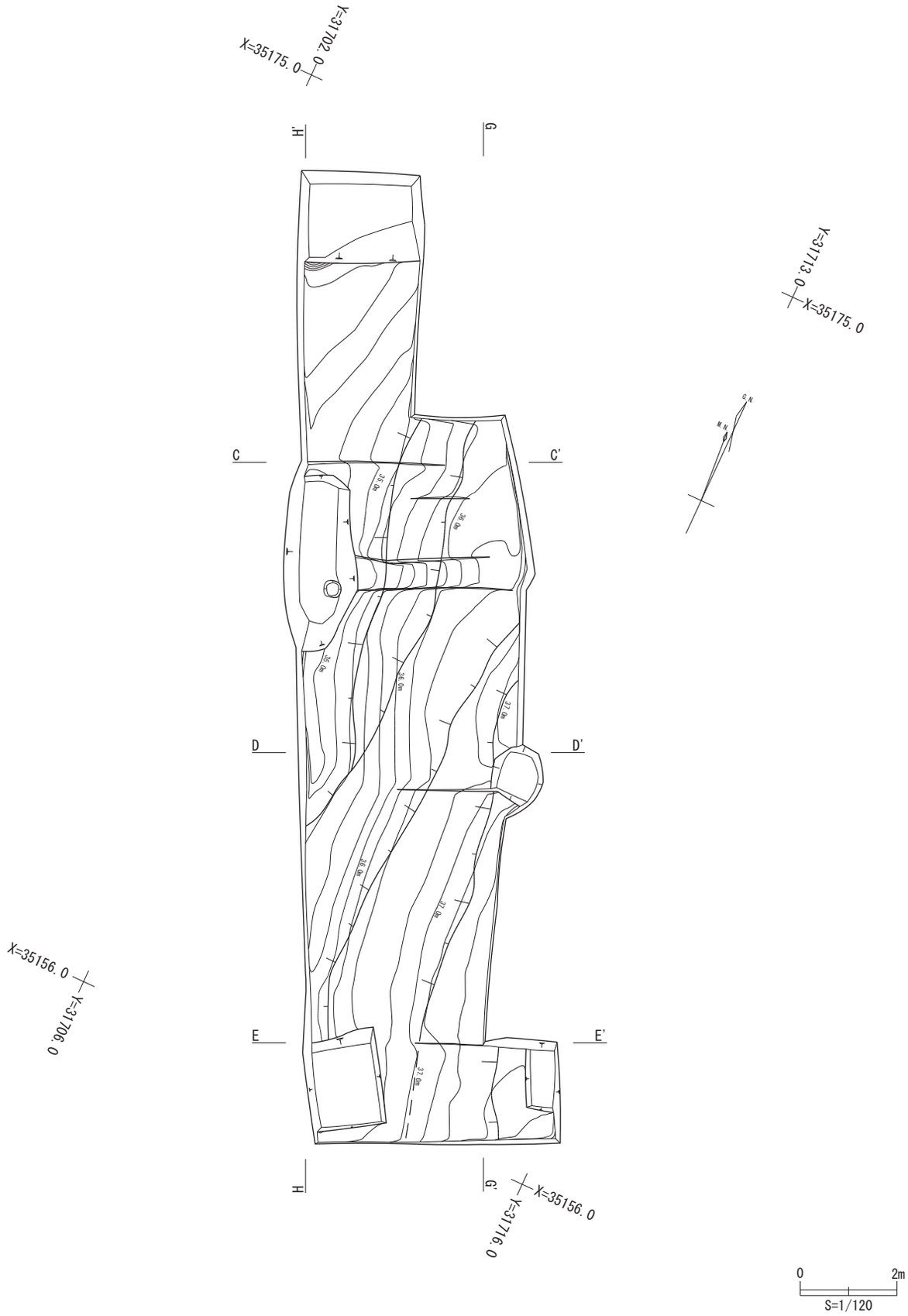
層序	記号	土色	土質	備考
1	5Y4/1	灰色	砂質粘土	

0　1m
S=1/40

第 18 図　土坑 3　平面・断面図



第 19 図　近世造成土の検出状況



第 20 図　調査区の完掘状況

第４節　遺物

本調査地区では、総数 34,873 点の遺物が出土した。最も出土量の多いのは貝類遺体で、33,013 点である。総数の約９割が近世の遺物包含層であるⅢ層から出土している。貝類遺体以外では、グスク土器・中国産陶磁器・沖縄産陶器が主体となり、カムィヤキ・タイ産陶器・ベトナム産染付が少数出土している。その他の遺物としては、瓦・円盤状製品・土製品・石器・骨製品・貝製品・銭貨・金属製品・ガラス製品等が出土している。各種類のうち、特徴的なものを抽出して図化を行った。なお、ガラス製品については、ガラス板の破片やビー玉等の現代遺物であったため、図化は行わず、出土状況表も作成していない。

以下、遺物の種類ごとにその概要を述べる。なお、中国産陶磁器の分類にあたっては、沖縄分類（瀬戸ほか 2007）を参考にしている。

第２表　出土遺物一覧

種類＼層序		表採	層序				遺構				合計
			Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	石積み１	土坑１	土坑２	土坑３	
土器		6	15	22	182	6	2	4	1	－	238
カムィヤキ		－	－	－	6	－	－	－	－	－	6
外国産陶磁器	青磁	5	16	30	77	2	5	2	－	－	137
	白磁	2	5	4	19	－	－	－	1	－	31
	青花	3	10	13	12	－	1	－	1	－	40
	色絵	－	－	1	－	－	－	－	－	－	1
	褐釉陶器	1	7	4	18	－	3	－	1	－	34
	緑釉陶器	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1
	鉄釉陶器	－	－	1	－	－	－	－	－	－	1
	タイ産鉄絵	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1
	ベトナム産染付	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1
本土産陶磁器		3	16	27	11	－	1	－	－	－	58
沖縄産陶器		16	77	97	42	－	13	－	－	－	245
産地不明陶磁器		－	3	5	4	－	－	－	－	－	12
円盤状製品		－	2	4	5	－	－	－	－	－	11
土製品		－	－	－	2	－	－	－	－	－	2
瓦		1	8	4	2	－	1	－	－	－	16
金属製品		－	15	5	9	－	2	－	－	－	31
銭貨		－	1	1	3	－	－	－	－	－	5
石器		1	－	2	2	－	－	－	－	－	5
貝製品		－	6	8	62	－	－	－	－	－	76
骨製品		－	－	1	－	－	－	－	－	－	1
ガラス製品		－	17	7	－	－	2	－	－	－	26
自然遺物	貝類遺体	151	874	1,094	30,387	226	72	166	32	11	33,013
	脊椎動物遺体	2	75	47	311	7	4	16	1	－	463
	炭	－	2	3	－	－	－	－	－	－	5
	焼土	2	24	22	201	7	3	3	1	1	264
	木材	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1
	石	1	15	27	95	5	3	2	－	－	148
合計		194	1,190	1,429	31,452	253	112	193	38	12	34,873

1. 土器・カムィヤキ（第 21 図　第 3・4 表　図版 14）

土器は総数 238 点出土しており、グスク時代の土器と考えられ、全てが小破片である。出土状況としては、表採やⅠ層・Ⅱ層から 43 点、Ⅲ層から 182 点、Ⅳ層から 6 点出土している。遺構に伴うものは 7 点で、石積み遺構から 2 点、土坑 1 から 4 点、土坑 2 から 1 点出土している。内訳は、口縁部が 12 点、胴部が 209 点、底部が 14 点、部位不明が 3 点である。器種は判別可能なものに、羽釜形・甕形・壺形・鍋形がある。このうち特徴的な 10 点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

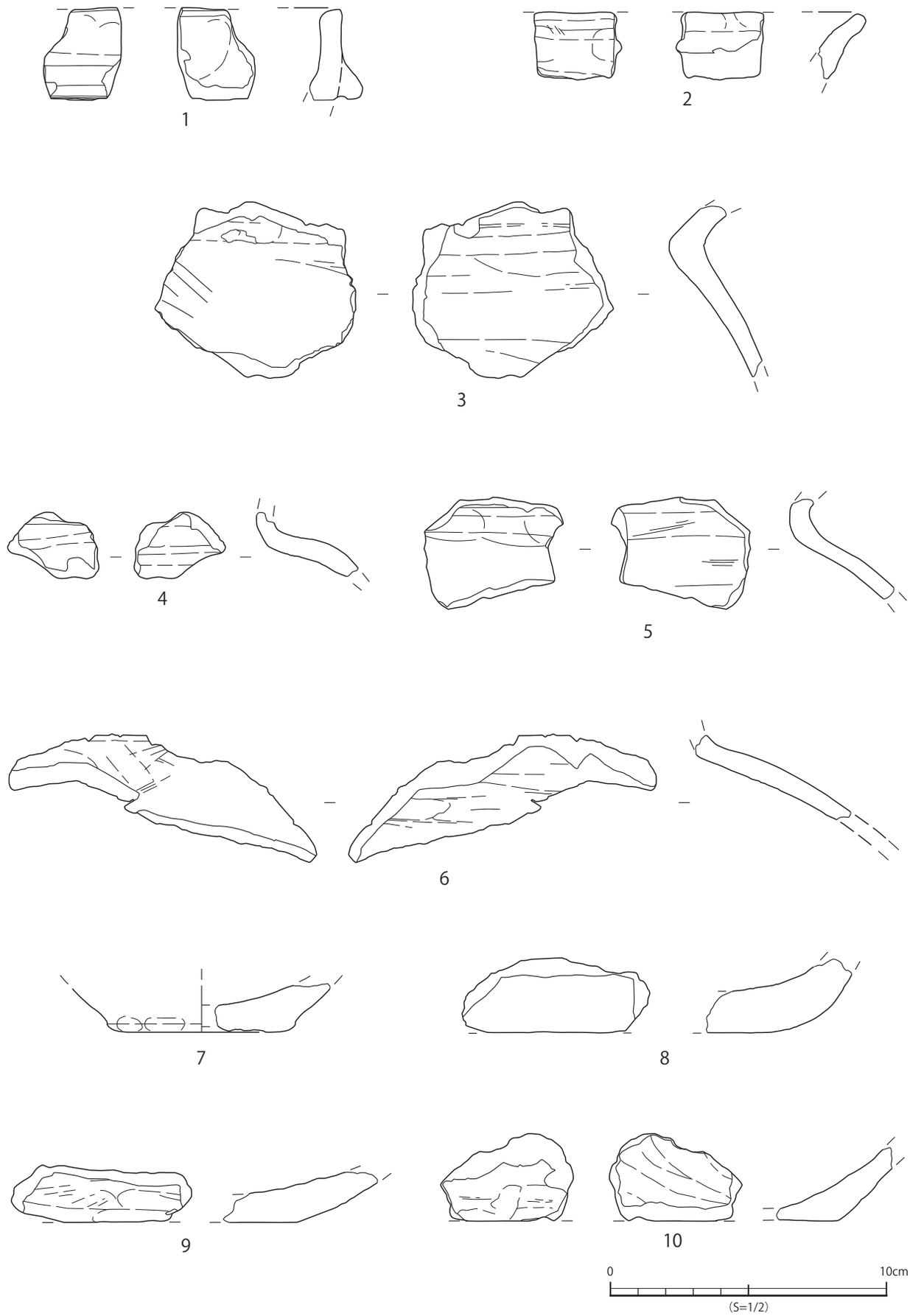
カムィヤキは総数 6 点出土しており、出土状況としては、Ⅲ層からのみである。これら全てが小破片で、器種も不明であるため、図化は出来なかった。

第 3 表　土器・カムィヤキ出土一覧

種類	器種	部位	表採	層序				遺構			合計		
				Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	石積み 1	土坑 1	土坑 2			
グスク土器	鍋形	口縁部	—	—	—	5	1	—	—	—	6	30	238
		胴部	1	4	3	13	—	—	2	—	23		
		底部	—	—	—	—	1	—	—	—	1		
	鍋形？	胴部	—	—	5	12	1	—	—	—	18	18	
	甕形	口縁部	—	1	—	—	—	—	—	—	1	2	
		胴部	—	—	—	1	—	—	—	—	1		
	甕形？	胴部	—	—	—	4	—	—	—	—	4	4	
	鍋・甕形	口縁部	—	—	—	1	—	—	—	—	1	28	
		胴部	—	—	—	18	—	—	—	—	18		
		底部	1	1	—	7	—	—	—	—	9		
	壺形	胴部	—	—	—	3	—	—	—	—	3	3	
	壺形？	胴部	—	—	—	1	—	—	—	—	1	1	
	羽釜形	口縁部	—	—	—	1	—	—	—	—	1	1	
	羽釜形？	胴部	1	—	—	—	—	—	—	—	1	1	
	器種不明	口縁部	—	—	1	2	—	—	—	—	3	150	
		胴部	3	8	11	111	3	1	2	1	140		
		底部	—	1	1	1	—	1	—	—	4		
		部位不明	—	—	1	2	—	—	—	—	3		
カムィヤキ	壺	胴部	—	—	—	1	—	—	—	—	1	1	6
	器種不明	胴部	—	—	—	4	—	—	—	—	4	5	
		底部	—	—	—	1	—	—	—	—	1		
合計			6	15	22	188	6	2	4	1	244		

第 4 表　土器観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	口径 器高 底径 ( ) は推定値	観察所見	出土地
第 21 図 図版 14	1	羽釜形	口縁	— — —	口縁は胴部から垂直に立ち上がる。口唇は平坦に形成し、胴部上位に鍔状の張り出し部を形成する。内外面は丁寧に器面調整される。焼成は良好。	Ⅲ b-2 ～ 4
	2	甕形	口縁	— — —	口縁部を指で押さえ、外反させる。内外面は丁寧に器面調整される。胎土に白色粒や黒色粒を含み、焼成は良好。	Ⅰ a
	3	甕形	胴部	— — —	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁に向かい外反する。外面は丁寧に器面調整されるが、内面は工具痕が残る。胎土に白色粒や赤褐色粒を多く含む。焼成はやや良好。	Ⅲ a-1
	4	壺形	胴部	— — —	肩部は張り、頸部から口縁に向け緩やかに外反しながら立ち上がる。外面は丁寧に器面調整されるが、内面は工具痕が残る。胎土に白色粒や赤褐色粒を多く含む。焼成はやや良好。	Ⅲ a-1
	5	壺形	胴部	— — —	肩部は張り、頸部から口縁に向け緩やかに外反しながら立ち上がる。外面は丁寧に器面調整されるが、内面は工具痕が残る。胎土に白色粒や赤褐色粒を含む。焼成はやや良好。	Ⅲ b-2 ～ 4
	6	壺形	胴部	— — —	肩部は張り、頸部から口縁に向け緩やかに外反しながら立ち上がる。外面は丁寧に器面調整されるが、内面は工具痕が残る。胎土に白色粒や赤褐色粒を多く含む。焼成はやや良好。	Ⅲ a-1
	7	不明	底部	— — (6.8)	底径は小さく、底部から胴部にかけて、ややくびれながら緩やかに立ち上がる。内外面は丁寧に器面調整される。胎土にガラス質の鉱物を含む。焼成はやや良好。	Ⅰ c-4
	8	鍋形	底部	— — —	底面部際は不明瞭で、底部から丸く緩やかに立ち上がる。内外面は丁寧に器面調整される。器肉は厚く、胎土にガラス質で黒色の鉱物を含む。焼成はやや良好。	Ⅳ d
	9	不明	底部	— — —	底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がる。外底全面に白色粒の付着痕が残る。内外面は丁寧に器面調整されるが、内面は多数の小孔が見られ、アバタ状を成す。胎土に白色粒に赤褐色粒を多く含む。焼成はやや良好。	石積み 1 の 基底石直下
	10	不明	底部	— — —	底部から直線的に開きながら立ち上がる。内外面の器面調整は粗雑で、明瞭な調整痕を残す。胎土に白色粒を含み、暗灰色に焼成される。	Ⅱ a



第 21 図　土器

2. 青磁（第 22 ～ 26 図　第 5・6 表　図版 15 ～ 19）

青磁は総数 137 点出土している。出土状況としては、表採やⅠ層・Ⅱ層から 51 点、Ⅲ層から 77 点とⅣ層から 2 点出土している。遺構に伴うものは石積み遺構から 5 点、土坑 1 の埋土から 2 点出土している。年代が推定できる資料については、14 世紀半ばから 16 世紀後半のものが確認できた。内訳は、碗類が 105 点、皿が 16 点、盤が 4 点、香炉が 1 点、器種不明が 11 点である。碗・皿の分類については、沖縄分類（瀬戸ほか 2007）を参考に行った。このうち特徴的な 39 点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第 5 表　青磁出土一覧

種類	器種	部位	表採	層序				遺構		合計		
				Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	石積み 1	土坑 1			
青磁	碗	口～底部	―	―	―	1	―	―	1	2	104	137
		口縁部	1	7	5	26	―	1	1	41		
		胴部	1	2	9	29	―	3	―	44		
		底部	1	3	6	5	1	1	―	17		
	小碗	口縁部	―	―	―	1	―	―	―	1	1	
	皿	口縁部	1	1	―	10	1	―	―	13	16	
		胴部	―	―	1	―	―	―	―	1		
		底部	―	1	―	1	―	―	―	2		
	盤	口縁部	―	―	1	2	―	―	―	3	4	
		底部	1	―	―	―	―	―	―	1		
	香炉	口縁部	―	1	―	―	―	―	―	1	1	
	器種不明	口縁部	―	―	1	―	―	―	―	1	11	
		胴部	―	1	7	2	―	―	―	10		
合計			5	16	30	77	2	5	2	137		

第 6 表　青磁観察一覧 1

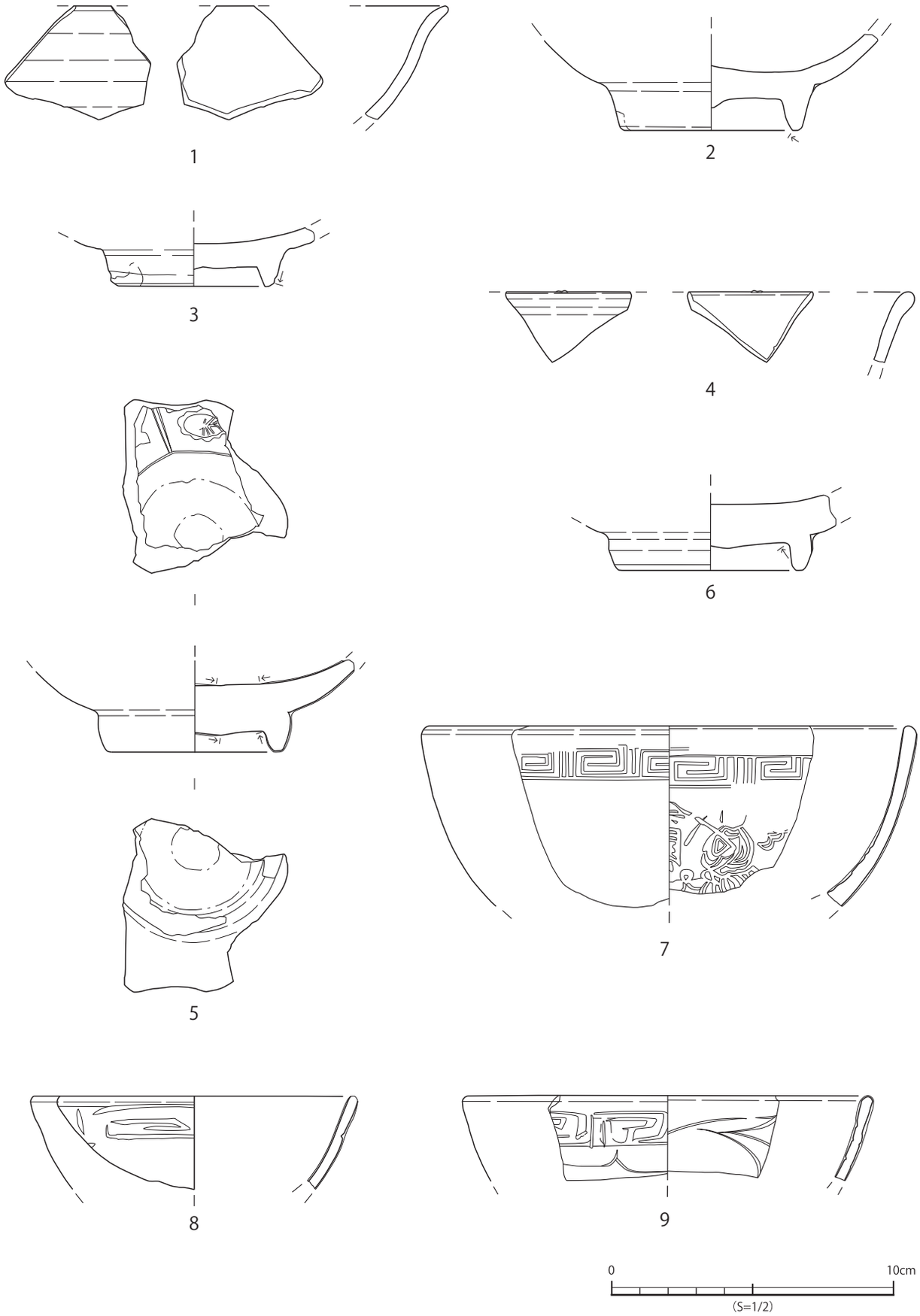
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	分類	口径 器高 底径 ( ) は推定値	観察所見	出土地
第 22 図 図版 15	1	碗	口縁	Ⅳ類	― ― ―	口縁は外反する。内外面に緑がかった透明釉を施す。貫入が見られる。内外面共に無文。	土坑 1 埋土
	2	碗	底部	Ⅳ類	― ― (6.4)	内面から畳付際まで緑がかった透明釉を施す。畳付から高台内は露胎するが、畳付の一部に釉薬が掛る。	Ⅰ c-4
	3	碗	底部	Ⅳ類	― ― (5.9)	内面から外面畳付際まで灰緑色の失透釉を施すが、一部畳付に掛る。高台の形成は粗雑で焼成は不良。	石積み 1 の 石材除去 作業中出土
	4	碗	口縁	Ⅳまたは Ⅳ ' 類	― ― ―	口縁は外反する。口唇はやや肥厚する。内外面に緑がかった透明釉を施す。内外面共に無文。	Ⅲ a-1
	5	碗	底部	Ⅳ ' 類	― ― (6.2)	高台に粗い削りの形成痕を残す。内外面に濃い緑色の透明釉を厚く施釉後、内底面と高台内底を蛇の目状に釉剥ぎする。内面に陽刻の型押し文を持ち、外面は無文。	Ⅰ c
	6	碗	底部	Ⅳ ' 類	― ― (6.8)	内外面に緑がかった透明釉を厚く施釉後、外面は高台内底を釉剥ぎする。内面は無文。釉薬の透明度は低く、胎土は粗雑で赤褐色に焼成する。	Ⅲ b-1 ～ 3
	7	碗	口縁	Ⅴ類	(17.6) ― ―	口縁形態は直口。内外面に緑がかった透明釉を厚く施し、粗い貫入が見られる。内外面の口縁に型押しの雷文帯、内面に型押しの人物文を持つ。胎土は緻密。	Ⅰ a

第６表　青磁観察一覧２

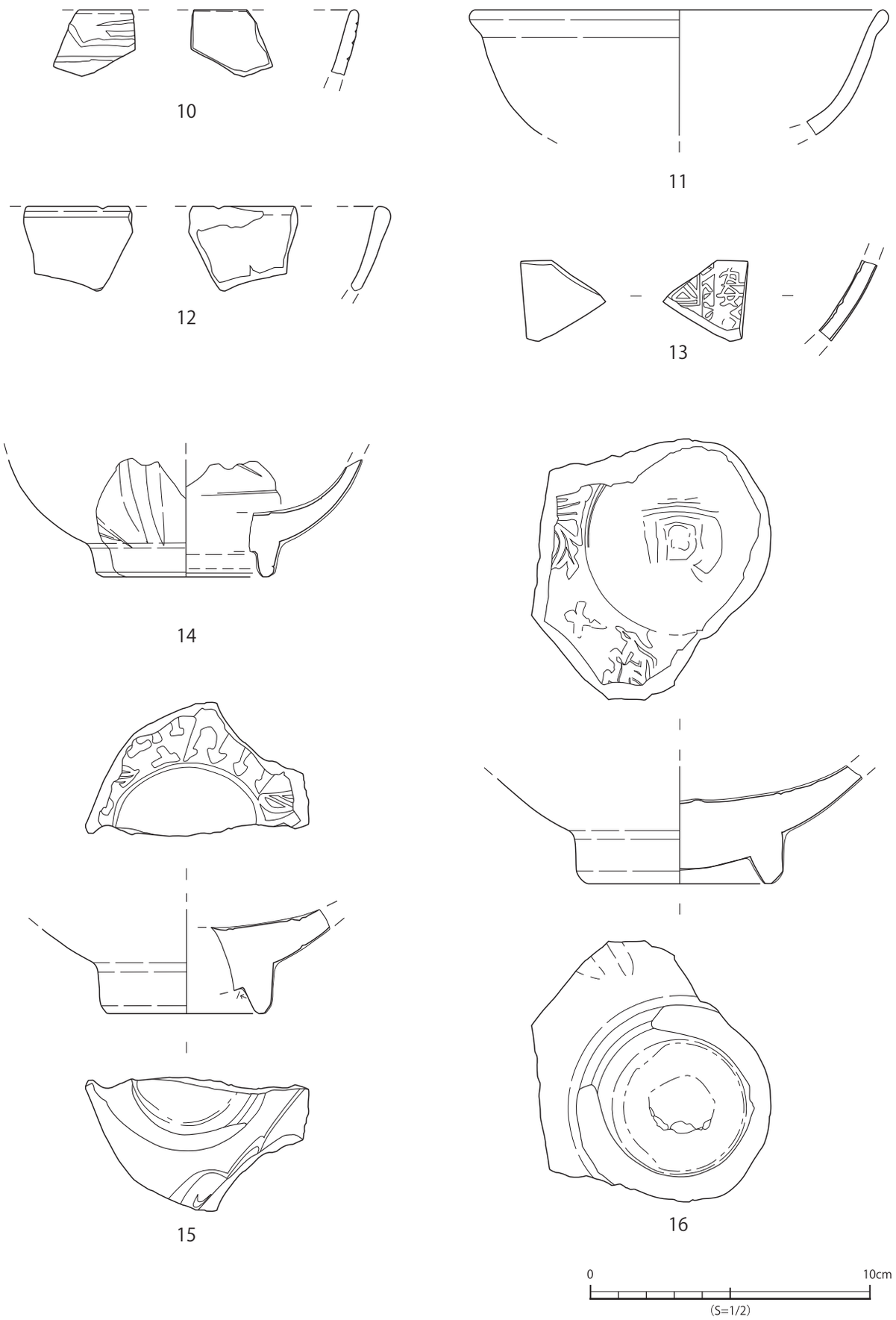
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	分類	口径 器高 底径 ( ) は推定値	観察所見	出土地
第 22 図 図版 15	8	碗	口縁	Ⅴ類	(11.6) — —	口縁形態は直口。内外面に緑がかった透明釉を厚く施す。内面は無文、外面は粗雑な箆描きの雷文帯を持つ。胎土は緻密。	Ⅲ b-2 ～ 4
	9	碗	口縁	Ⅴ類	(14.6) — —	口縁形態は直口。内外面に緑がかった透明釉を厚く施す。外面口縁にヘラ彫りの雷文帯と内外面に草花文を持つ。胎土は緻密。	Ⅱ b
第 23 図 図版 16	10	碗	口縁	Ⅴ類	— — —	口縁形態は直口。内外面に緑がかった透明釉を施す。外面は粗雑な箆描きの雷文帯を持つ。	Ⅲ b-2 ～ 4
	11	碗	口縁	Ⅴ類	(15.0) — —	口縁は外反する。口唇はやや肥厚する。内外面に粘度の高い暗緑黄色の失透釉を施す。釉薬の流動性が弱く、表面は凸凹し、所々胎土が覗く。内外面共に無文。	Ⅲ a-1
	12	碗	口縁	Ⅴ類	— — —	口縁形態は直口。内外面に緑がかった透明釉を施し、粗い貫入が見られる。内面は無文。外面は口唇に 1 条の圏線を持つ。	Ⅲ a-1
	13	碗	胴部	Ⅴ類	— — —	内外面に緑がかった透明釉を厚く施す。内面は型押しの文様を持ち、外面は無文。	石積み 1 基底石直下
	14	碗	底部	Ⅴ類	— — (6.4)	内外面に濃い緑色の透明釉を厚く施釉後、外面の高台内底を釉剥ぎする。外面は連弁文、内面に片切彫りの草花文を持つ。胎土は緻密。	Ⅲ b-2 ～ 4
	15	碗	底部	Ⅴ類	— — (6.2)	底部器肉の厚い大型の器形。高台の形成は丁寧で畳付外側を斜めに削る。内外面に濃い緑色の透明釉を厚く施釉後、外面の高台内底を蛇の目状に釉剥ぎする。粗い貫入が見られる。内面は型押しの文様、外面は片切彫りの草花文を持つ。	Ⅲ a-1
	16	碗	底部	Ⅴ類	— — (7.4)	底部器肉の厚い大型の器形。高台の形成は丁寧で畳付外側を斜めに削る。内外面に濃い緑色の透明釉を厚く施釉後、外面の高台内底を蛇の目状に釉剥ぎする。内面は型押しの文様、外面は蓮弁文を持つ。内底面の文字文は不明瞭なため、判読できない。「貴」または「高」か？	Ⅱ b
第 24 図 図版 17	17	碗	底部	Ⅴ類	— — 5.55	高台が小型の器形。高台に粗い削りの調整を残す。内面から外面の畳付際まで黄みがかった透明釉を施し、内底面に印花文を持つ。	Ⅱ b
	18	碗	口～底	Ⅵ類	(12.7) 6.40 (5.2)	口縁形態が直口で小型の器形。内底面は広く、器高は低い。内面から外面の高台畳付際まで灰緑色の失透釉を施釉後、畳付を斜めに削る。内外面共に無文。高台内底は露胎。胎土は粗雑。	土坑 1
	19	碗	口縁	Ⅵ類	(13.2) — —	口縁形態は直口。内外面に青みがかった透明釉を施す。内面は無文、外面は粗雑な細蓮弁文を持つ。	Ⅲ b-3
	20	碗	口縁	Ⅵ類	(13.2) — —	口縁形態は直口。内外面に緑がかった透明釉を施す。内面は無文、外面は細蓮弁文を持つ。釉薬の透明度は低く、胎土、文様ともに粗雑。	Ⅲ a-1
	21	碗	口縁	Ⅵ類	— — —	口縁形態は直口。内外面に緑がかった透明釉を施す。内面は無文、外面は粗雑な細蓮弁文を持つ。	Ⅲ a-1
	22	碗	口縁	Ⅵ類	— — —	口縁形態は直口。内外面に緑がかった透明釉を施す。内面は無文、外面は弁先の省略された細蓮弁文を持つ。	Ⅲ b-1 ～ 3
	23	碗	口縁	Ⅵ類	(14.7) — —	口縁形態は直口で、器高が低い小型の器形。内外面に緑がかった透明釉を施す。内面は無文、外面は弁先の省略された細蓮弁文を持つ。	Ⅰ c-4

第 6 表　青磁観察一覧 3

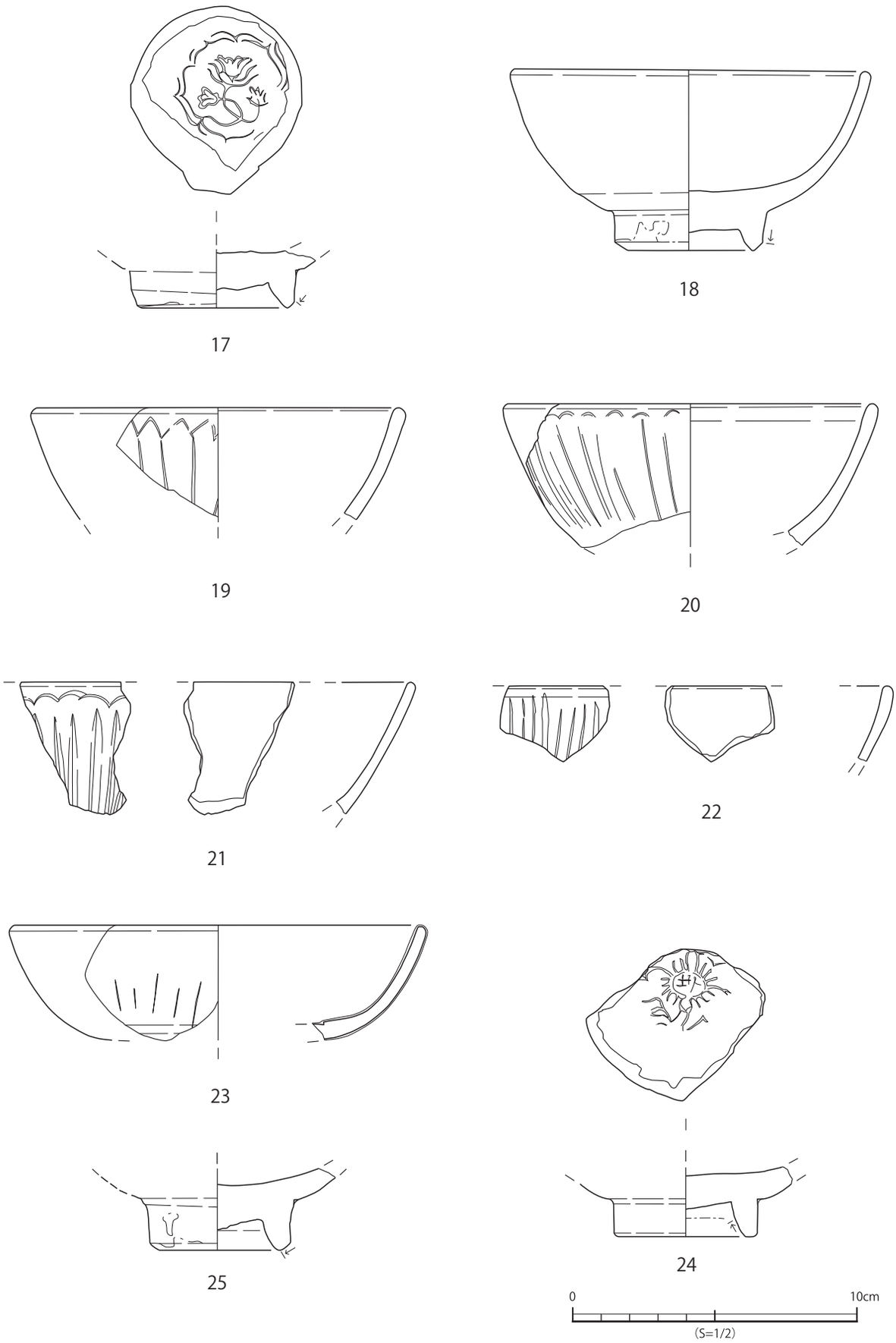
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	分類	口径 器高 底径 ( ) は推定値	観察所見	出土地
第 24 図 図版 17	24	碗	底部	Ⅵ類	— — (5.0)	高台が小型の器形。内面から外面の高台内まで青みがかった透明釉を施し、高台内底は露胎。粗い貫入が見られる。内底面に印花文を持つ。	Ⅱ a
	25	碗	底部	Ⅵ類	— — 4.95	高台は小型で、粗い削りの形成痕を残す。内面から外面畳付の際まで緑がかった透明釉を施す。釉薬の一部は高台内底に掛り、施釉後に畳付の釉薬を剥ぐ。	Ⅰ c-4
第 25 図 図版 18	26	碗	口～底	Ⅶ類	最大 (13.95) (6.15) (5.4)	口縁形態は直口、内底面が広く器高が低い器形。内面から外面高台際まで緑がかった透明釉を施釉後、内底面を蛇の目状に釉剥ぎする。釉薬の一部は高台に掛る。形成は雑で、高台は器の中央からずれた位置に形成される。内面は退化した印花文、外面は櫛描きの線刻蓮弁文を持つ。	Ⅲ
	27	碗	口縁	Ⅶ類	(14.6) — —	口縁が逆「ハ」の字状に開く直口の器形。器肉は薄く、外面に明瞭な轆轤痕を残す。内外面に緑がかった透明釉を施す。	Ⅰ c-4
	28	皿	口縁	Ⅴ類	— — —	口折れ皿。口縁の折れは弱く、内外面に緑がかった透明釉を厚く施す。胎土は緻密。	Ⅲ
	29	皿	口縁	Ⅴ類	— — —	外反または稜花皿。内外面に緑がかった透明釉を厚く施す。内面は片切彫りの草花文を持ち、外面は無文。胎土は緻密。	Ⅲ b-1 ～ 5
	30	皿	口縁	Ⅵ類	— — —	稜花皿。内外面に緑がかった透明釉を厚く施す。内面は片切彫りの草花文を持ち、外面は無文。	Ⅳ e
	31	皿	口縁	Ⅵ類	(8.4) — —	直口皿。内外面に緑がかった透明釉を厚く施す。内面は 3 本組の簡略化された蓮弁文を持つ。	Ⅲ b-1 ～ 3
	32	皿	口縁	Ⅵ類	(10.0) — —	菊花皿。内外面に黄みがかった透明釉を施す。口唇を刻み、花弁状に成形する。内面に型押しの花弁、外面に線刻の花弁文を持つ。	Ⅲ a-1
	33	皿	口縁	Ⅵ類	(13.0) — —	稜花皿。内外面に青みがかった透明釉を厚く施す。内面は草花文を持ち、外面は無文。釉薬の透明度は低く、文様や稜花なども不明瞭で粗雑。	Ⅲ b-2 ～ 4
	34	皿	口縁	Ⅵ類	— — —	稜花皿。内外面に青みがかった透明釉を厚く施す。内面は草花文を持ち、外面は無文。釉薬の透明度は低く、文様の彫りは浅く細い。	表採
第 26 図 図版 19	35	皿	底部	Ⅵ類	— — 5.5	腰部が「く」の字状に屈曲する器形。内面から外面畳付際まで緑がかった透明釉を施すが、一部は畳付から内底まで掛る。内底面を釉剥ぎし、釉剥ぎの中心に径 3㎜深さ 1㎜程度の小孔が確認できる。釉薬の透明度は低く、胎土は粗雑で赤褐色に焼成する。	Ⅲ b-2 ～ 4
	36	皿	底部	Ⅶ類	— — (4.7)	腰部が「く」の字状に屈曲する器形。内面から外面畳付際まで緑がかった透明釉を施す。高台内底は露胎。施釉後、畳付際の釉薬を削り取るが、一部が畳付に残る。釉薬の透明度は低く、露胎するところは赤褐色に焼成し、胎土は粗雑。	Ⅰ b
	37	盤	口縁	—	(23.0) — —	顎縁口縁盤。顎縁の先端をつまみ上げて成形し、内外面に緑がかった透明釉を厚く施す。内面は箆描きの蓮弁文を持ち、外面は無文。胎土は緻密。青磁碗Ⅴ類と同時期。	Ⅲ b-2 ～ 4
	38	盤	底部	—	— — (12.0)	高台から腰部に掛けて緩やかに立ち上がる。内外面に緑がかった透明釉を厚く施釉後、外面の高台内底を蛇の目状に釉剥ぎする。内面は先端が丸い櫛描きの蓮弁文を持ち、外面は無文。胎土は緻密。青磁碗Ⅴ類と同時期。	表採
	39	香炉	口縁	—	(12.9) — —	小型の香炉。内外面に緑がかった透明釉を厚く施す。釉調は鈍く、細かな貫入が見られる。胎土は粗雑で、黒褐色粒や白色粒を含む。	Ⅰ a



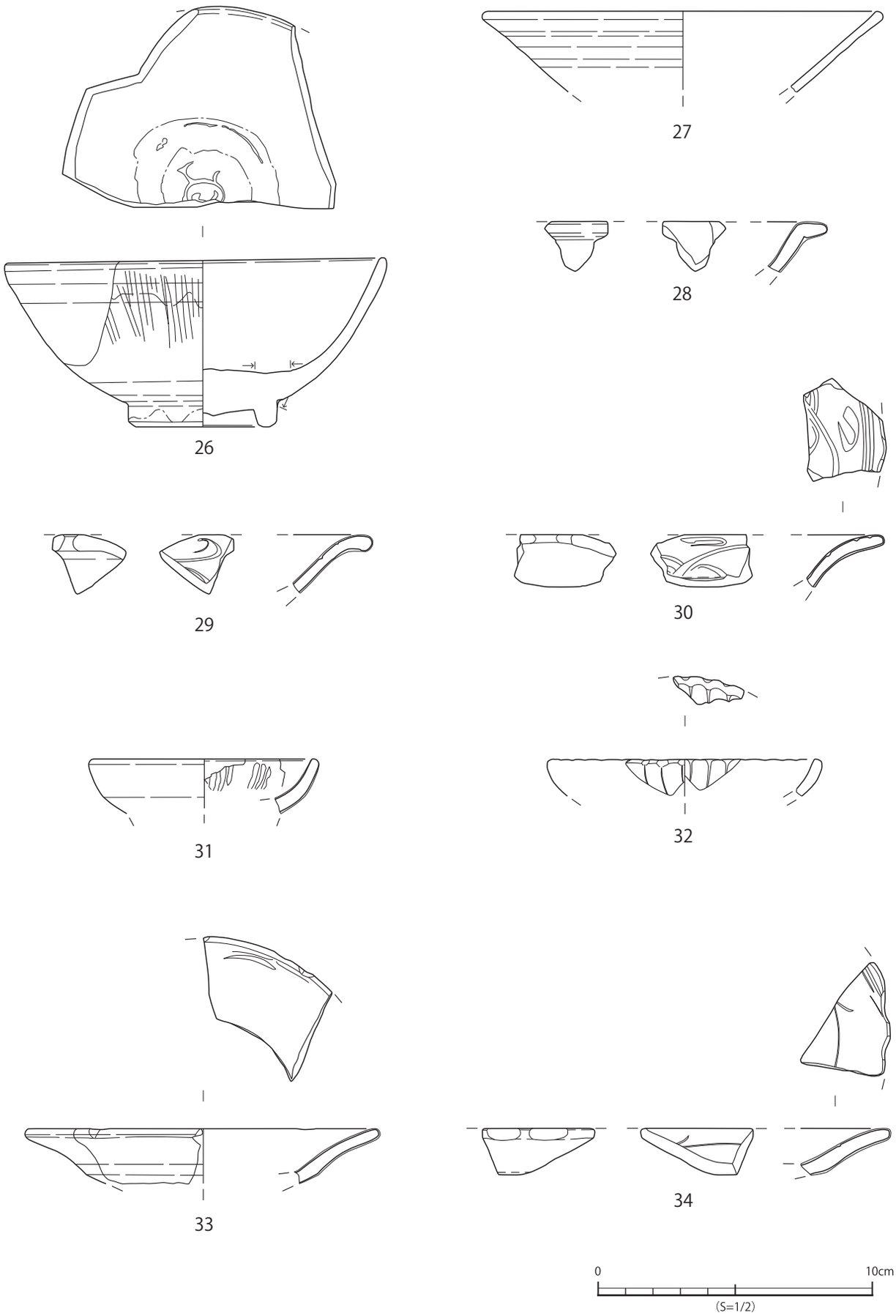
第 22 図　青磁 1



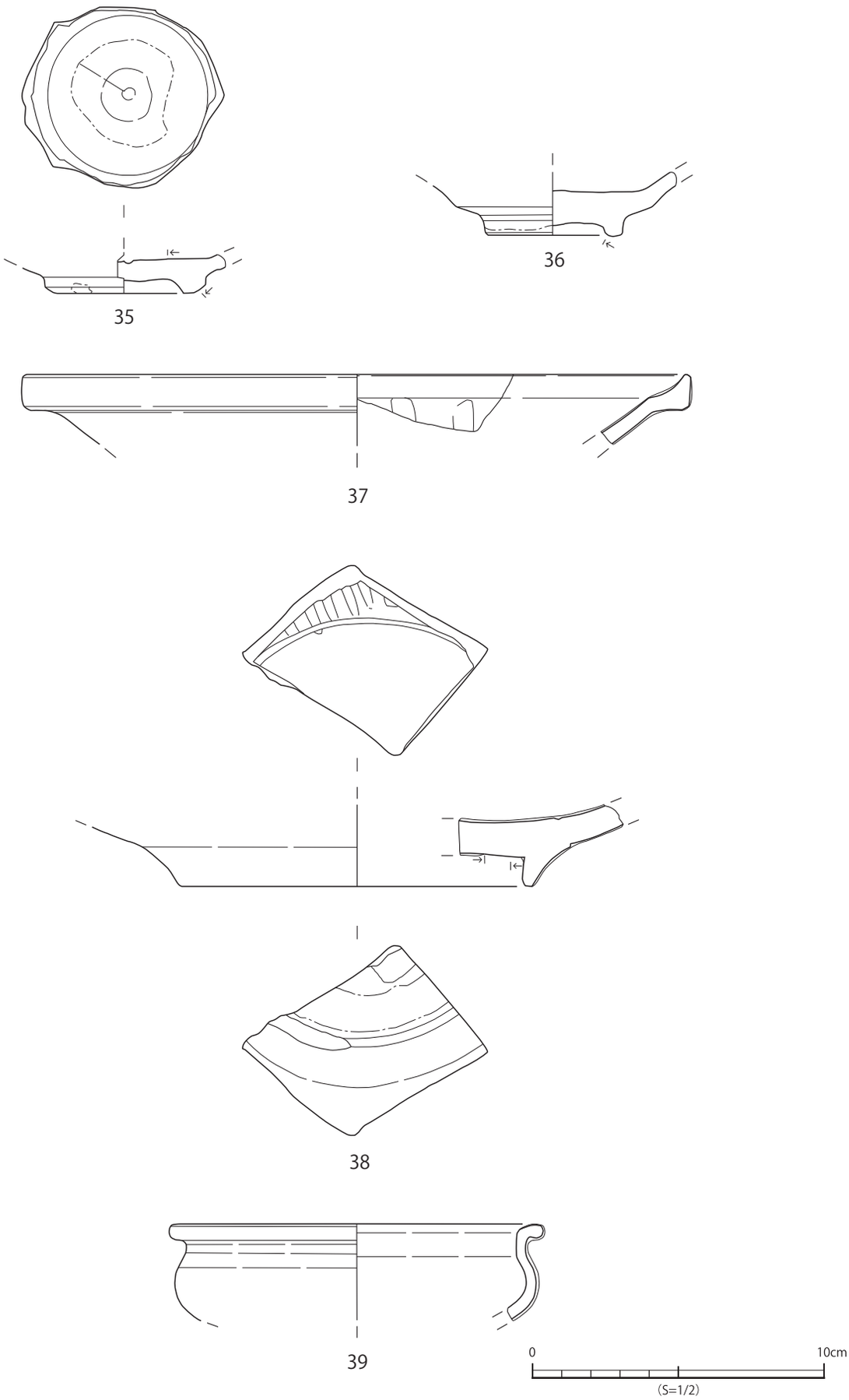
第 23 図　青磁 2



第 24 図　青磁 3



第 25 図　青磁 4



第 26 図　青磁 5

3. 白磁（第 27 図　第 7・8 表　図版 20）

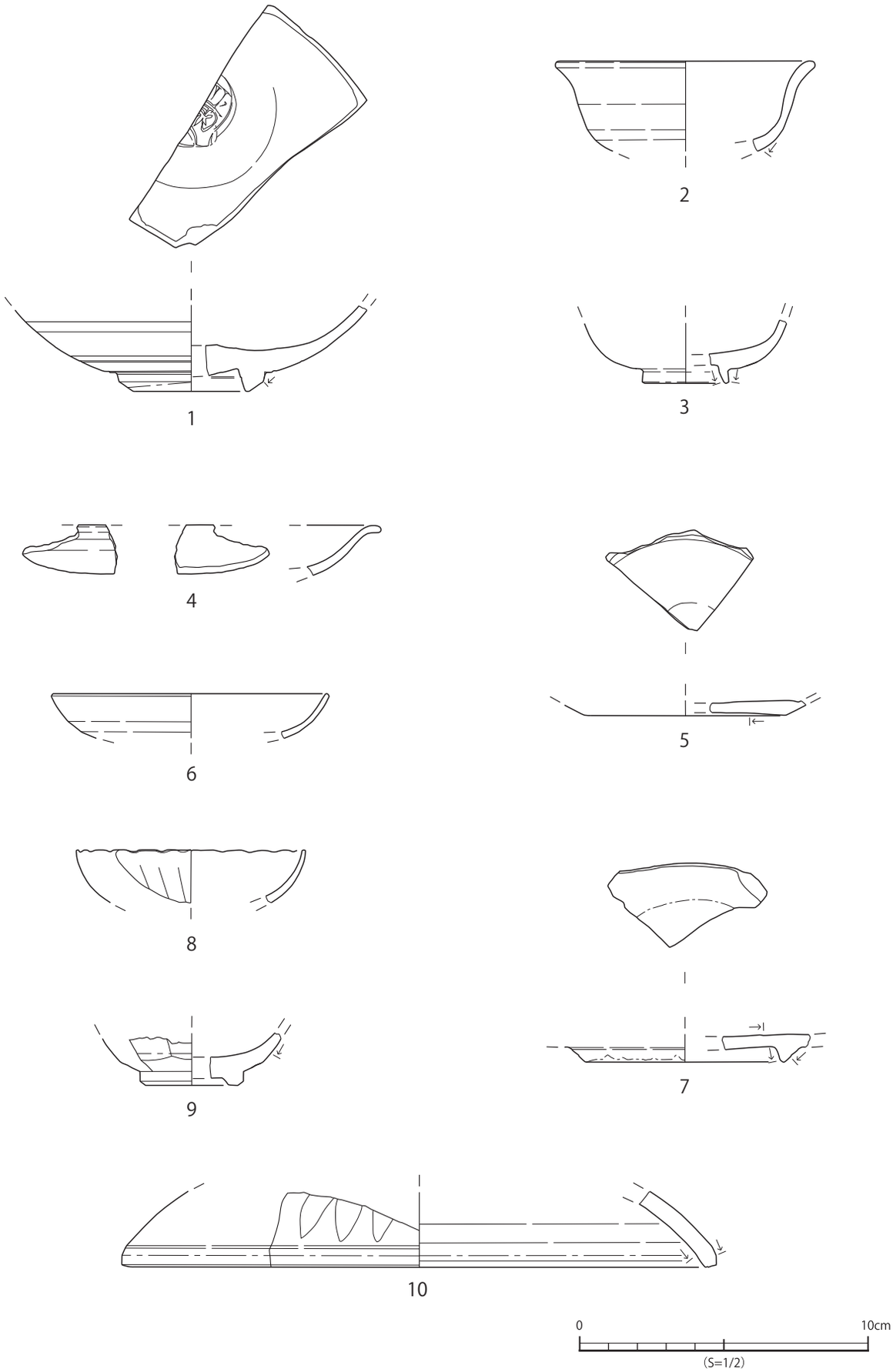
白磁は総数 31 点出土している。出土状況としては、表採やⅠ層・Ⅱ層から 11 点、Ⅲ層から 19 点出土している。遺構に伴うものは土坑 2 から 1 点出土している。年代が推定できる資料については、13 世紀後半から 16 世紀前半のものが確認できた。内訳は、碗類が 17 点、皿類が 6 点、瓶・杯・蓋が各 1 点、器種不明が 5 点で、碗・皿の分類については沖縄分類（瀬戸ほか 2007）を参考に行った。このうち特徴的な 10 点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第 7 表　白磁出土一覧

種類	器種	部位	表採	層序			遺構	合計		
				Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	土坑 2			
白磁	碗	口縁部	1	1	2	3	—	7	14	31
		胴部	—	1	—	5	—	6		
		底部	—	1	—	—	—	1		
	小碗	口縁部	—	—	—	1	—	1	3	
		底部	—	—	2	—	—	2		
	皿	口縁部	—	—	—	1	1	2	5	
		底部	1	1	—	1	—	3		
	小皿	口縁部	—	—	—	1	—	1	1	
	八角杯	底部	—	—	—	1	—	1	1	
	瓶	胴部	—	1	—	—	—	1	1	
	蓋？	端部	—	—	—	1	—	1	1	
	器種不明	胴部	—	—	—	5	—	5	5	
合計			2	5	4	19	1	31		

第 8 表　白磁観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	分類	口径 器高 底径 ( ) は推定値	観察所見	出土地
第 27 図 図版 20	1	碗	底部	D' 群	— — (5.0)	内底面は広く、腰部にかけての器肉が薄い。高台外側は斜めに削られ、腰部には明瞭な轆轤痕が残る。内面から外面の高台脇まで透明釉を厚く施す。内底面は一部露胎し、「満」の文字文を型押しする。	Ⅰ c-4
	2	小碗	口縁	D 群	(9.0) — —	口縁が外反する小碗。内面から外面腰部まで透明釉を施す。内外面共に細かい貫入が見られる。胎土は緻密で軟質。	Ⅲ a-1
	3	小碗	底部	—	— — (3.0)	内外面に透明釉を施釉後、畳付を釉剥ぎする。型つくり。徳化窯系。	Ⅱ b
	4	皿	口縁	—	— — —	口縁が外反し、器高の浅い器形。器肉は薄く、内外面に透明釉を施す。細かい貫入が見られる。泉州窯系。	土坑 2 埋土
	5	小皿	底部	A 群	— — (7.0)	高台を持たない平底の器形。底面を薄く削る。かすかに青みを帯びた透明釉を外底面際まで施すが、一部底面に掛る。内底面に圏線を持つ。	Ⅲ b-1 ～ 3
	6	小皿	口縁	D 群	(9.6) — —	口縁は直口で器肉の薄い器形。透明釉を内外面に施す。外面は轆轤痕を残す。胎土は緻密で硬質。	Ⅲ a-1
	7	皿	底部	E 群	— — (6.9)	灰白色の失透釉を内外面に施す。内底面は中心部に釉薬を残しながら釉剥ぎし、外面は畳付を釉剥ぎする。景徳鎮窯系。	表採
	8	皿	口縁	E 群	(8.0) — —	菊花皿。胎土は白色で精良緻密。かすかに青みを帯びた透明釉を施釉。口唇を刻み、外面は線刻して花弁状に成形する。景徳鎮窯系。	Ⅲ b-2 ～ 4
	9	八角杯	底部	D 群	— — (3.6)	腰部を面取りする。内面から外面腰部まで、やや白濁した透明釉を施す。胎土は緻密で軟質。	Ⅲ b-1 ～ 3
	10	蓋？	端部	—	(20.6) — —	内外面に透明釉が施され、底部は釉剥ぎする。外面に不明瞭な蓮弁文を持つ。胎土は粗雑で、硬質。	Ⅲ



第 27 図　白磁

4. 青花（第 28 図　第 9・10 表　図版 21）

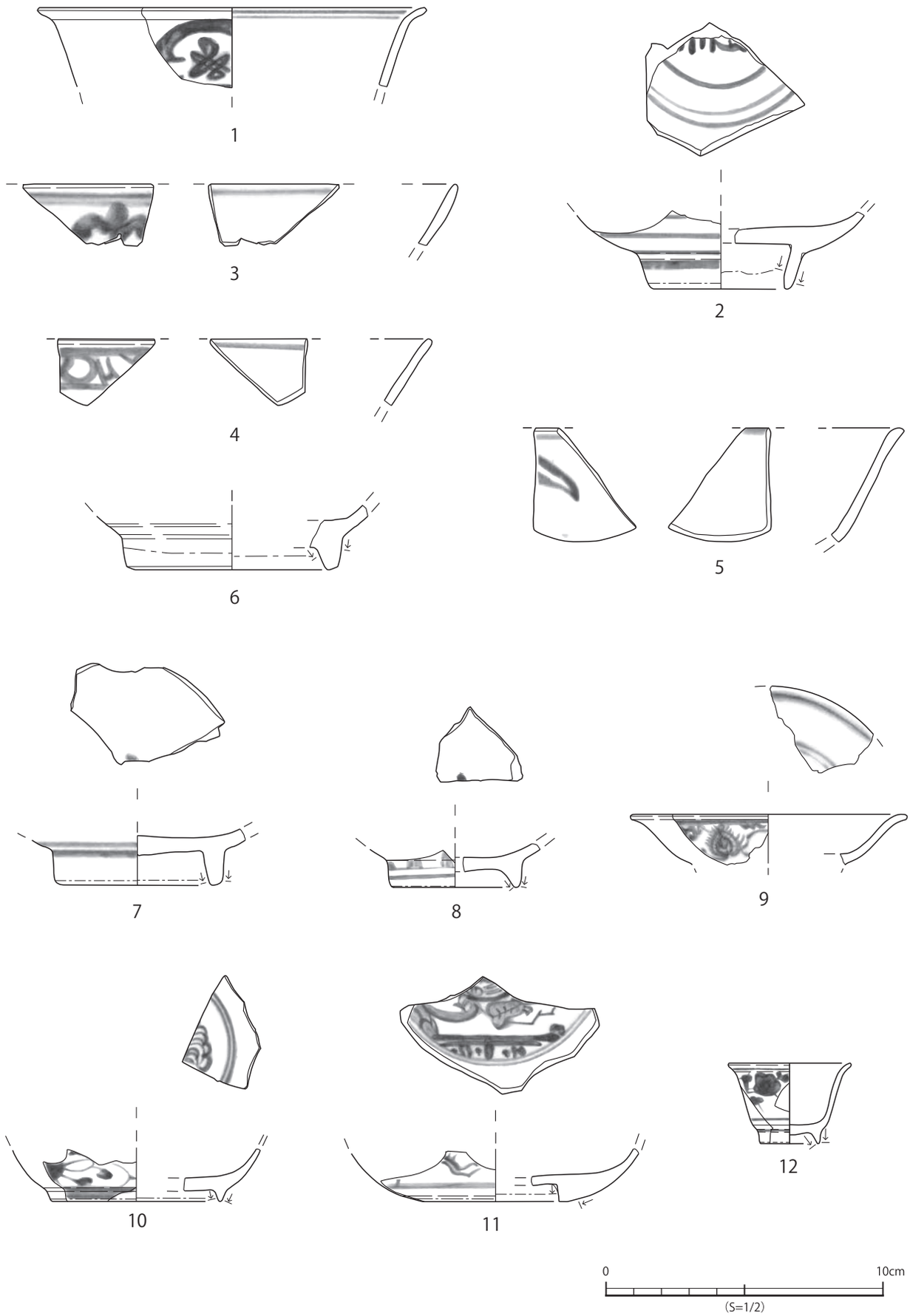
青花は総数 40 点出土している。出土状況としては、表採やⅠ層・Ⅱ層から 26 点、Ⅲ層から 12 点出土している。遺構に伴うものは石積み 1 の裏込め土と土坑 2 の埋土から各 1 点出土している。年代が推定できる資料については、15 世紀前半から 19 世紀のものが確認できた。内訳は、碗類が 30 点、皿が 5 点、小杯が 1 点、器種不明が 4 点で、碗・皿の分類については、沖縄分類（瀬戸ほか 2007）を参考に行った。このうち特徴的な 12 点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第 9 表　青花出土一覧

種類	器種	部位	表採	層序			遺構		合計		
				Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	石積み 1	土坑 2			
青花	碗	口縁部	2	3	3	4	―	1	13	29	40
		胴部	―	4	2	4	―	―	10		
		底部	―	2	2	2	―	―	6		
	小碗	底部	―	―	1	―	―	―	1	1	
	皿	口縁部	―	1	1	1	―	―	3	5	
		底部	―	―	2	―	―	―	2		
	小杯	口～底部	―	―	―	1	―	―	1	1	
	器種不明	胴部	1	―	2	―	1	―	4	4	
合計			3	10	13	12	1	1	40		

第 10 表　青花観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	分類	口径 器高 底径 ( ) は推定値	観察所見	出土地
第 28 図 図版 21	1	碗	口縁	B1 群	(14.0) ― ―	口縁は外反し、内外面に透明釉を施す。内面口縁に二重圏線、外面は花文を描く。	Ⅰ c-4
	2	碗	底部	B1 群	― ― (5.3)	高台は器肉が薄く、内傾する。内外面に透明釉を施釉後、畳付と高台の一部を釉剥ぎする。内底面に二重圏線、界線と「福」の文字文、外面には太さの違う二重圏線と圏線を描く。胎土は白色で緻密。	Ⅲ
	3	碗	口縁	C 群	― ― ―	口縁形態は直口。内外面に透明釉を施す。内面口縁に圏線、外面に二重の界線と草花文を描く。	Ⅰ b
	4	碗	口縁	―	― ― ―	口縁形態は直口。内外面に釉調の鈍い透明釉を施す。内面口縁に圏線、外面は二重の界線と粗雑な草花文帯を描く。漳州窯系。	Ⅱ a
	5	碗	口縁	―	― ― ―	口縁形態は直口。口唇はやや反る。内外面に透明釉を施す。内外面口縁に圏線、外面に葉文を描く。福建・広東系。	Ⅱ a
	6	碗	底部	―	― ― (7.6)	内底面は露胎で、外面は高台内まで透明釉を施釉後、釉剥ぎする。福建・広東系。17 ～ 18 c。	Ⅱ b
	7	碗	底部	―	― ― (6.1)	型で形成。内外面に透明釉を施釉後、畳付を釉剥ぎする。外面の高台上部と腰部に圏線を描く。徳化窯系。	Ⅰ a
	8	小碗	底部	―	― ― (4.55)	型で形成。内外面に透明釉を施釉後、畳付を釉剥ぎする。施釉、釉剥ぎ、共に粗雑。外面は高台上部際に二重の界線と芭蕉葉文を描く。徳化窯。	Ⅱ a
	9	皿	口縁	B1 群	(10.0) ― ―	口縁は外反する。内外面に透明釉を施す。内面口縁に圏線、内底面には二重圏線、外面は界線と粗雑な宝相華唐草文を描く。	Ⅱ a
	10	皿	底部	B1 群	― ― (6.1)	内外面に透明釉を施釉後、畳付を釉剥ぎする。内底面に二重の界線と十字花文、外面に二重の界線と草花文を描く。胎土は白色で緻密。	Ⅱ a
	11	皿	底部	C 群	― ― (5.2)	平底を円形に削る碁笥底の皿。内外面に透明釉を施釉後、底面を釉剥ぎする。内底面に二重の界線と草花欄干文、外面は二重の界線と草花文を描く。胎土は白色で緻密。	Ⅱ a
	12	小杯	口～底	―	(4.5) 2.9 (2.2)	口縁は外反する。内外面に透明釉を施釉後、畳付を釉剥ぎする。内面は無文。外面は界線内に梅花文と高台上部際に圏線を描く。景徳鎮窯系。	Ⅲ a-1



第 28 図　青花

5. その他の輸入陶磁器（第 29 図　第 11・12 表　図版 22）

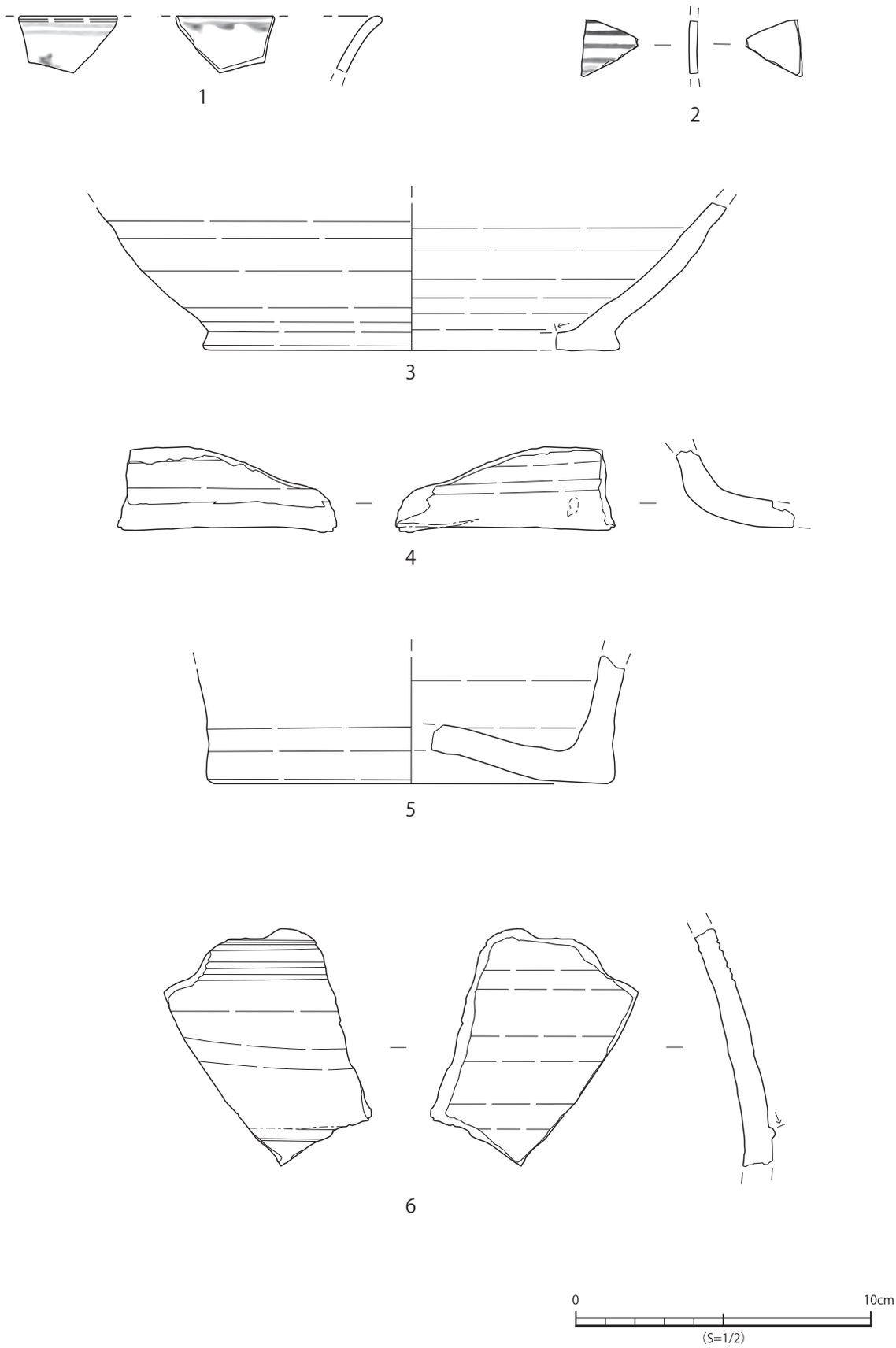
その他の輸入陶磁器は総数 39 点出土している。出土状況としては、表採やⅠ層・Ⅱ層から 16 点、Ⅲ層から 19 点出土している。遺構に伴うものは石積み遺構から 3 点、土坑 2 から 1 点出土している。年代が推定できる資料については、15 世紀半ばから 17 世紀代のものが確認できた。内訳は褐釉陶器が 34 点、ベトナム産染付の碗・タイ産の鉄絵の合子・色絵・緑釉陶器・鉄釉陶器が各 1 点出土している。このうち特徴的な 6 点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。なお褐釉陶器の分類については、沖縄分類（瀬戸ほか 2007）を参考に行った。

第 11 表　その他の輸入陶磁器出土一覧

種類	器種	部位	表採	層序			遺構		合計		
				Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	石積み 1	土坑 2			
ベトナム産染付	碗	口縁部	－	1	－	－	－	－	1	1	1
タイ産鉄絵	合子	胴部	－	1	－	－	－	－	1	1	1
褐釉陶器	鉢	胴部	－	－	－	1	1	－	2	3	34
		底部	－	－	1	－	－	－	1		
	壺	胴部	1	7	2	15	1	－	26	27	
		底部	－	－	－	1	－	－	1		
	器種不明	胴部	－	－	1	1	1	1	4	4	
色絵	碗	胴部	－	－	1	－	－	－	1	1	1
緑釉陶器	器種不明	胴部	－	－	－	1	－	－	1	1	1
鉄釉陶器	瓶	胴部	－	－	1	－	－	－	1	1	1
合計			1	9	6	19	3	1	39		

第 12 表　その他の輸入陶磁器観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	分類	器種	部位	口径 器高 底径 ( ) は推定値	観察所見	出土地
第 29 図 図版 22	1	ベトナム産 染付	碗	口縁	－ － －	内面に圏線と波文、外面は二重圏線と草花文？を描き、内外面に透明釉を施す。絵薬の発色は鈍く不明瞭で、釉薬表面には微小な穴と貫入が見られる。胎土は灰白色で軟質。	Ⅰ c-4
	2	タイ産鉄絵	合子	胴部	－ － －	外面は鉄を含む絵薬で複数の圏線を描き、透明釉を施す。内面は露胎する。器肉は薄く、胎土に黒色粒や白色粒を含む。	Ⅰ b
	3	中国産 褐釉陶器	鉢	底部	－ － (14.1)	底部は平底を高台状に形成し、腰部は膨らみながら緩やかに立ち上がる。内面に黒褐色釉を施し、外面は露胎するが、一部釉薬がかかる。内外面に器面調整痕が残る。胎土は白色粒を含む。	Ⅱ a
	4	中国産 褐釉陶器	壺	胴部	－ － －	肩部は張り出し、頸部は口縁方向に窄まりながら立ち上がる。内外面に暗褐色釉を施す。胎土は白色粒や暗褐色粒を含む。5 類（瀬戸ほか、2007）	Ⅲ a-1
	5	中国産 褐釉陶器	壺	底部	－ － (13.8)	底径は小さく、中心部は半球形状に上がる。内面から外面底際まで暗褐色釉を施す。胎土は白色粒や暗褐色粒を含む。5 類（瀬戸ほか、2007）。15c 中	Ⅲ a-1
	6	褐釉陶器	壺	胴部	－ － －	外面は三重の沈線を廻らせ、帯状の凸帯を形成する。外面に黒褐色釉を施すが、釉薬の発色は鈍い。内面は露胎し、胎土に黒褐色粒を含む。東南アジア産か。	Ⅲ a-1



第 29 図　その他の輸入陶磁器

6. 本土産陶磁器（第 30 図　第 13・14 表　図版 23）

本土産陶磁器は総数 58 点出土している。出土状況としては、表採やⅠ層・Ⅱ層から 46 点、Ⅲ層から 11 点出土している。遺構に伴うものは石積み遺構から 1 点出土している。内訳は、白磁が 4 点、染付が 18 点、色絵が 1 点、近・現代磁器類が 19 点、施釉陶器が 15 点、近・現代陶器が 1 点となる。染付の中には古伊万里の徳利、施釉陶器には肥前の内野山窯の碗などがあり、年代が推定できる資料については、17 世紀後半から 19 世紀のものが確認できた。このうち特徴的な 8 点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第 13 表　本土産陶磁器出土一覧

種類	器種	部位	表採	層序			遺構	合計		
				Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	石積み 1			
白磁	碗	口縁部	－	－	1	－	－	1	1	4
	杯	口縁部	1	－	－	－	－	1	1	
	小杯	口～底部	－	－	1	－	－	1	1	
	器種不明	口縁部	－	－	1	－	－	1	1	
染付	碗	口縁部	－	1	3	－	－	4	8	18
		胴部	1	－	1	－	－	2		
		底部	－	－	2	－	－	2		
	小碗	口～底部	－	－	－	－	1	1	6	
		口縁部	－	1	1	－	－	2		
		胴部	－	1	－	－	－	1		
		底部	－	－	1	1	－	2		
	袋物	胴部	－	1	－	－	－	1	1	
	急須	口縁部	－	1	－	－	－	1	2	
		底部	－	－	1	－	－	1		
	徳利	胴部	－	1	－	－	－	1	1	
色絵	碗	口～底部	－	－	1	－	－	1	1	1
近・現代磁器	小碗	口～底部	1	－	1	－	－	2	8	19
		口縁部	－	2	2	－	－	4		
		底部	－	－	2	－	－	2		
	皿	口縁部	－	1	1	－	－	2	2	
	小杯	口～底部	－	－	1	－	－	1	1	
	香炉	胴部	－	－	1	－	－	1	2	
		底部	－	－	1	－	－	1		
	急須	胴部	－	－	2	－	－	2	3	
		耳部	－	1	－	－	－	1		
	器種不明	胴部	－	2	－	－	－	2	2	
		底部	－	1	－	－	－	1	1	
施釉陶器	碗	口縁部	－	－	－	1	－	1	3	15
		胴部	－	－	1	1	－	2		
	小碗	口～底部	－	1	－	－	－	1	1	
	皿	胴部	－	－	1	－	－	1	1	
	壺・甕類	胴部	－	1	－	1	－	2	2	
	器種不明	胴部	－	－	1	7	－	8	8	
近・現代陶器	急須	耳部	－	1	－	－	－	1	1	1
合計			3	16	27	11	1	58		

第 14 表　本土産陶磁器観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径 ( ) は推定値	観察所見	出土地
第 30 図 図版 23	1	染付	碗	底部	— — (4.55)	腰部から丸みを帯びて立ち上がる。内底面際と外面腰部に圏線を描く。内外面に透明釉を厚く施釉後、畳付を釉剥ぎする。粗い貫入が見られる。高台の成形は粗雑で、胎土は白色で黒色粒を含む。	Ⅱ a
	2	染付	碗	底部	— — (4.6)	「スンカンマカイ」と呼ばれる型絵染付碗。内底面、外面はコバルト釉を型紙で絵付けする。全面に透明釉を施釉後、畳付を釉剥ぎし、耐火土を施す。内定面には二か所に胎土目が見られる。近代磁器。	Ⅱ a
	3	染付	小碗	底部	— — (3.0)	内外面に透明釉を施釉後、畳付を釉剥ぎする。内底面は折枝文を描く。胎土は白色で緻密。	Ⅲ b-3
	4	染付	小碗	口～底	(7.4) 4.40 (2.6)	外面はコバルト釉をゴム版で絵付けし、高台内底際に圏線を描く。全面に施釉後、畳付を釉剥ぎする。近代磁器。	石積み 1 の 石材除去 作業中出土
	5	白磁	小杯	口～底	(5.0) 21.5 (2.1)	型で形成。内外面に透明釉を施釉後、畳付を釉剥ぎする。胎土は白色で緻密。近代磁器。	Ⅱ a
	6	染付	徳利	胴部	— — —	外面は透明釉を施釉し、内面は一部透明釉が掛かる。外面は上位に二重界線と網目文？を描く。胎土は白色で緻密。古伊万里。	Ⅰ a
	7	施釉 陶器	小碗	口～底	(9.0) 4.30 (3.8)	腰部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁は外反する。畳付は垂直に形成し、外面屈曲部を工具で抑え稜をつくる。内面から外面高台中位まで灰釉を施し、高台内は露胎する。胎土は灰色で緻密。	Ⅰ a
	8	施釉 陶器	碗	胴部	— — —	胴部は丸く膨らむ。内面は丁寧に器面調整するが、外面は工具痕を残す。内面は透明釉、外面に銅緑釉を施す。胎土は緻密。内野山窯。	Ⅲ a-1

7. 沖縄産陶器（第 31 ～ 35 図　第 15・16 表　図版 24 ～ 28）

沖縄産陶器は総数 245 点出土している。出土状況としては、表採やⅠ層・Ⅱ層から 190 点、Ⅲ層から 42 点出土している。遺構に伴うものは石積み遺構から 13 点出土している。内訳は「施釉陶器（ジョウヤチ）」が 77 点、「無釉陶器（アラヤチ）」が 158 点、「陶質土器（アカムン）」が 10 点出土している。種類としては、碗・皿・瓶・鉢・壺・鍋・火取・火炉・急須・蓋・土瓶・擂鉢・水鉢・片口・甕・水甕等がある。このうち特徴的な 42 点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第 15 表　沖縄産陶器出土一覧 1

種類	器種	部位	表採	層序			遺構	合計		
				Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	石積み 1			
施釉陶器	碗	口～底部	—	—	1	—	—	1	29	77
		口縁部	—	2	4	2	2	10		
		胴部	—	1	4	2	1	8		
		底部	2	2	4	2	—	10		
	小碗	口縁部	—	1	1	1	—	3	3	
	皿	胴部	—	1	—	—	—	1	1	
	瓶	口縁部	—	1	—	—	—	1	1	
	酒器	胴部	—	—	1	—	—	1	2	
		底部	—	—	1	—	—	1		
	袋物	胴部	—	—	2	1	—	3	3	
	鉢	胴部	—	—	2	—	—	2	4	
		底部	—	2	—	—	—	2		
	壺	胴部	1	1	1	2	—	5	6	
		底部	—	1	—	—	—	1		

第 15 表　沖縄産陶器出土一覧 2

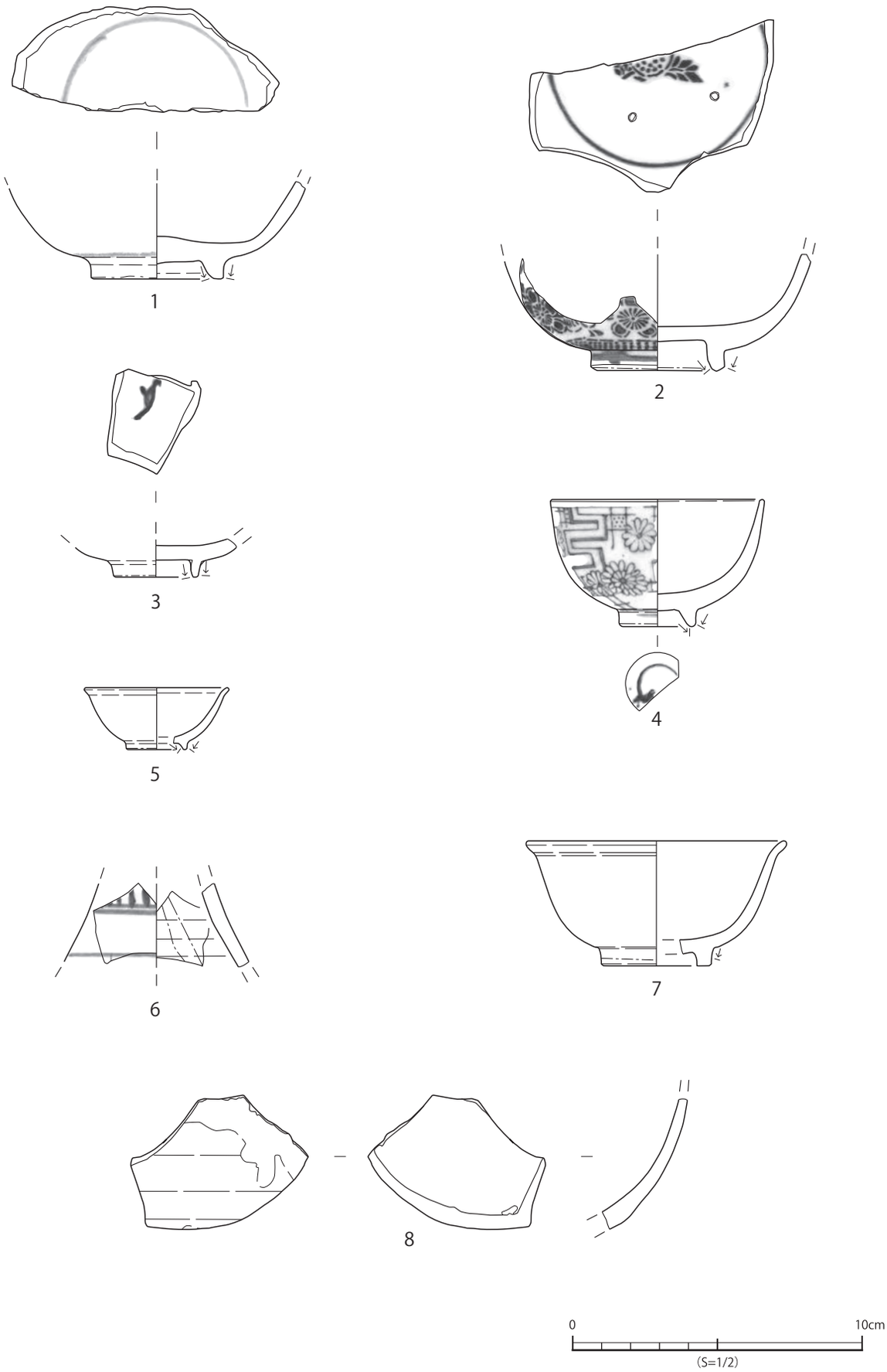
種類	器種	部位	表採	層序			遺構	合計		
				Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	石積み 1			
施釉陶器	壺・甕類	胴部	—	1	1	—	—	2	2	
	鍋	胴部	—	—	—	1	—	1	2	
		把手部	—	1	—	—	—	1		
	火取	底部	—	—	1	—	—	1	1	
	急須	胴部	—	3	1	—	—	4	8	
		底部	—	1	3	—	—	4		
	蓋	端部	—	1	—	—	—	1	1	
	器種不明	胴部	1	4	5	3	1	14	14	
無釉陶器	碗	口縁部	—	1	—	1	—	2	2	158
	瓶	胴部	—	1	—	—	—	1	2	
		底部	—	1	—	—	—	1		
	袋物	胴部	—	3	—	—	—	3	3	
	鉢	口縁部	—	—	1	—	—	1	3	
		底部	—	1	1	—	—	2		
	擂鉢	口縁部	—	1	1	—	—	2	12	
		胴部	—	1	3	3	—	7		
		底部	—	3	—	—	—	3		
	水鉢	口縁部	—	3	—	—	—	3	4	
		胴部	—	1	—	—	—	1		
	片口	口縁部	—	—	1	—	—	1	1	
	壺	口縁部	—	1	—	—	—	1	8	
		胴部	—	—	1	—	—	1		
		底部	—	3	1	2	—	6		
	甕	胴部	—	—	1	—	1	2	2	
	壺・甕類	胴部	7	21	40	9	6	83	90	
		底部	2	1	3	1	—	7		
	水甕	胴部	—	1	—	—	—	1	1	
	鍋	胴部	—	—	—	3	—	3	3	
	火取	底部	—	—	—	—	1	1	1	
	火炉	口縁部	1	1	—	—	—	2	3	
		耳部	—	—	1	—	—	1		
	火炉？	口縁部	—	—	1	—	—	1	1	
	蓋	端部	1	—	—	—	—	1	1	
	器種不明	口縁部	—	—	—	1	—	1	21	
		胴部	—	4	1	5	1	11		
		底部	—	1	3	—	—	4		
		部位不明	—	3	1	1	—	5		
陶質土器	鍋	口縁部	—	1	—	—	—	1	1	10
	火炉	胴部	—	1	—	—	—	1	1	
	土瓶	胴部	—	—	1	—	—	1	1	
	蓋	口縁部	1	—	—	1	—	2	4	
		胴部	—	—	2	—	—	2		
	器種不明	胴部	—	—	2	1	—	3	3	
合計			16	77	97	42	13	245		

第 16 表　沖縄産陶器観察一覧 1

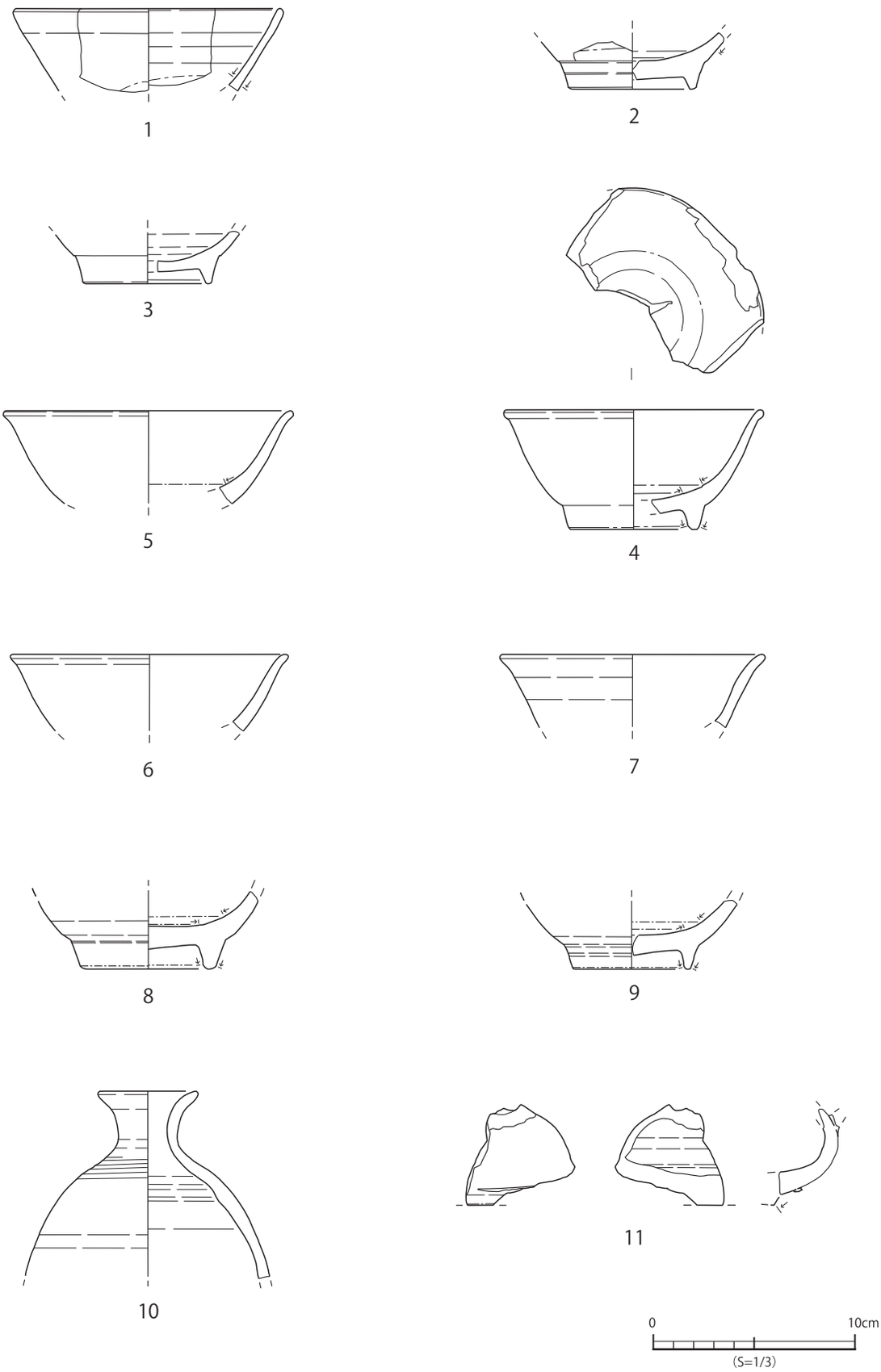
挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径 ( ) は推定値	観察所見	出土地
第 31 図 図版 24	1	施釉	碗	口縁	(13.4) — —	腰部から口縁まで直線的に立ち上がる。内外面の腰部まで灰緑色の灰釉を施す。	Ⅲ a-1
	2	施釉	碗	底部	— — (6.4)	腰部は膨らまずに直線的に立ち上がる。腰部あたりまで灰緑色の灰釉を施し、内外底は露胎する。外面には砂が見られる。	表採
	3	施釉	碗	底部	— — (6.4)	腰部は膨らまずに直線的に立ち上がり、内外底は露胎する。形状より灰釉碗の底部。	Ⅲ
	4	施釉	碗	口～底	(12.9) 5.95 (6.5)	腰部が緩やかに膨らみ口縁が外反する。全面を白土で白化粧し、透明釉を施釉後、畳付と内底面を蛇の目状に釉剥ぎする。細かい貫入が見られる。	Ⅱ a
	5	施釉	碗	口縁	(14.4) — —	口縁は緩やかに外反する。全面を白土で白化粧し、透明釉を施す。粗い貫入が見られる。	石積み 1 の 石材除去 作業中出土
	6	施釉	碗	口縁	(13.8) — —	口縁は緩やかに外反する。全面を白土で白化粧し、透明釉を施す。粗い貫入が見られる。	Ⅰ a
	7	施釉	碗	口縁	(13.2) — —	口縁は緩やかに外反する。全面を白土で白化粧し、透明釉を施す。粗い貫入が見られる。	Ⅰ a
	8	施釉	碗	底部	— — (6.8)	腰部が緩やかに膨らむ。全面を白土で白化粧し、透明釉を施釉後、畳付と内底面を蛇の目状に釉剥ぎする。細かい貫入が見られる。	Ⅰ c-4
	9	施釉	碗	底部	— — (6.0)	腰部が緩やかに膨らむ。全面を白土で白化粧し、透明釉を施釉後、外底畳付と内底面を蛇の目状に釉剥ぎする。粗い貫入が見られる。	Ⅱ b
	10	施釉	瓶	口縁	(5.0) — —	口縁は外反し、頸から肩にかけて緩やかに膨らむ。肩上位に沈線を廻らす。内外面に釉調の鈍い褐色釉を施す。	Ⅰ a
	11	施釉	酒器	底部	— — —	外面を白土で白化粧し、透明釉を施す。内面は露胎。注ぎ口貼り付け部を青緑色の釉薬で色付する。外面には溶着痕と石ハゼと考えられる痕が見られる。	Ⅱ a
第 32 図 図版 25	12	施釉	鉢	底部	— — (8.8)	内面は白土で白化粧し、透明釉を施釉後、内底面を蛇の目状に釉剥ぎする。外面は高台内まで黒釉を施し、畳付を釉剥ぎする。内底面に重ね焼き痕を残し、粗い貫入が見られる。	Ⅰ a
	13	施釉	壺	底部	— — (9.1)	内外面に黒釉を施釉後、釉剥ぎし、高台の一部を三角に抉る。内面に轆轤痕と重ね焼きの痕を残す。	Ⅰ c-4
	14	施釉	火取	底部	— — (7.8)	高台は低く、腰部が垂直に立ち上がる。上部は欠損し、残存部は露胎する。	Ⅱ b
	15	施釉	蓋	端部	庇（5.85） — —	外面は鍔際まで白土で白化粧し、文様を線刻後、藍色の絵薬で色付して透明釉を施す。内面は施釉されず、一部白化粧土が残る。掛りから鍔にかけては露胎。5mm の空気穴を持つ。摘みは欠損する。	Ⅰ a
	16	施釉	急須	胴部	— — —	全面を白土で白化粧後、二重の界線と格子文を線刻し、藍色の絵薬で色付する。内外面に透明釉が施され、細かな貫入が見られる。注ぎ口は欠損するが、貼り付け痕と小孔が確認できる。	Ⅰ b
	17	施釉	急須	胴部	— — —	外面は線刻後、白土で埋めて象嵌にし、灰釉を施す。線刻は口縁から腰部にかけて 3 本組を放射状に成す。内面は施釉せず、露胎し轆轤痕を残す。	Ⅰ a
	18	施釉	急須	底部	— — (8.0)	全面を白土で白化粧後、文様を線刻し、藍色の釉薬で色付する。内面から外面腰部まで透明釉が施され、一部は脚に掛る。内外面に細かな貫入が見られ、内面は轆轤痕が残る。外底面には、張り付けられた脚が一脚残存する。	Ⅱ b
	19	施釉	急須	底部	— — (7.4)	全面を白土で白化粧後、内面から外面腰部まで透明釉を施す。外底面は水平に削られ、腰部下位に張り付けられた脚が一脚残存する。	Ⅱ a ～Ⅲ a-1
	20	施釉	急須	底部	— — —	外底面は水平に削られ、内面から外面腰部まで光沢のある白色釉を施す。細かな貫入が見られる。	Ⅰ a
第 33 図 図版 26	21	無釉	片口	口縁	— — —	外面の口縁を押さえ、内から外に押し出し、丁寧に注ぎ口を形成する。胎土は粗く、内外面に泥釉を施す。	Ⅱ a

第 16 表　沖縄産陶器観察一覧 2

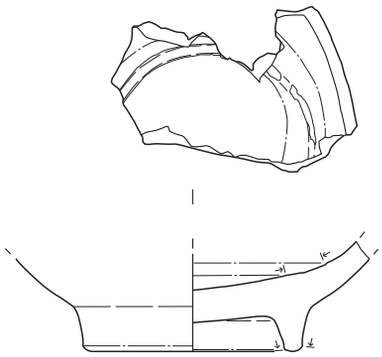
挿図番号 図版番号	番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径 ( ) は推定値	観察所見	出土地
第 33 図 図版 26	22	無釉	鉢	口縁	— — —	先端は外側に水平に折り曲げ、逆「L」字状に口縁を形成する。内面屈曲部は明瞭で、口縁平坦部に沈線を廻らす。焼き締めは弱い。擂鉢編年（安里・上原・家田 1987）Ⅳ式。	Ⅱa
	23	無釉	鉢	底部	— — (15.0)	底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がる。内外面は丁寧に器面調整され、内面は微かに工具痕が残る。焼き締めは良好。	Ⅱa
	24	無釉	鉢	底部	— — —	底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がる。外面は丁寧に器面調整されるが所々工具痕が残る。内面の器面調整はやや粗い。焼き締めは良好。	Ⅰa
	25	無釉	擂鉢	口縁	— — —	先端は外側に水平に折り曲げ、逆「L」字状に口縁を形成する。外面屈曲部に明瞭な工具痕が残る。内面屈曲部は緩やかで、胴部に向けてやや内湾する。胎土は粗雑で、黒褐色粒を多く含む。焼き締めは弱い。擂鉢編年（安里・上原・家田 1987）Ⅰ式。	Ⅱb
	26	無釉	擂鉢	口縁	— — —	先端は外側に水平に折り曲げ、逆「L」字状に口縁を形成する。。内面屈曲部は明瞭。口縁平坦部には自然釉が掛り、重ね焼きの痕が見られる。内面にスリ目を施す。外面は回転による調整痕が明瞭に残る。焼き締めは良好。擂鉢編年（安里・上原・家田 1987）Ⅳ式。	Ⅰb
	27	無釉	擂鉢	底部	— — —	底部から胴部にかけてやや直線的に立ち上がる。外面の器面調整は丁寧になされ、内面にスリ目を施す。胎土に貝を含む。焼き締めは弱い。擂鉢編年（安里・上原・家田 1987）Ⅱ式。	Ⅰa
	28	無釉	擂鉢	底部	— — —	底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がる。外面の器面調整は粗雑で、内面はスリ目を密に施す。胎土は粗雑で、黒褐色粒や赤褐色粒を含む。焼き締めは弱い。	Ⅰa
第 34 図 図版 27	29	無釉	水鉢	口縁	(25.4) — —	口唇は丸く形成し、口縁から胴部にかけ緩やかに内湾させる。外面口縁部には浅く不明瞭な幅広の沈線と櫛で波状文を描く。内外面の器面調整は丁寧で、内面に微かに工具痕が残る。焼き締めは良好。	Ⅰc-4
	30	無釉	水鉢	口縁	(25.2) — —	口唇は丸く形成し、口縁から胴部にかけ内湾させる。外面屈曲部に浅く不明瞭な幅広の二重沈線と櫛で波状文を描く。内外面の器面調整は丁寧で、内面に微かに工具痕が残る。焼き締め良好。	Ⅰc-4
	31	無釉	壺	口縁	(10.8) — —	先端を外側に水平に折り曲げ、口縁を形成する。頸部は肩から垂直に立ち上がる。外面は光沢があり、焼き締めは良好。	Ⅰa
	32	無釉	壺	底部	— — (17.2)	底部から胴部にかけてやや直線的に立ち上がる。内外面は丁寧に器面調整される。内底面には自然釉が掛り、外底面には砂目が残る。外面は光沢があり、器肉は薄く、焼き締めは良好。喜納・知花焼。	Ⅲa-1
	33	無釉	壺	底部	— — (10.6)	底部から胴部にかけて、やや直線的に立ち上がる。外面は丁寧に器面調整されるが、内面には回転による調整痕が明瞭に残る。胎土は粗雑で、黒褐色粒を含む。焼きムラが確認でき、焼き締めはやや不良。	Ⅲ？
	34	無釉	壺	底部	— — (19.2)	底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。外底面際の角を削り、面取りする。内底面は丁寧に器面調整される。	Ⅰa
第 35 図 図版 28	35	無釉	壺	底部	— — —	底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。内外面の器面調整は粗雑で、工具痕を残す。外底面際の角は削られ、面取りされる。外面は黄みがかった泥釉が施される。焼き締めは良好。	Ⅱa
	36	無釉	壺	底部	— — —	底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。外底面際の角はナデ調整で、丸める。外面はやや丁寧に器面調整され、内面は工具痕が明瞭に残る。	Ⅰb
	37	無釉	瓶	底部	— — (7.4)	底部から腰部にかけて緩やかに立ち上がる。外面の器面調整は粗雑で、石ハゼが見られる。内面に器面調整の工具痕を残す。	Ⅰa
	38	無釉	火取	底部	— — (12.0)	平底の底部から胴部に掛けてやや垂直に立ち上がる。底面を除く外面は丁寧に器面調整されるが、外底面際の角は粗く、面取りされる。内面には回転による調整痕が明瞭に残る。胎土に赤褐色粒や白色粒を含む。焼き締めはやや良好。	石積み 1 の基底石直下
	39	無釉	火炉？	口縁	(16.0) — —	口縁は少し傾斜した平坦部を持ち、内湾する。内外面は丁寧に器面調整され、外面口縁に浅く幅広の明瞭でない沈線を持つ。口唇にスス痕を残す。胎土は粗雑で、赤褐色粒や白色粒を含む。焼き締めは弱い。	Ⅱa
	40	無釉	火炉	口縁	— — —	陶質土器。内外面は丁寧に器面調整される。内面にスス痕を残す。胎土にガラス質の鉱物を含む。	表採
	41	無釉	火炉	耳	— — —	陶質土器。「ヒール（火炉）」の取っ手。中央に 10mm 程度の孔を穿つ。胎土にガラス質の鉱物を含む。	Ⅱa
	42	無釉	蓋	端部	— — (5.6)	陶質土器。土瓶の蓋と考えられる。摘みは欠損する。内外面に轆轤痕を残し、胎土にガラス質の鉱物を含む。	表採



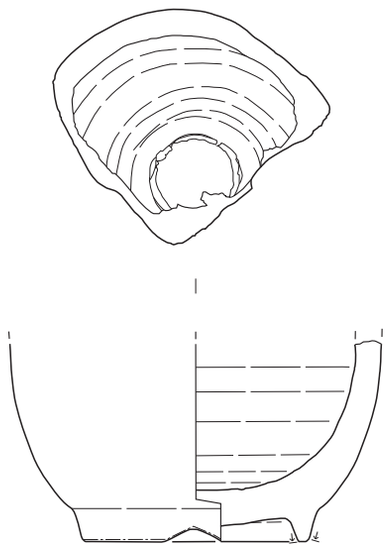
第 30 図　本土産陶磁器



第 31 図　沖縄産陶器 1



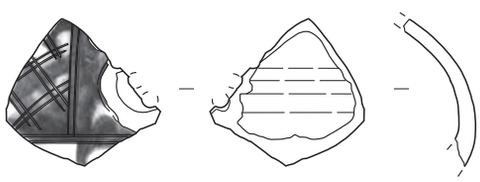
12



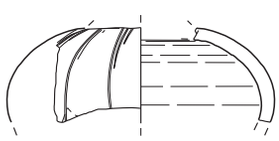
13

14

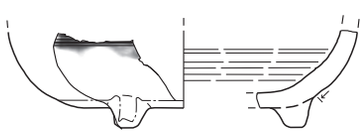
15



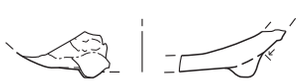
16



17



18

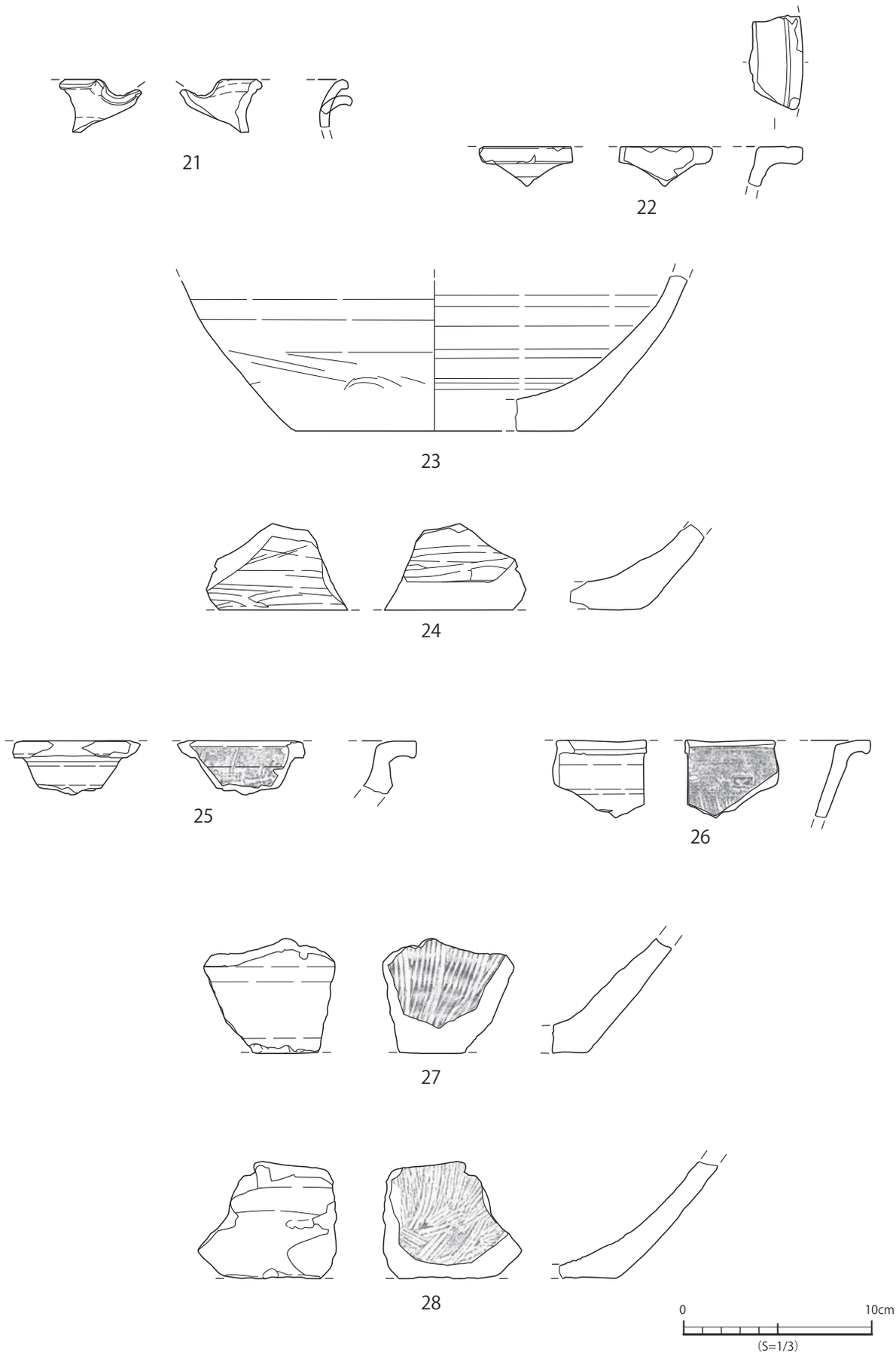


19

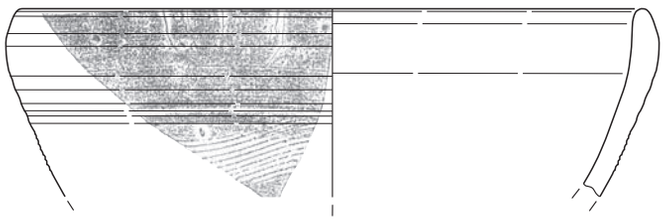
20

0 10cm
(S=1/3)

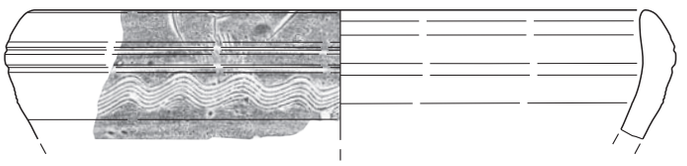
第 32 図　沖縄産陶器 2



第 33 図　沖縄産陶器 3

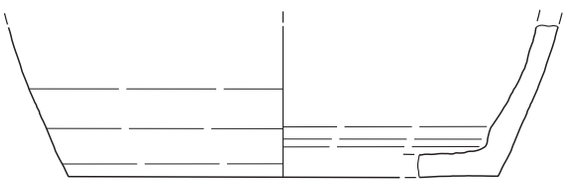


29

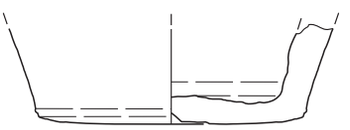


30

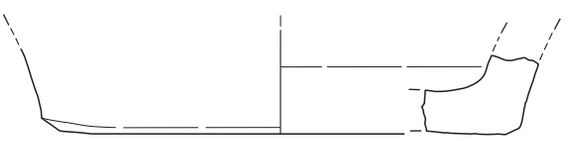
31



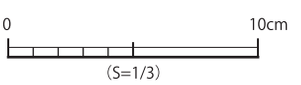
32



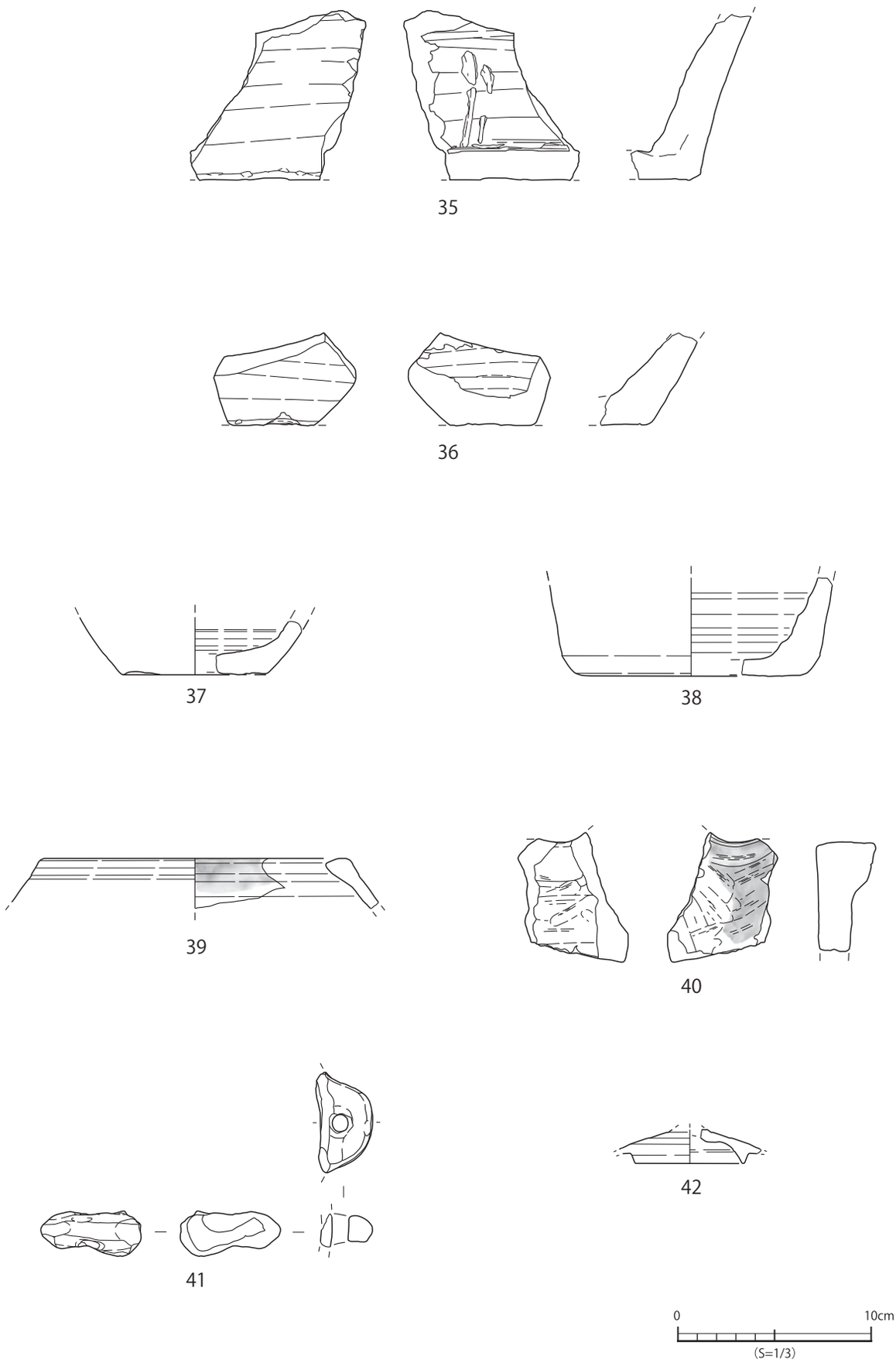
33



34



第 34 図　沖縄産陶器 4



第 35 図　沖縄産陶器 5

8. 円盤状製品（第 36 図　第 17・18 表　図版 29）

円盤状製品は総数 11 点出土している。出土状況としては、Ⅰ層・Ⅱ層から 6 点、Ⅲ層から 5 点出土している。遺構に伴うものは無い。内訳は土器を加工したものが 4 点、本土産陶磁器を加工したものが 2 点、沖縄産陶器を加工したものが 5 点である。このうち特徴的な 2 点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第 17 表　円盤状製品出土一覧

形状	材質	残存状況	層序			合計		
			Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層			
円形	土器	完形	－	－	2	2	3	10
		1/2 以上	－	－	1	1		
	本土産磁器	1/2 未満	－	1	－	1	1	
	本土産陶器	1/2 以上	1	－	－	1	1	
	沖縄産陶器	完形	－	1	1	2	5	
		1/2 以上	1	1	－	2		
		1/2 未満	－	1	－	1		
方形	土器	完形	－	－	1	1	1	1
合計			2	4	5	11		

第 18 表　円盤状製品観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	形状	法量（cm・g）				観察所見	出土地
			長軸	短軸	厚み	重量		
第 36 図 図版 29	1	円形	3.75	3.65	1.75	13.9	沖縄産施釉陶器の小碗の底部を利用して円形状に形成される。全体の 1/3 は小碗内底の釉剥ぎの外形に沿って丁寧に打割するが、残りは高台内底の外形に沿って粗雑に打割され、やや歪な円形に仕上げる。	Ⅱ a
	2	円形	3.2	3.15	0.75	11.1	沖縄産無釉陶器を利用して円形状に形成される。素材の内外面から丁寧に打割し、整った円形に仕上げる。	Ⅱ a

9. 土製品（第 36 図　第 19 表　図版 29）

土製品は総数 2 点出土している。いずれもⅢ層から出土しており、遺構に伴うものは無い。3 は煙管の雁首部分と推定され、土製（瓦質）である。

第 19 表　土製品観察一覧

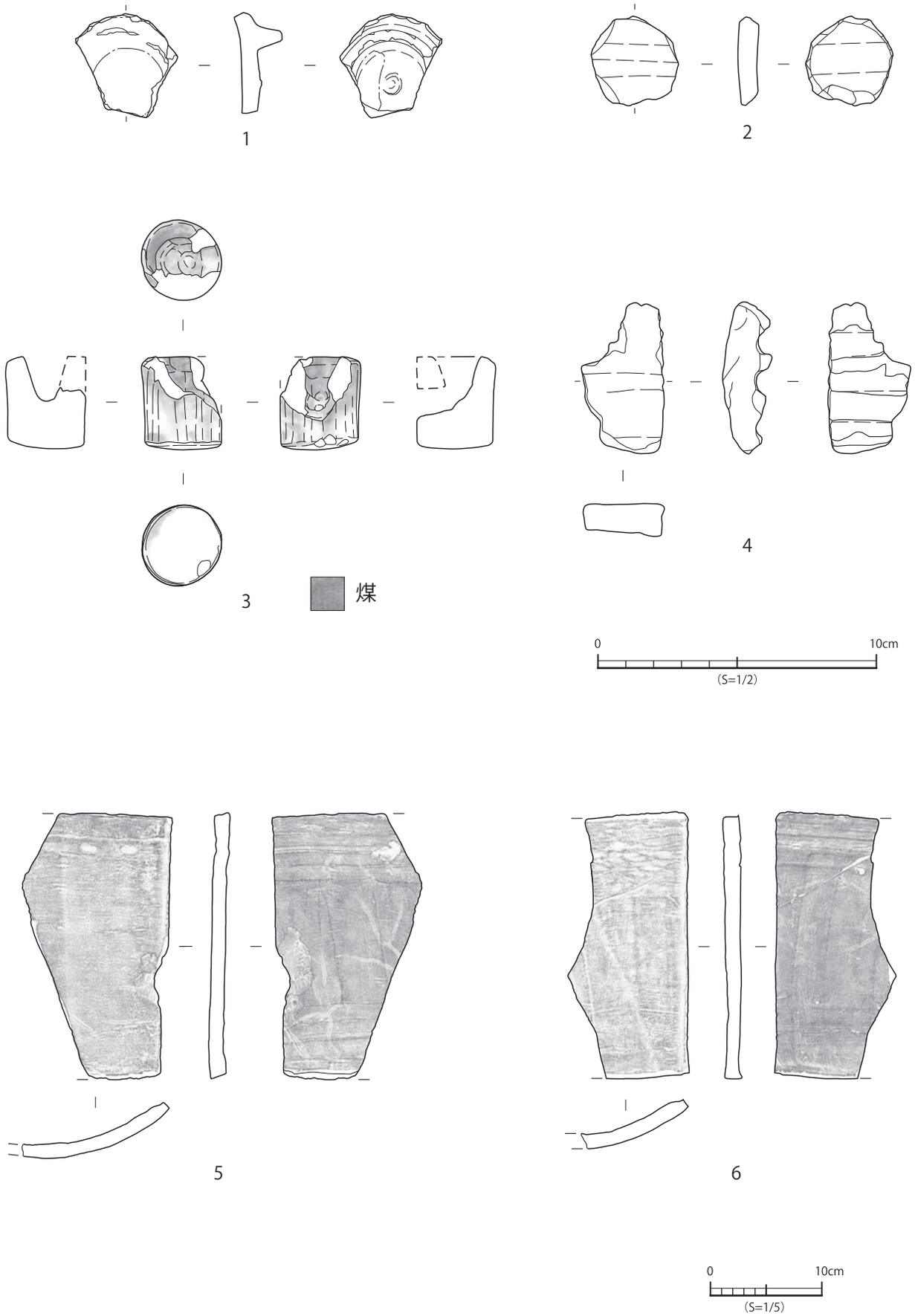
挿図番号 図版番号	番号	種類	法量（cm・g）				観察所見	出土地
			長軸	短軸	厚み	重量		
第 36 図 図版 29	3	煙管	3.35	2.85	2.9	29.4	煙管の雁首部分。瓦質の素材を円柱状に成形し、煙草の葉を詰めるための凹みと吸引用の筒を差し込むための孔を形成する。外面は丁寧に磨き調整され、火皿部分と外面の一部に煤が付着する。火皿部分と孔にかけて部分的に欠損する。	Ⅲ a-1
	4	不明	5.45	2.95	1.15	16.0	外面は面調整が成され、内面は断面が「U」字状の圧痕が並列する。胎土は粗雑で、赤褐色粒を含む。	Ⅲ b-1 ～ 3

10. 瓦（第 36 図　第 20・21 表　図版 29）

瓦は総数 16 点出土している。出土状況としては、表採やⅠ層・Ⅱ層から 13 点、Ⅲ層から 2 点出土している。遺構に伴うものは石積み遺構から 1 点出土している。内訳は平瓦が 10 点、丸瓦が 2 点、種類が不明なものが 4 点となる。全て明朝系赤瓦で、このうち特徴的な 2 点を図化し、詳細は観察一覧に記載する。

第 20 表　瓦観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	種類	残存状況	法量 (cm)	観察所見	出土地
第 36 図 図版 29	5	平瓦	1/2 以上	全長：23.85	凸面と端部は表面を丁寧にナデ調整し、横位のナデ痕が残る。凹面には布目と紐圧痕を残す。色調は橙色で、胎土に貝を含む。焼成は良好。	Ⅰ a
	6	平瓦	1/2 以下	全長：23.30	凸面と端部は表面を丁寧にナデ調整し、横位のナデ痕が残る。凹面には布目と紐圧痕を残す。色調は橙色。焼成は良好。	Ⅰ a



第 36 図　円盤状製品・土製品・瓦

第 21 表　瓦出土一覧

種類	色調	部位・残存状況	表採	層序			遺構	合計	
				Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	石積み 1		
平瓦	赤色	側面部	－	－	2	－	－	2	10
		狭端部	－	1	－	－	－	1	
		広端部	－	3	－	－	－	3	
		筒部	－	－	1	－	－	1	
		1/2 以上	－	1	－	－	－	1	
		1/2 以下	－	1	－	－	－	1	
		部位不明	－	－	－	1	－	1	
丸瓦	赤色	筒部	－	1	－	－	－	1	2
		玉縁部	1	－	－	－	－	1	
種類不明	赤色	筒部	－	－	－	－	1	1	4
		部位不明	－	1	1	1	－	3	
合計			1	8	4	2	1	16	

11. 金属製品（第 37・38 図　第 22・23 表　図版 30・31）

金属製品は総数 31 点出土している。出土状況としては、Ⅰ層・Ⅱ層から 20 点、Ⅲ層から 9 点出土している。遺構に伴うものは、石積み遺構から 2 点出土している。内訳は簪が 2 点、釘が 4 点、針金が 2 点、金属片が 13 点、留め具が 2 点、鎹・蓋・刀子・板状製品・鉄鏃・鉄滓が各 1 点、不明品が 2 点である。このうち特徴的な 8 点を図化し、その詳細を観察一覧に記載する。

1 は簪、2 は鉄鏃で、鑿型のものと推定される。4 の刀子は直線的な刃部をもつ。

第 22 表　金属製品出土一覧

種類	材質	残存状況	層序			遺構	合計	
			Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	石積み 1		
簪	青銅	竿部	1	1	－	－	2	2
釘	鉄	完形	1	－	－	－	1	4
		破損	3	－	－	－	3	
鎹	鉄	破損	－	1	－	－	1	1
針金	青銅	破損	1	1	－	－	2	2
金属片	鉄	破損	6	2	5	－	13	13
留め具	鉄	完形	1	－	－	－	1	2
		破損	1	－	－	－	1	
蓋	鉄	完形	1	－	－	－	1	1
刀子	鉄	破損	－	－	1	－	1	1
板状製品	鉄	破損	－	－	－	1	1	1
鉄鏃	鉄	完形	－	－	1	－	1	1
器種不明	鉄	部位不明	－	－	2	－	2	2
鉄滓	鉄	-	－	－	－	1	1	1
合計			15	5	9	2	31	

第 23 表　金属製品観察一覧 1

挿図番号 図版番号	番号	器種	残存状況	法量（cm・g）				観察所見	出土地
				長軸	短軸	厚み	重量		
第 37 図 図版 30	1	簪	竿部	7.5	0.35	0.3	2.5	青銅製の簪である。頭頂部が失われて竿部のみが残っているので、全体の形状は不明。竿の先端に向かい漸次細くなっている。竿の断面は 6 角形を呈する。	Ⅱ a
	2	鉄鏃	完形	5.9	1.5	1.05	10.8	鉄製の鏃である。矢頭の平面形が直刃を呈するものである。腐食の変形により鏃身と茎の区別ははっきりしない。鏃身の基部幅は矢頭までほぼ同じで、漸次厚さが薄くなり刃を形作る。	Ⅲ a-2
	3	角釘	破損	11.1	1.6	1.1	44.3	鉄製の角釘である。錆が進行して板状に剥離していたものを、接合・保存処理した。先端部が欠損しているが、全体の形状は残っている。頭部がＬ字状で、先端に向かい細くなっている。	Ⅰ a
	4	刀子	破損	21.2	2.3	1.1	83.6	鉄製の刀子である。刃がほぼ直線を描き、切先に向かい漸次細くなっている。茎部が破損しているので全体の形状は不明だが、細身の印象である。錆が進行し板状に剥離していたので、接合・保存処理を施した。	Ⅲ a-2
	5	板状製品	破損	5.15	2.3	0.35	8.4	破損しているため全体の形状や用途は不明。厚さ 0.35cmの薄い鉄板を素材に板状に加工している。長軸の先端の両端を丸く整形しているが、片方は折れ曲がっている。	石積み 1 の基底
	6	不明	部位不明	5.8	5.45	1.15	41.8	厚みが約 1cmの鉄製の破片。破損しているため形状は不明である。錆のためか厚みが一定していないが、全体的にゆるやかにカーブしている。	Ⅲ a-1

第 23 表　金属製品観察一覧 2

挿図番号 図版番号	番号	器種	残存状況	法量（cm・g）				観察所見	出土地
				長軸	短軸	厚み	重量		
第 38 図 図版 31	7	不明	部位不明	3.65	3.25	1.3	15.8	厚みが約 1cmの鉄製の破片。破損しているため全体の形状は不明である。錆のためはっきりしないが、正面がアバタ状に所々空洞になっており、裏面は平坦ではあるが中心に向かって窪んでいる。	Ⅲ b-2 ～ 4
	8	鉄滓	―	5.65	4.75	1.9	71.4	全体的に暗灰色を呈する。無数の気泡痕が表面に見られる。	石積み 1 の石材除去作業中出土

12. 銭貨（第 39 図　第 24・25 表　図版 31）

銭貨は総数 5 点出土しており、いずれも銅銭である。出土状況としては、Ⅰ層・Ⅱ層から 2 点、Ⅲ層から 3 点出土している。遺構に伴うものはない。内訳は寛永通宝が 2 点、無文銭が 2 点、銭名が不明なものが 1 点となる。全てを図化し、その詳細を観察一覧に記載する。

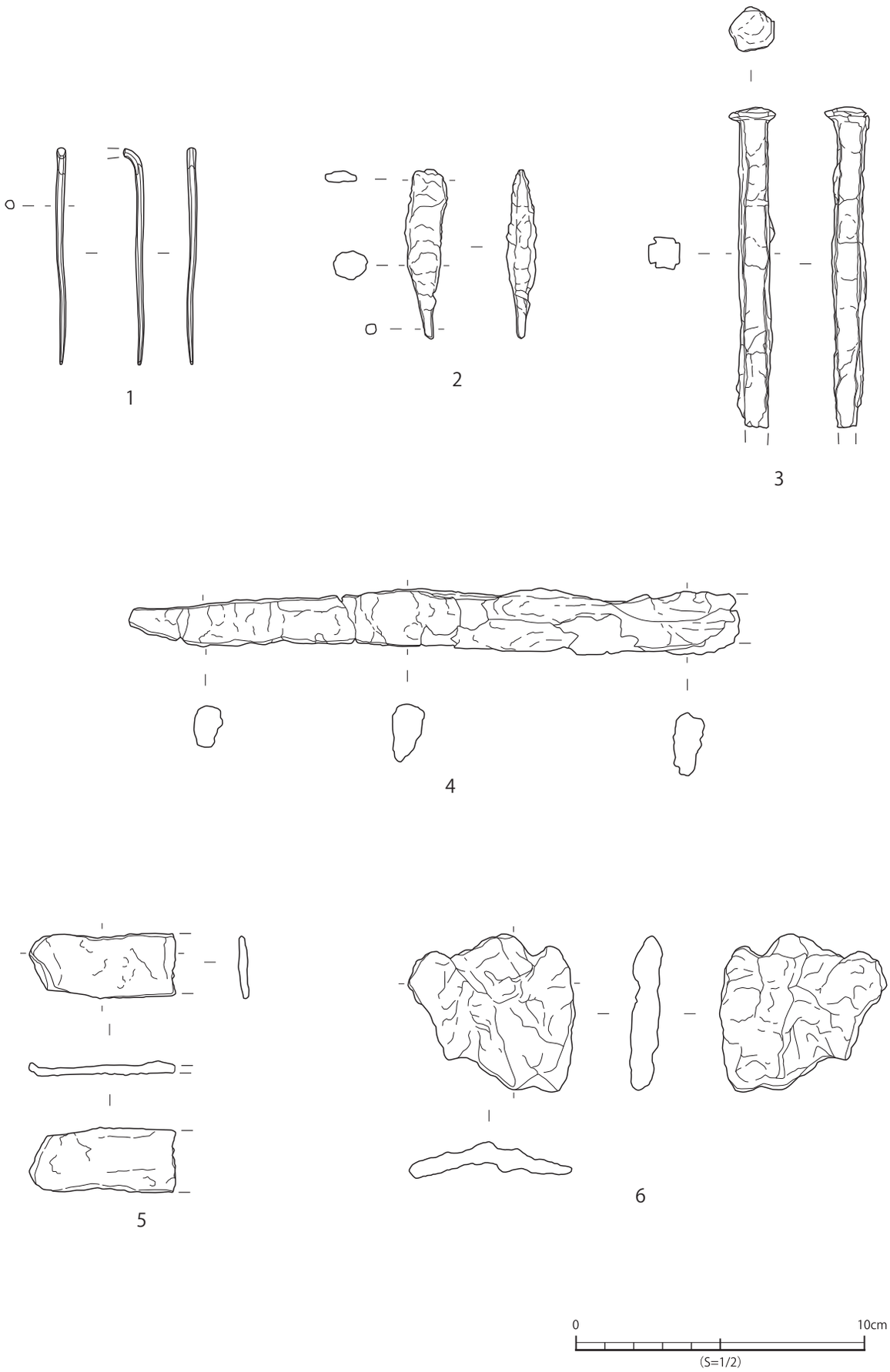
3 は内径の文字が判然とせず、輪の形状も不定である。4・5 はいわゆる鳩目銭である。

第 24 表　銭貨出土一覧

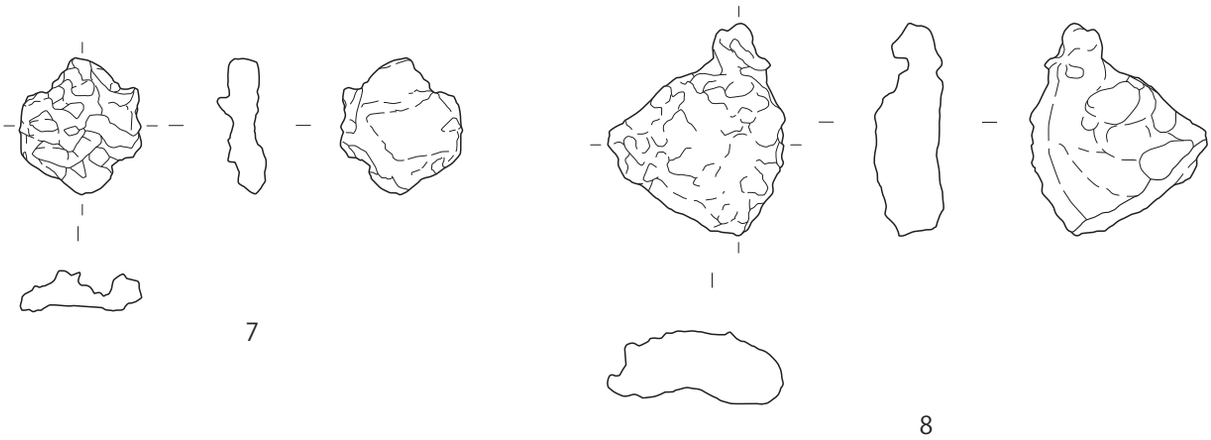
銭名	種類	残存状況	層序			合計	
			Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層		
寛永通寶	銅銭	完形	―	―	1	1	2
		破損（1/2 以上）	1	―	―	1	
天○○寶	銅銭	破損（1/2 以上）	―	―	1	1	1
無文銭	銅銭	完形	―	1	1	2	2
合計			1	1	3	5	

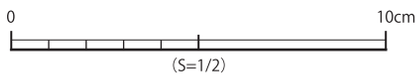
第 25 表　銭貨観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	銭名	法量（cm・g）						観察所見	出土地
			長軸	短軸	厚み	孔(長)	孔(短)	重量		
第 39 図 図版 31	1	寛永通寶	2.44	2.44	0.12	0.53	0.53	3.5	「寛」「永」「通」「寶」が確認できる。背文なし。	Ⅲ c
	2	寛永通寶	2.05	1.95	0.1	0.58	―	1.4	「寛」「寶」が確認できる。「永」、「通」は欠損する。背文なし。	Ⅰ a
	3	天○○寶	2.5	2.1	0.12	0.55	―	2.0	「天」「憘？」「寶」が確認できる。「通」は欠損する。背文なし。（天憘寶宝：北宋銭　1017 年鋳造）	Ⅲ b-2 ～ 4
	4	無文銭	1.3	1.3	0.7	0.75	0.7	0.4	鳩目銭であり、銭文はなく、銭厚は薄い。中央の孔は粗雑な方形を成す。	Ⅱ a
	5	無文銭	1.4	1.35	0.7	0.75	0.75	0.3	鳩目銭であり、銭文はなく、銭厚は薄い。中央の孔は粗雑な方形を成す。	Ⅲ a-1

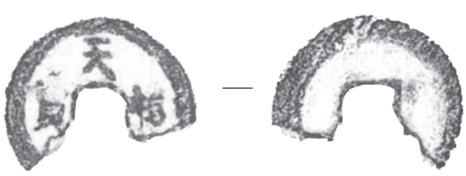


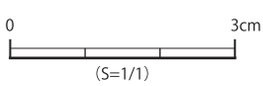
第 37 図　金属製品 1





第 38 図　金属製品 2





第 39 図　銭貨

13. 石器（第 40 図　第 26・27 表　図版 32）

石器は総数 5 点出土している。出土状況としては、表採やⅡ層から 3 点、Ⅲ層から 2 点出土している。遺構に伴うものはない。内訳は敲石兼磨石が 4 点、砥石が 1 点である。

全点を図化し、その詳細を観察一覧に記載する。

第 26 表　石器出土一覧

器種	種類	残存状況	表採	層序		合計
				Ⅱ層	Ⅲ層	
砥石	粘板岩	破損	－	1	－	1
敲石兼磨石	砂岩	破損	1	1	2	4
合計			1	2	2	5

第 27 表　石器観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	種類	材質	法量（cm・g）				観察所見	出土地
				長軸	短軸	厚み	重量		
第 40 図 図版 32	1	敲石兼磨石	砂岩	10.1	8.5	6.65	620	破損していて、台形のような形をしている。表裏面に円形の敲打痕がある。また、側面にも敲打痕が巡っている。	Ⅲ a-1
	2	敲石兼磨石	砂岩	4.9	3.75	1.65	37.1	破損しているため、全体の形状は不明であるが、卵形を縦半分し、横半分に切ったような形をしている。表面に敲打痕があり、右側面に研磨痕が見られる。	Ⅲ
	3	敲石兼磨石	砂岩	8.6	7.3	3.85	300	表面のみ当初の器面を残し、他は破損している。残存する面は研磨がなされ、所々わずかに敲打痕が見受けられる。左上に半円状に削った痕が見られる。	Ⅱ a
	4	砥石	粘板岩	6.55	5.4	1.75	83.1	残存する表面は滑らかになっており、数条の細い研磨痕が見られる。破損した裏面にも割面に整形の跡がみられる。側面に一部、当初の器面が残っているが、あとは打割したかもしくは破損している。	Ⅱ a
	5	敲石兼磨石	砂岩	12.7	7.85	6.45	930	表裏に研磨痕がある。中央部に敲打痕があり窪んでいる。また、上部と両側面にも敲打痕がある。	6A

14. 貝製品・骨製品（第 41・42 図　第 28・29 表　図版 33）

貝製品は総数 76 点出土している。出土状況としては、Ⅰ層・Ⅱ層の現代層から 14 点、Ⅲ層から 62 点出土している。遺構に伴うものはない。骨製品は 1 点のみで、Ⅱ層からの出土である。

内訳は、貝匙が 1 点、独楽が 3 点、シガヤー捕りの仕掛けが 7 点、有孔製品が 62 点、加工痕のあるものが 3 点出土している。

骨製品はサメ類の脊椎骨を素材とする有孔製品が 1 点出土している。これらのうち特徴的なものを選び、貝製品は 18 点、骨製品は 1 点を図化し、詳細は観察一覧に記載している。それぞれの製品の概要については以下に種類別に記す。

1）貝匙

ヤコウガイ製貝匙の破損品が 1 点出土している。外面の外層は入念に研磨され、真珠層が露出している。柄端の中央部に V 字型に抉りを入れ、魚の尾鰭状に加工している。

2）独楽

マガキガイ製の独楽が 3 点出土している。体層部を打ち欠いて螺軸を露出させている。

殻頂部の先端には使用によると思われる摩耗が認められる。

3）シガヤー捕りの仕掛け

イモガイの殻頂部に孔を穿ったもので、現在でも見られるようなシガヤー（小型のタコ）を捕る仕掛けに使われたものと考られる。イモガイ科の 4 種類 7 点が出土している。内訳は、クロミナシ 4 点、アジロイモ・キヌカツギイモ・ヤセイモが各 1 点である。

4）有孔製品

総数 62 点出土している。巻貝は 10 種 22 点で内訳は、ハナマルユキ 7 点、イトマキボラ 5 点、ハナビラダカラ・ホシキヌタが各 2 点、オハグロガイ・コモンダカラ・スイショウガイ・ニシキウズ・マガキガイ・ヤクシマダカラが各 1 点となっている。

二枚貝は 9 種 40 点出土している。内訳は、カワラガイ 21 点、リュウキュウザル 7 点、アラスジケマンガイ 3 点、トガリシラナミ・ヒメシャコ・ユウカゲハマグリが各 2 点、イオウハマグリ・ベニエガイ・リュウキュウマスオが各 1 点となっている。素材としてカワラガイが最も多く利用されており、次いでリュウキュウザルとハナマルユキとなっている。出土量が豊富なため、保存状態が良好な資料を中心に図化した。

5）加工痕のある製品

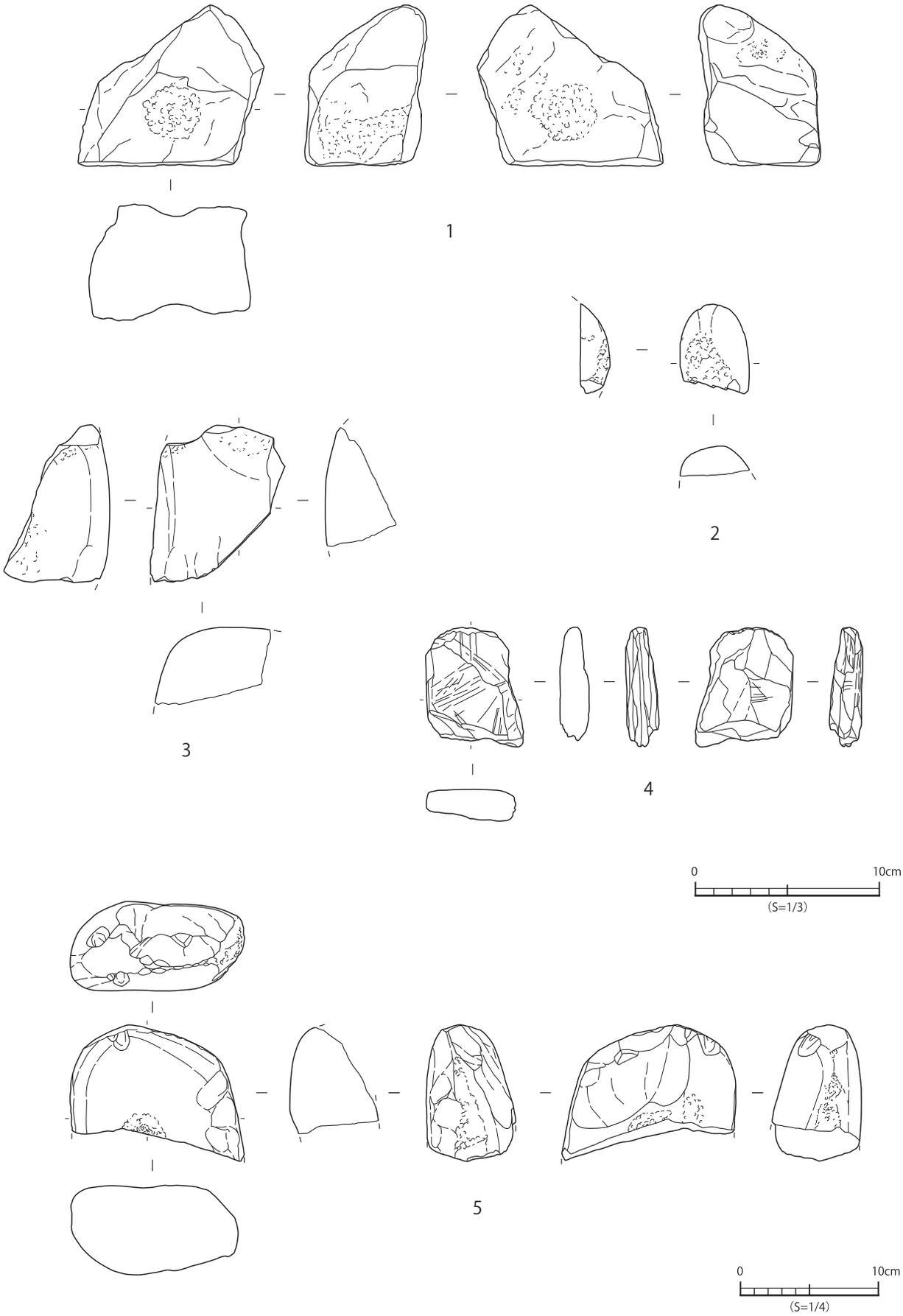
加工痕のあるものが 3 点出土している。その内、特徴的なイモガイ科のサラサミナシを 1 点図化した。螺塔部を敲打し、体層部を縦位に切り取って側縁部の両端に抉りを入れており、内面には光沢が残っているが、器種や用途等も不明である。その他に、ヤコウガイとカワラガイに加工痕のあるものが出土している。

第 28 表　貝製品・骨製品出土一覧

分類		種類		残存	層序			合計		
					Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層			
貝製品	貝匙	巻貝	ヤコウガイ	破損	－	－	1	1	1	1
	独楽	巻貝	マガキガイ	完形	－	－	3	3	3	3
	シガヤー捕りの仕掛け	巻貝	クロミナシ	完形	－	－	3	3	4	7
				破損	－	－	1	1		
			アジロイモ	完形	－	－	1	1	1	
			キヌカツギイモ	完形	－	－	1	1	1	
			ヤセイモ	完形	－	－	1	1	1	
	有孔製品	巻貝	ニシキウズ	完形	－	－	1	1	1	62
			オハグロガイ	完形	－	1	－	1	1	
			マガキガイ	破損	－	－	1	1	1	
			スイショウガイ	完形	－	－	1	1	1	
			ヤクシマダカラ	破損	－	1	－	1	1	
			ホシキヌタ	完形	－	1	1	2	2	
			コモンダカラ	完形	－	－	1	1	1	
			ハナビラダカラ	完形	－	－	2	2	2	
			ハナマルユキ	完形	1	2	4	7	7	
			イトマキボラ	完形	－	－	3	3	5	
				破損	1	－	1	2		
		二枚貝	ベニエガイ	破損	－	－	1	1	1	
			リュウキュウザル	完形	1	1	5	7	7	
			カワラガイ	完形	2	－	19	21	21	
			ヒメシャコ	完形	－	－	1	1	2	
				破損	－	－	1	1		
			トガリシラナミ	完形	－	1	1	2	2	
			アラスジケマンガイ	完形	－	－	3	3	3	
			ユウカゲハマグリ	完形	－	－	2	2	2	
			イオウハマグリ	完形	－	1	－	1	1	
			リュキュウマスオ	完形	－	－	1	1	1	
	加工痕	巻貝	ヤコウガイ	破損	1	－	－	1	1	3
			サラサミナシ	破損	－	－	1	1	1	
		二枚貝	カワラガイ	完形	－	－	1	1	1	
骨製品	有孔製品	サメ類		完形	－	1	－	1	1	1
合計					6	9	62	77		

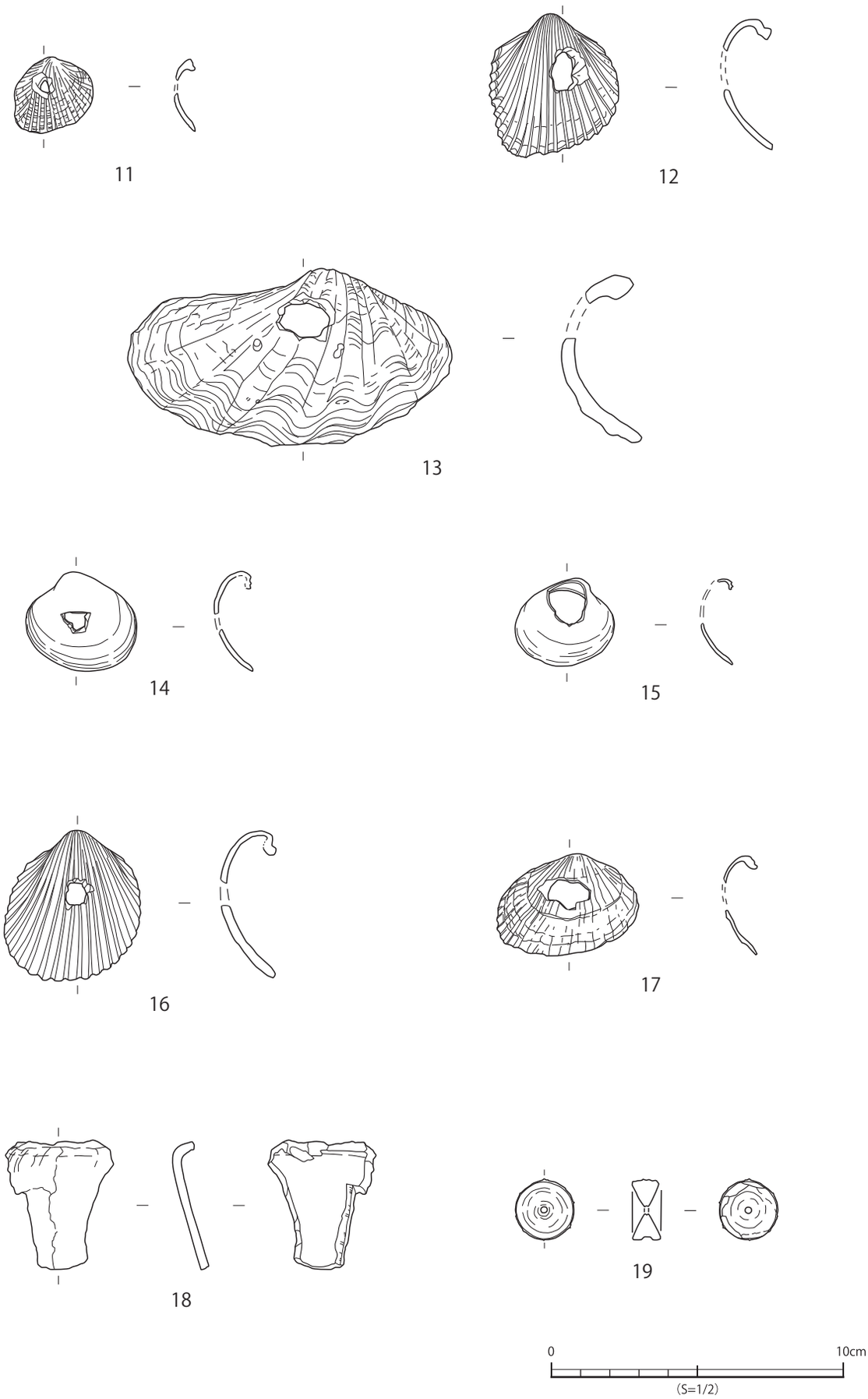
第 29 表　貝製品・骨製品観察一覧

挿図番号 図版番号		番号	分類	種類	法量 (cm・g)						観察所見	出土地
					長軸	短軸	厚さ	孔(長)	孔(短)	重量		
第 41 図 図版 33	貝製品	1	貝匙	ヤコウガイ	4.5	3.15	0.2	—	—	4.4	柄端部、身部の一端を欠く。 柄端中央部にV字状の抉りを入れ、魚の尾ひれ状に仕上げている。 加工は丁寧で、外面の螺肋は完全に消され、真珠層まで研磨されている。残存状況から小型の貝匙製品と考えられる。	Ⅲ
		2	独楽	マガキガイ	3.9	2.75	—	—	—	14.8	体層部を打ち欠いて、殻頂・螺軸中心を残している。 殻頂部分がわずかに摩耗している。	Ⅲ b-2 ～ 4
		3	独楽	マガキガイ	2.15	2.15	—	—	—	5.1	体層部を打ち欠いて、殻頂・螺軸中心を残している。 バランスをとるためか外唇の一部がわずかに残っている。 螺軸の部分がやや破損している。殻頂部分がわずかに摩耗している。	Ⅲ b-2 ～ 4
		4	独楽	マガキガイ	2.35	2.4	—	—	—	8.3	体層部を打ち欠いて、殻頂・螺軸中心を残している。 殻頂部分がやや摩耗している。螺軸の部分がやや破損している。	Ⅲ b-1 ～ 3
		5	シガヤー捕りの仕掛け	クロミナシ	4.18	2.3	—	0.35	0.3	11.5	殻頂部の中央に孔を穿っている。 やや風化しているが外面の模様は残っている。 シガヤー（小型のタコ）捕りに使う仕掛けと考えられる。	Ⅲ a-1
		6	シガヤー捕りの仕掛け	ヤセイモ	5.43	2.85	—	0.45	0.4	29.6	殻頂部の中央に孔を穿っている。全体的に風化している。シガヤー（小型のタコ）捕りに使う仕掛けと考えられる。	Ⅲ
		7	有孔製品	イトマキボラ	9.25	4.5	—	1.05	1.0	65.0	背面の外唇よりに孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 孔の周縁は摩耗している。水磨を受けている。	Ⅲ b-2 ～ 4
		8	有孔製品	スイショウガイ	5.45	3.65	—	1.2	0.75	23.3	背面の外唇よりに楕円の孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 外唇はやや欠損している。全体的にやや風化している。	Ⅲ b-2 ～ 4
		9	有孔製品	ハナマルユキ	3.1	2.55	—	2.05	1.35	7.3	背面部に孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 水磨を受けている。	Ⅲ a-1
		10	有孔製品	ホシキヌタ	4.8	3.15	—	2.8 0.4	2.6 0.2	15.1	背面部に孔を穿っている。 内面の螺軸部分を残すように背面を欠いている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 殻頂の反対側にももう一つ小孔を穿っている。	Ⅲ b-5
第 42 図 図版 33	貝製品	11	有孔製品	アラスジケマンガイ	2.7	2.6	0.1	0.4	0.3	3.0	体層部の中央からやや左寄りに孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。	Ⅲ a-2
		12	有孔製品	カワラガイ	4.9	4.4	0.15	1.3	0.8	13.0	体層部の殻頂寄りに縦長の粗孔を穿っている。	Ⅲ a-1
		13	有孔製品	トガリシラナミ	11.1	6.1	0.3	1.7	1.2	81.4	中央のやや殻頂よりに孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 周縁と孔の周縁はやや摩耗している。水磨を受けている。	Ⅱ a
		14	有孔製品	ユウカゲハマグリ	3.8	3.4	0.15	0.75	0.65	5.4	体層部の中央から殻頂寄りにやや台形の孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 内面の褐色がわずかに残っている。	Ⅲ b-2 ～ 4
		15	有孔製品	ユウカゲハマグリ	3.4	3.05	0.1	1.5	1.2	2.9	殻頂部に近い体層部に孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 内面の褐色がわずかに残っている。	Ⅲ
		16	有孔製品	リュウキュウザル	5.15	4.65	0.25	0.75	0.7	17.0	体層部の中央から殻頂寄りにやや四角い孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。	Ⅲ b-1 ～ 5
		17	有孔製品	リュウキュウマスオ	4.85	3.5	0.1	1.4	1.0	5.3	体層部のやや中央にいびつな孔を穿っている。 孔を穿つ方法は敲打によるもので研磨はみられない。 内面の紫色が色褪せつつも残っている。	Ⅲ b-2 ～ 4
		18	加工痕	サラサミナシ	4.45	3.7	0.3	—	—	9.3	螺塔部を敲打し、体層部を縦位に切り取って加工したものである。 縦位に切り取った側縁部の両端に抉りを入れている。 なお、内面には光沢が残っているが、自然によるものか磨いたものかは判然としない。外面にはわずかに褐色が残っている。	Ⅲ b-2 ～ 4
	骨製品	19	有孔製品	サメ類	2.05	2.0	1.0	0.2	0.2	3.0	サメ類の背推骨を利用し、その中央部に孔を穿っている。凸状縁部を研磨し平滑に加工する。	Ⅱ a



第 40 図　石器

第 41 図　貝製品 1



第 42 図　貝製品 2・骨製品

15. 自然遺物（第 43 ～ 45 図　第 30 ～ 37 表　図版 34 ～ 41）

1）貝類遺体

本調査地区より出土した貝製品を除く貝類遺体は、腹足綱（巻貝）が 22 科 60 種、二枚貝綱 16 科 32 種の計 38 科 92 種が確認できた（不明を除く）。これらの種別・層別検出状況及び生息場所類型組成に示した。（第 43 ～ 45 図）

最少個体数の算出方法について、巻貝は完形（全体の様相が確認でき、かつ僅かな欠けであれば完形とする）と殻頂部が残存しているものを合計し、最少個体数とした。なお、破片のみ出土した場合、1 個体として扱っている。サザエ科は殻と蓋に分けて数え、多い方を最少個体数としている。二枚貝は左右それぞれの完形・殻頂を合計し、点数の多い方を最少個体数として扱った。また、巻貝と同様に破片のみ出土した場合、数に限らず 1 個体として扱っている。

膨大な量の貝類遺体が出土しているが、種類別にみると突出して多いのが、アラスジケマンガイで全体の 71％を占めている。次いでカンギクの 14％、カワラガイ 3％、ユウカゲハマグリ 3 ％の順となっている。

層別の出土状況をみると、Ⅲ層が圧倒的に多く 30,387 個出土しており、次いで、Ⅱ層の 1,094 個、Ⅰ層 874 個の順となっている。Ⅲ層出土の資料が圧倒的に多いのは、貝溜まりから出土したものが含まれているからである。

これらを生息場所類型（第 45 図）で見てみると、アラスジケマンガイの生息する河口干潟－マングローブ域と、カンギク・カワラガイ・ユウカゲハマグリの生息する内湾・転石地域がほとんどを占めており、サンゴ礁域はわずか 1％程度であった。

2）脊椎動物遺体

本資料からは、硬骨魚綱 10 群、鳥綱 1 群、哺乳類綱 7 群が得られた。分類群が特定できないものは「種不明」とした。これら全ての種類の詳細については出土一覧にまとめている。

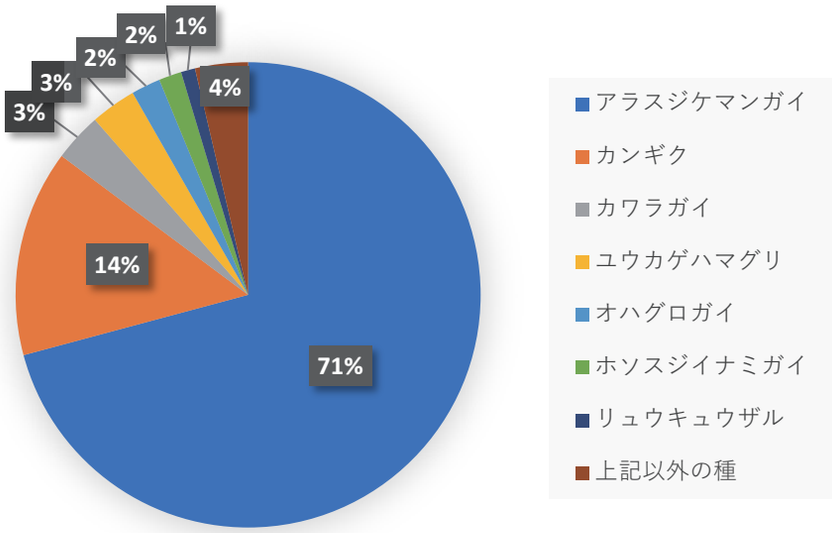
魚骨は 58 点出土している。資料の半数が種類不明であるが、ダツ科・カマス科・アジ科・タイ科・フエフキダイ科・ベラ科・ブダイ科・モンガラカワハギ科・ハリセンボン科がみられる。

哺乳類骨は 405 点出土し、全体の 6 割がウシ・ウマ・ブタ・イノシシで占められる。その他の哺乳類骨は、海獣、ヤギ・トリ・イヌが 4 割を占める。これらのうち、特徴的なものやカットマークが残存するものを抽出して写真図版に掲載している。

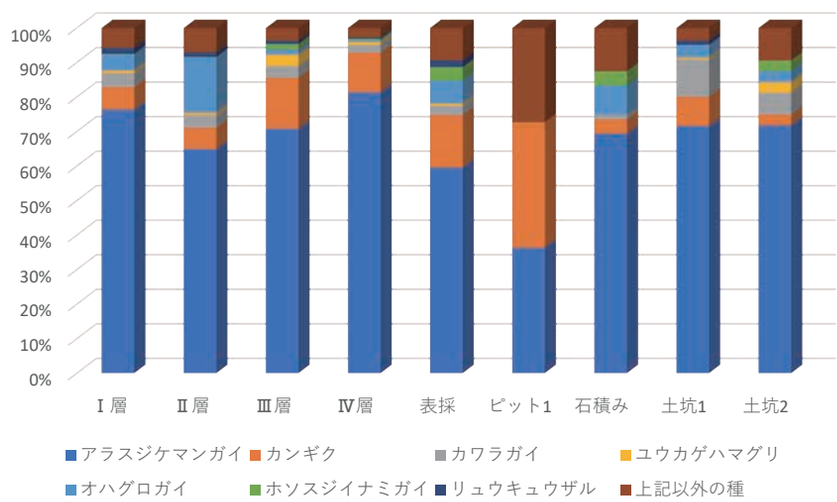
第 30 表　貝類遺体の生息場所類型表

Ⅰ	外洋・サンゴ礁域	0	潮間帯上部（Ⅰ - ノッチ、Ⅲ - マングローブ）	a	岩礁、岩盤
		1	潮間帯中部・下部	b	転石
Ⅱ	内湾・転石地域	2	亜潮間帯上縁部（Ⅰ - イノ―内）	c	岩礫底、砂泥底、砂底
		3	干瀬（Ⅰにのみ適用）	d	マングローブ植物上
Ⅲ	河口干潟・マングローブ域	4	礁斜面およびその下部	e	淡水の流入する礫底
Ⅳ	淡水域	5	止水		
		6	流水		
Ⅴ	陸域	7	林内		
		8	林内・林縁部		
		9	林縁部		
		10	海浜域		
Ⅵ	その他	11	打ち上げ物		
		12	化石		

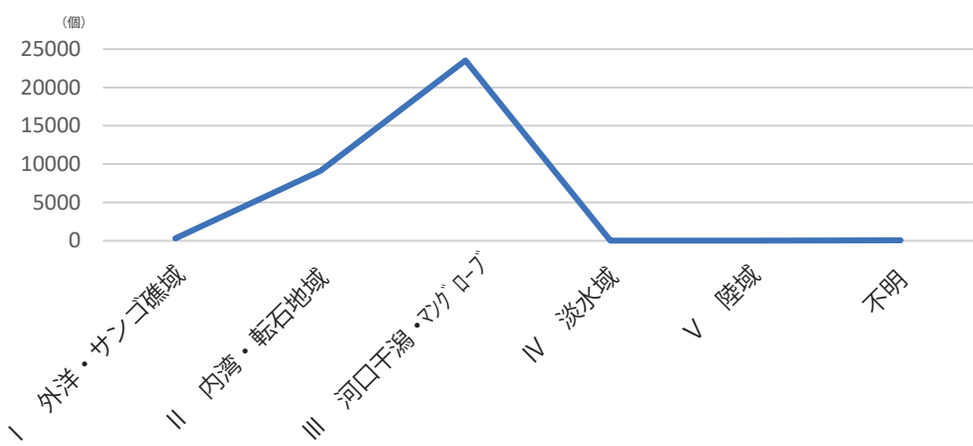
沖縄県文化財調査報告書第 84 集『古我地原貝塚（本文編）』1987 を参考に作成



第 43 図　貝類遺体種別検出状況



第 44 図　貝類遺体層別検出状況



第 45 図　貝類遺体生息場所類型組成

第 31 表　貝類遺体の分類と生息場所類型

腹足綱　GASTROPODA			生息場所類型
ニシキウズ科　*Trochidae*			
1	ニシキウズ	*Trochus maculatus*	Ⅰ-2-a
2	ギンタカハマ	*Tectus pyramis*	Ⅰ-4-a
3	サラサバテイ	*Tectus niloticus*	Ⅰ-4-a
4	イシダタミ	*Monodonta labio confusa*	Ⅱ-1-b
サザエ科　*Turbinidae*			
5	ヤコウガイ	*Turbo (Lunatica) marmoratus*	Ⅰ-4-a
6	カンギク	*Lunella coronatus coronatus*	Ⅱ-1-b
7	カンギク蓋	*(operculum)*	Ⅱ-1-b
アマオブネガイ科　*Neritidae*			
8	コシダカアマガイ	*Nerita (Cymostyla) striata*	Ⅰ-1-b
9	マルアマオブネ	*Nerita (Argonerita) histrio*	Ⅱ-1-b
10	アマオブネガイ	*Nerita (Theliostyla) albicilla*	Ⅰ-1-b
11	ニシキアマオブネ	*Nerita (Linnerita) polita*	Ⅰ-1-c
オニノツノガイ科　*Cerithiidae*			
12	オニノツノガイ	*Cerithium nodulosum*	Ⅰ-2-c
13	イワカニモリ	*Clypeomorus batillariaeformis*	Ⅱ-1-b
14	クワノミカニモリ	*Clypeomorus petrosa chemnitziana*	Ⅰ-1-b
ウミニナ科　*Batillariidae*			
15	リュウキュウウミニナ	*Batillaria flectosiphonata*	Ⅱ-2-c
16	イボウミニナ	*Batillaria zonalis*	Ⅲ-1-c
カワニナ科　*Pleuroceridae*			
17	カワニナ類	—	Ⅳ-5・6
キバウミニナ科　*Potamididae*			
18	フトヘナタリ	*Cerithidea moerchii*	Ⅲ-0-d
19	カワアイ	*Pirenella pupiformis*	Ⅲ-1-c
20	マドモチウミニナ	*Terebralia sulcata*	Ⅲ-1-c
ソデボラ科　*Strombidae*			
21	オハグロガイ	*Strombus (Canarium) urceus*	Ⅱ-2-c
22	オハグロガイ？	*Strombus (Canarium) urceus?*	Ⅱ-2-c
23	フトスジムカシタモト	*Strombus (Canarium) labiatus*	Ⅱ-2-c
24	マガキガイ	*Strombus (Conomurex) luhuanus*	Ⅱ-2-c
25	スイショウガイ	*Strombus (Laevistrombus) turturella*	Ⅱ-2-c
26	ソデボラ科不明	*Strombus spp.*	—
タカラガイ科　*Cypraeidae*			
27	ヤクシマダカラ	*Mauritia arabica*	Ⅰ-2-a
28	ホシキヌタ	*Lyncina vitellus*	Ⅰ-2-a
29	コモンダカラ	*Erosaria erosa*	Ⅰ-1-a
30	ハナビラダカラ	*Monetaria annulus*	Ⅰ-1-a
31	ハナマルユキ	*Monetaria caputserpentis*	Ⅰ-3-a
タマガイ科　*Naticidae*			
32	トミガイ	*Polinices mammilla*	Ⅰ-2-c
33	ヘソアキトミガイ	*Polinices flemingianus*	Ⅰ-2-c
34	リスガイ	*Mammilla melanostoma*	Ⅰ-2-c
35	ホウシュノタマ	*Natica gualteriana*	Ⅱ-1-c
フジツガイ科　*Ranellidae*			
36	ミツカドボラ	*Cymatium (Monoplex) nicobaricum*	Ⅰ-2-a
37	シオボラ	*Cymatium (Gutturnium) muricinum*	Ⅰ-2-a
38	ククリボラ	*Cymatium (Monoplex) exaratum*	
ムシロガイ科　*Nassariidae*			
39	イボヨフバイ	*Nassarius coronatus*	Ⅰ-1-c
40	キンシバイ	*Nassarius (Alectrion) glans*	
41	ヨフバイ	*Nassarius (Telasco) sufflatus*	Ⅰ-1-a
エゾバイ科　*Buccinidae*			
42	シマベッコウバイ	*Japeuthria cingulata*	Ⅱ-1-c
イトマキボラ科　*Fasciolariidae*			
43	イトマキボラ	*Pleuroploca trapezium trapezium*	Ⅰ-2-a
44	ナガイトマキボラ	*Pleuroploca filamentosa*	Ⅰ-2-a
45	リュウキュウツノマタ	*Latirus (Hemipolygona) polygonus*	Ⅰ-3-a
46	ツノマタモドキ	*Latirus belcheri*	Ⅰ-3-a
47	チトセボラ	*Fusinus nicobaricus*	Ⅰ-2-c
オニコブシ科　*Turbinellidae*			
48	コオニコブシ	*Vasum turbinellum*	Ⅰ-3-a
アッキガイ科　*Muricidae*			
49	コガンゼキ	*Chicoreus (Triplex) strigatus*	Ⅰ-2-a
50	ガンゼキボラ	*Chicoreus (Triplex) brunneus*	Ⅰ-4-a
51	ウネレイシダマシ	*Drupella margariticola*	Ⅰ-3-a
52	ヒロウネレイシダマシ	*Drupella crassulnata*	Ⅱ-1-b
53	ツノレイシ	*Menathais tuberosus*	Ⅰ-3-a
イモガイ科　*Conidae*			
54	ハイイロミナシ	*Conus (Rhizoconus) rattus*	
55	サラサミナシ	*Conus (Rhizoconus) capitaneus*	Ⅰ-2-a
56	ジュズカケサヤガタイモ	*Conus (Virroconus) coronatus*	Ⅰ-1-a
57	マダライモ	*Conus (Virroconus) ebraeus*	Ⅰ-1-a
58	クロミナシ	*Conus (Conus) bandanus*	Ⅰ-1-a
59	アジロイモ	*Conus (Darioconus) pennaceus*	Ⅱ-2-c
60	キヌカツギイモ	*Conus (Virgiconus) flavidus*	Ⅰ-2-a
61	ヤセイモ	*Conus (Virgiconus) emaciatus*	Ⅰ-2-a
62	イモガイ科不明	*Conus spp.*	—

腹足綱　GASTROPODA			生息場所類型
タニシ科　*Viviparidae*			
63	マルタニシ	*Cipangopaludina chinensis laeta*	Ⅳ-6
ヤマタニシ科　*Cyclophoridae*			
64	オキナワヤマタニシ	*Cyclophorus turgidus turgidus*	Ⅴ-8
アフリカマイマイ科　*Achatinidae*			
65	アフリカマイマイ	*Achatina fulica*	Ⅴ-9
ナンバンマイマイ科　*Camaenidae*			
66	シュリマイマイ	*Satsuma mercatoria mercatoria*	Ⅴ-8
オナジマイマイ科　*Bradybaenidae*			
67	オキナワウスカワマイマイ	*Acusta despecta*	Ⅴ-9
68	巻貝不明	*unknown (marine gastorpods)*	—
二枚貝綱　*BIVALVIA*			
フネガイ科　Arcidae			
1	カリガネエガイ	*Barbatia (Savignyarca) virescens*	Ⅱ-1-a
2	ベニエガイ	*Barbatia (Ustularca) amygdalum tostum*	Ⅰ-2-a
3	リュウキュウサルボオ	*Anadara antiquata*	Ⅱ-2-c
タマキガイ科　*Glycymerididae*			
4	ソメワケグリ	*Glycymeris (Veletuceta) reevei*	Ⅱ-2-c
ウグイスガイ科　*Pteriidae*			
5	ミドリアオリ	*Pinctada maculata*	Ⅰ-1-a
6	クロチョウガイ	*Pinctada margaritifela*	Ⅰ-4-a
イタボガキ科　*Ostreidae*			
7	オハグロガキ	*Saccostrea mordax*	Ⅰ-1-a
ウミギク科　*Spondylidae*			
8	メンガイ類	*Spondylus sp.cf.squamosus*	—
ツキガイ科　*Lucinidae*			
9	ウラキツキガイ	*Codakia paytenorum*	Ⅱ-2-c
キクザルガイ科　*Chamidae*			
10	キクザル類	*Chama sp.*	—
シジミ科　*Corbiculidae*			
11	シレナシジミ	*Geloina erosa*	Ⅲ-0-c
ザルガイ科　*Cardiidae*			
12	リュウキュウザル	*Regozara angulata*	Ⅱ-2-c
13	カワラガイ	*Fragum unedo*	Ⅱ-2-c
シャコガイ科　*Tridacnidae*			
14	ヒメシャコ	*Tridacna crocea*	Ⅰ-2-a
15	ヒレシャコ	*Tridacna squamosa*	Ⅰ-2-c
16	トガリシラナミ	*Tridacna noae*	Ⅰ-1-a
17	シャコガイ科不明	*Tridacna spp.*	—
マルスダレガイ科　*Veneridae*			
18	ヌノメガイ	*Periglypta puerpera*	Ⅱ-1-c
19	アラスジケマンガイ	*Gafrarium tumidum*	Ⅲ-1-c
20	ホソスジイナミガイ	*Gafrarium pectinatum*	Ⅱ-1-c
21	ユウカゲハマグリ	*Pitar citrinus*	Ⅱ-2-c
22	イオウハマグリ	*Pitar sulfureus*	Ⅱ-1-c
23	マルオミナエシ	*Lioconcha castrensis*	Ⅰ-2-a
24	リュウキュウアサリ	*Tapes literatus*	Ⅱ-2-c
25	ヒメリュウキュウアサリ	*Tapes belcheri*	Ⅱ-2-c
26	ハマグリ類	*Meretrix sp.cf.lusoria*	Ⅱ-2-c
27	ダテオキシジミ	*Cyclina sinensis*	Ⅱ-2-c
28	マルスダレガイ科不明	*Veneridae spp.*	—
フジノハナガイ科　*Donacidae*			
29	リュウキュウナミノコ	*Latona faba*	Ⅰ-1-c
ニッコウガイ科　*Tellinidae*			
30	リュウキュウシラトリ	*Quidnipagus palatam*	Ⅱ-1-c
31	モチヅキザラ	*Cyclotellina remies*	Ⅰ-2-c
シオサザナミ科　*Psammobiidae*			
32	マスオガイ	*Psammotaena elongata*	Ⅱ-1-c
33	リュウキュウマスオ	*Asaphis violascens*	Ⅱ-1-c
バカガイ科　*Mactridae*			
34	リュウキュウバカガイ	*Mactra maculata*	Ⅱ-2-c
チドリマスオ科　*Mesodesmatidae*			
35	イソハマグリ	*Atactodea striata*	Ⅰ-1-c
36	二枚貝不明	*unknown (marine bivalves)*	—

※貝製品のみに見られるコモンダカラ・ハナマルユキ・キヌカツギイモ・トガリシラナミも合わせて記載。

【参考文献】
・奥谷喬司　『日本近海産貝類図鑑【第二版】』東海大学出版部　2017
・行田義三　『貝の図鑑　採集と標本の作り方』株式会社 南方新社　2012
・和田恵次　『汽水域に生きる巻貝たち －その生態研究史と保全－』
　東海大学出版部　2018

第 32 表　貝類遺体出土一覧（巻貝 1）

科　名	貝種名	生息地	残存	表採	層　序				遺構				合　計			最少個体数
					Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	石積み 1	土坑 1	土坑 2	土坑 3				
ニシキウズ科	ニシキウズ	Ⅰ -2-a	完形	—	—	—	4	—	—	—	—	—	4	66	71	58
			殻頂	—	3	3	48	—	—	—	—	—	54			
			破片	—	—	2	6	—	—	—	—	—	8			
	ギンタカハマ	Ⅰ -4-a	殻頂	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1		1
	サラサバテイ	Ⅰ -4-a	殻頂	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1		1
	イシダタミ	Ⅱ -1-b	完形	—	—	—	3	—	—	—	—	—	3	3		3
サザエ科	ヤコウガイ	Ⅰ -4-a	破片	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	4,741	1
	カンギク	Ⅱ -1-b	完形	19	40	58	4,233	25	3	11	1	4	4,394	4,740		4,674
			殻頂	4	16	11	245	1	—	3	—	—	280			
			破片	—	1	—	9	—	—	—	—	—	10			
	カンギク蓋		完形	—	—	1	54	1	—	—	—	—	56			
アマオブネガイ科	コシダカアマガイ	Ⅰ -1-b	完形	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2	2	17	2
	マルアマオブネ	Ⅱ -1-b	完形	—	—	—	10	—	—	—	—	—	10	11		11
			殻頂	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1			
	アマオブネガイ	Ⅰ -1-b	完形	—	—	—	3	—	—	—	—	—	3	3		3
	ニシキアマオブネ	Ⅰ -1-c	完形	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1		1
オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ -2-c	殻頂	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	137	1
	イワカニモリ	Ⅱ -1-b	完形	—	—	—	38	—	—	—	—	—	38	108		105
			殻頂	1	—	1	64	1	—	—	—	—	67			
			破片	1	—	—	2	—	—	—	—	—	3			
	クワノミカニモリ	Ⅰ -1-b	完形	—	—	—	15	—	—	—	—	—	15	28		28
			殻頂	—	—	—	13	—	—	—	—	—	13			
ウミニナ科	リュウキュウウミニナ	Ⅱ -2-c	殻頂	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	4	1
	イボウミニナ	Ⅲ -1-c	完形	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	3		2
			殻頂	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1			
			破片	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1			
カワニナ科	カワニナ類	Ⅳ -5・6	殻頂	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	1	1	1
キバウミニナ科	フトヘナタリ	Ⅲ -0-d	完形	—	—	1	4	—	—	—	—	—	5	16	72	13
			殻頂	—	—	—	8	—	—	—	—	—	8			
			破片	—	—	—	3	—	—	—	—	—	3			
	カワアイ	Ⅲ -1-c	完形	—	—	—	9	—	—	—	—	—	9	14		14
			殻頂	—	—	—	5	—	—	—	—	—	5			
	マドモチウミニナ	Ⅲ -1-c	完形	—	—	—	5	—	—	—	—	—	5	42		40
			殻頂	—	—	1	32	—	—	1	—	1	35			
			破片	—	—	—	1	—	—	—	—	1	2			
ソデボラ科	オハグロガイ	Ⅱ -2-c	完形	4	13	49	245	1	1	5	—	—	318	671	699	659
			殻頂	6	26	127	176	—	4	1	1	—	341			
			破片	—	2	2	7	—	1	—	—	—	12			
	フトスジムカシタモト	Ⅱ -2-c	完形	—	—	—	6	—	—	—	—	—	6	6		6
	マガキガイ	Ⅱ -2-c	完形	—	2	1	3	—	—	—	—	—	6	15		14
			殻頂	1	—	2	5	—	—	—	—	—	8			
			破片	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1			
	スイショウガイ	Ⅱ -2-c	完形	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2	6		5
			殻頂	—	—	—	3	—	—	—	—	—	3			
			破片	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1			
	種不明	—	殻頂	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1		1
タカラガイ科	ヤクシマダカラ	Ⅰ -2-a	殻頂	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	9	1
	ホシキヌタ	Ⅰ -2-a	完形	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	4		2
			殻頂	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1			
			破片	—	—	2	—	—	—	—	—	—	2			
	ハナビラダカラ	Ⅰ -1-a	完形	—	—	—	3	—	—	—	—	—	3	4		4
			殻頂	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1			
タマガイ科	トミガイ	Ⅰ -2-c	殻頂	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	14	1
	ヘソアキトミガイ	Ⅰ -2-c	完形	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1		1
	リスガイ	Ⅰ -2-c	完形	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2	2		2
	ホウシュノタマ	Ⅱ -1-c	完形	1	—	—	8	—	—	—	—	—	9	10		10
			殻頂	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1			

第 32 表　貝類遺体出土一覧（巻貝 2）

科　名	貝種名	生息地	残存	表採	層　序				遺構				合 計			最少個体数
					Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	石積み 1	土坑 1	土坑 2	土坑 3				
フジツガイ科	ミツカドボラ	Ⅰ-2-a	殻頂	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1	1	5	1
	シオボラ	Ⅰ-2-a	完形	－	－	－	2	－	－	－	－	－	2	3		3
			殻頂	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1			
	ククリボラ	—	完形	－	－	1	－	－	－	－	－	－	1	1		1
ムシロガイ科	イボヨフバイ	Ⅰ-1-c	完形	－	－	1	6	－	－	－	－	－	7	7	9	7
	キンシバイ		殻頂	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1		1
	ヨフバイ	Ⅰ-1-a	完形	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1		1
エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c	完形	－	－	1	99	－	－	－	－	－	100	107	107	107
			殻頂	－	1	－	6	－	－	－	－	－	7			
イトマキボラ科	イトマキボラ	Ⅰ-2-a	完形	－	3	2	9	－	－	－	－	－	14	24	33	22
			殻頂	1	1	1	4	－	－	－	1	－	8			
			破片	－	－	1	1	－	－	－	－	－	2			
	ナガイトマキボラ	Ⅰ-2-a	破片	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1	1		1
	リュウキュウツノマタ	Ⅰ-3-a	完形	－	－	－	2	－	－	－	－	－	2	2		2
	ツノマタモドキ	Ⅰ-3-a	完形	－	－	－	3	－	－	－	－	－	3	4		4
			殻頂	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1			
	チトセボラ	Ⅰ-2-c	完形	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	2		2
			殻頂	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1			
オニコブシ科	コオニコブシ	Ⅰ-3-a	完形	－	－	－	3	－	－	－	－	－	3	5	5	4
			殻頂	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1			
			破片	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1			
アッキガイ科	コガンゼキ	Ⅰ-2-a	完形	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1	6	1
	ガンゼキボラ	Ⅰ-4-a	完形	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1		1
	ウネレイシダマシ	Ⅰ-3-a	完形	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1		1
	ヒロウネレイシダマシ	Ⅱ-1-b	完形	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1		1
	ツノレイシ	Ⅰ-3-a	完形	－	－	－	2	－	－	－	－	－	2	2		2
イモガイ科	ハイイロミナシ	—	完形	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1	26	1
	サラサミナシ	Ⅰ-2-a	殻頂	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1		1
	ジュズカケサヤガタイモ	Ⅰ-1-a	完形	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1		1
	マダライモ	Ⅰ-1-a	完形	－	－	－	2	－	－	－	－	－	2	2		2
	クロミナシ	Ⅰ-1-a	完形	－	－	1	11	－	1	－	－	－	13	15		15
			殻頂	－	－	－	2	－	－	－	－	－	2			
	アジロイモ	Ⅱ-2-c	完形	－	－	－	3	－	－	－	－	－	3	3		3
	ヤセイモ	Ⅰ-2-a	完形	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1		1
	種不明	—	殻頂	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	2		1
			破片	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1			
タニシ科	マルタニシ	Ⅳ-6	殻頂	1	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	1	1
ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8	完形	－	1	1	6	1	－	－	－	－	9	15	15	13
			殻頂	－	－	1	3	－	－	－	－	－	4			
			破片	－	－	－	2	－	－	－	－	－	2			
アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	Ⅴ-9	完形	－	1	－	1	－	1	－	－	－	3	3	3	3
ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ-8	完形	－	1	－	5	－	－	－	－	－	6	13	13	7
			破片	－	－	1	6	－	－	－	－	－	7			
オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ	Ⅴ-9	破片	－	－	－	2	－	－	－	－	－	2	2	2	1
科不明	種不明	—	破片	1	－	－	4	－	－	－	－	－	5	5	5	1
合　計				40	114	274	5,495	30	11	21	4	6	5,995			5,879

第 33 表　貝類遺体出土一覧（二枚貝 1）

科　名	貝種名	残存	左右	生息地	表採	層　序				遺構				合　計			最少個体数
						Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	石積み 1	土坑 1	土坑 2	土坑 3				
フネガイ科	カリガネエガイ	完形	右	Ⅱ-1-a	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	61	1
	ベニエガイ	完形	左	Ⅰ-2-a	—	2	—	16	—	—	—	—	—	18	40		22
			右		—	—	1	14	—	—	—	—	—	15			
		殻頂	左		1	—	—	2	1	—	—	—	—	4			
			右		—	—	—	3	—	—	—	—	—	3			
	リュウキュウサルボオ	完形	左	Ⅱ-2-c	—	2	—	6	—	—	—	—	—	8	20		11
			右		—	1	—	3	—	—	—	—	—	4			
		殻頂	左		—	—	—	3	—	—	—	—	—	3			
			右		—	—	1	2	—	—	1	—	—	4			
		破片	右		—	—	1	—	—	—	—	—	—	1			
タマキガイ科	ソメワケグリ	完形	右	Ⅱ-2-c	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2	2	2	2
ウグイスガイ科	ミドリアオリ	完形	左	Ⅰ-1-a	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	6	7	3
			右		—	—	—	2	—	—	—	—	—	2			
		殻頂	左		—	—	—	2	—	—	—	—	—	2			
			右		—	—	—	1	—	—	—	—	—	1			
	クロチョウガイ	破片	右	Ⅰ-4-a	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	1		1
イタボガキ科	オハグロガキ	殻頂	左	Ⅰ-1-a	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	1	1
ウミギク科	メンガイ類	完形	左	—	—	—	—	4	—	—	—	—	—	4	10	10	5
			右		—	—	—	2	—	—	—	—	—	2			
		殻頂	左		—	—	—	1	—	—	—	—	—	1			
		破片	左		—	—	—	3	—	—	—	—	—	3			
ツキガイ科	ウラキツキガイ	完形	左	Ⅱ-2-c	—	—	1	2	—	—	—	—	—	3	6	6	3
			右		—	—	—	2	—	—	—	—	—	2			
		殻頂	右		—	—	—	1	—	—	—	—	—	1			
キクザルガイ科	キクザル類	殻頂	右	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1	1	1
シジミ科	シレナシジミ	完形	左	Ⅲ-0-c	—	2	1	12	—	—	—	—	—	15	64	64	32
			右		—	2	—	16	—	—	—	1	—	19			
		殻頂	左		—	2	3	12	—	—	—	—	—	17			
			右		—	—	—	7	1	—	—	—	—	8			
		破片	左		—	—	1	1	—	—	—	—	—	2			
			右		—	—	1	2	—	—	—	—	—	3			
ザルガイ科	リュウキュウザル	完形	左	Ⅱ-2-c	3	5	7	140	1	—	1	—	—	157	325	1,437	166
			右		—	6	7	125	—	—	1	—	—	139			
		殻頂	左		—	2	—	7	—	—	—	—	—	9			
			右		—	2	—	8	—	—	—	—	—	10			
		破片	左		—	—	—	5	—	—	—	—	—	5			
			右		—	—	1	4	—	—	—	—	—	5			
	カワラガイ	完形	左	Ⅱ-2-c	—	12	14	457	2	—	6	1	—	492	1,112		540
			右		3	16	16	430	2	1	11	—	—	479			
		殻頂	左		—	3	5	39	—	—	1	—	—	48			
			右		1	4	3	45	1	—	—	1	—	55			
		破片	左		—	—	2	17	—	—	—	—	—	19			
			右		—	—	—	19	—	—	—	—	—	19			

第 33 表　貝類遺体出土一覧（二枚貝 2）

科　名	貝種名	残存	左右	生息地	表採	層　序				遺構				合　計			最少個体数
						Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	石積み 1	土坑 1	土坑 2	土坑 3				
シャコガイ科	ヒメシャコ	完形	左	Ⅰ-2-a	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	12	38	4
			右		—	—	1	—	—	—	—	—	—	1			
		殻頂	左		—	—	—	2	—	—	—	—	—	2			
			右		—	—	—	2	—	1	—	—	—	3			
		破片	左		—	1	1	1	—	1	—	—	—	4			
			右		—	—	—	1	—	—	—	—	—	1			
	ヒレシャコ	完形	左	Ⅰ-2-c	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	22		3
		殻頂	左		1	—	—	1	—	—	—	—	—	2			
			右		—	—	—	2	—	—	—	—	—	2			
		破片	左		—	—	2	10	—	—	—	—	—	12			
			右		—	—	1	4	—	—	—	—	—	5			
	シャコガイ科不明	破片	左	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	4		1
			右		1	—	—	1	—	1	—	—	—	3			
マルスダレガイ科	ヌノメガイ	完形	左	Ⅱ-1-c	—	1	—	1	—	—	—	—	—	2	11	25,318	7
			右		—	—	—	5	—	—	—	—	—	5			
		殻頂	右		—	—	—	2	—	—	—	—	—	2			
		破片	左		—	—	—	2	—	—	—	—	—	2			
	アラスジケマンガイ	完形	左	Ⅲ-1-c	34	301	321	10,287	97	23	61	10	1	11,135	23,381		11,629
			右		44	321	319	10,297	80	26	56	13	3	11,159			
		殻頂	左		7	22	23	397	3	—	—	—	—	452			
			右		4	18	33	408	4	1	2	—	—	470			
		破片	左		—	1	3	75	—	—	—	—	—	79			
			右		1	5	7	73	—	—	—	—	—	86			
	ホソスジイナミガイ	完形	左	Ⅱ-1-c	1	1	—	243	—	1	—	—	—	246	522		266
			右		3	—	1	252	1	2	—	1	—	260			
		殻頂	左		—	—	—	2	—	—	—	—	—	2			
			右		1	—	—	5	—	—	—	—	—	6			
		破片	左		—	—	—	4	—	—	—	—	—	4			
			右		1	—	—	3	—	—	—	—	—	4			
	ユウカゲハマグリ	完形	左	Ⅱ-2-c	—	3	4	434	1	—	—	—	—	442	1,049		518
			右		—	4	3	449	1	—	1	1	—	459			
		殻頂	左		1	—	1	56	—	—	—	—	—	58			
			右		—	—	—	59	—	—	—	—	—	59			
		破片	左		—	—	—	17	—	—	—	—	—	17			
			右		—	—	—	14	—	—	—	—	—	14			
	イオウハマグリ	完形	左	Ⅱ-1-c	—	3	6	73	—	—	1	—	—	83	173		91
			右		—	3	5	72	—	—	1	—	—	81			
		殻頂	左		—	—	—	8	—	—	—	—	—	8			
			右		—	—	—	1	—	—	—	—	—	1			
	マルオミナエシ	殻頂	右	Ⅰ-2-a	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	1		1
	リュウキュウアサリ	完形	左	Ⅱ-2-c	—	—	—	2	—	—	—	—	—	2	15		4
			右		—	—	—	2	—	—	—	—	—	2			
		殻頂	左		—	—	—	2	—	—	—	—	—	2			
			右		—	—	—	1	—	—	—	—	—	1			
		破片	左		—	—	—	5	—	—	—	—	—	5			
			右		—	—	—	3	—	—	—	—	—	3			

第 33 表　貝類遺体出土一覧（二枚貝 3）

科　名	貝種名	残存	左右	生息地	表採	層　序				遺構				合　計			最少個体数
						Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	石積み 1	土坑 1	土坑 2	土坑 3				
マルスダレガイ科	ヒメリュウキュウアサリ	完形	左	Ⅱ -2-c	－	1	－	4	－	－	－	－	－	5	16		9
			右		－	－	1	4	－	－	－	－	－	5			
		殻頂	左		－	1	－	3	－	－	－	－	－	4			
			右		－	－	－	2	－	－	－	－	－	2			
	ハマグリ類	完形	左	Ⅱ -2-c	－	－	－	24	－	－	1	－	－	25	114		51
			右		－	－	5	20	－	－	－	－	－	25			
		殻頂	左		－	3	－	17	－	1	－	－	1	22			
			右		2	4	2	17	－	1	－	－	－	26			
		破片	左		－	－	1	6	－	－	－	－	－	7			
			右		－	1	1	7	－	－	－	－	－	9			
	ダテオキシジミ	完形	左	Ⅱ -2-c	－	－	－	12	1	－	－	－	－	13	30		15
			右		－	－	4	7	－	－	－	－	－	11			
		殻頂	左		－	－	1	1	－	－	－	－	－	2			
			右		－	－	2	2	－	－	－	－	－	4			
	マルスダレガイ科不明	殻頂	左	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	3	6		3
			右		－	－	－	2	－	－	－	－	－	2			
		破片	左		－	－	－	1	－	－	－	－	－	1			
フジノハナガイ科	リュウキュウナミノコ	完形	右	Ⅰ -1-c	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1	1	1
ニッコウガイ科	リュウキュウシラトリ	破片	右	Ⅱ -1-c	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1	2	1
	モチヅキザラ	完形	右	Ⅰ -2-c	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	1		1
シオサザナミ科	マスオガイ	完形	左	Ⅱ -1-c	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	2	13	1
			右		－	－	－	1	－	－	－	－	－	1			
	リュウキュウマスオ	完形	左	Ⅱ -1-c	－	－	1	3	－	－	－	－	－	4	11		6
		殻頂	左		－	－	－	2	－	－	－	－	－	2			
			右		－	1	－	2	－	－	1	－	－	4			
		破片	左		－	－	－	1	－	－	－	－	－	1			
バカガイ科	リュウキュウバカガイ	完形	左	Ⅱ -2-c	－	1	1	5	－	－	－	－	－	7	13	13	7
			右		－	－	1	4	－	－	－	－	－	5			
		殻頂	右		－	－	－	1	－	－	－	－	－	1			
チドリマスオ科	イソハマグリ	完形	左	Ⅰ -1-c	1	－	1	14	－	2	－	－	－	18	31	31	18
			右		1	－	1	10	－	－	－	－	－	12			
		殻頂	右		－	－	－	1	－	－	－	－	－	1			
科不明	種不明	破片	左	－	－	1	－	6	－	－	－	－	－	7	13	13	1
			右		－	－	－	6	－	－	－	－	－	6			
合　計					111	760	820	24,892	196	61	145	28	5	27,018			13,426

第 34 表　ブタ・イノシシ出土一覧

種類	部位	残存状況		層序				遺構		合計		
				Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	石積み 1	土坑 1			
ブタ・イノシシ	頭蓋骨	骨端のみ	—	—	—	—	—	1	—	1	17	149
		破片	—	7	1	8	—	—	—	16		
	上顎骨	破片	L	—	—	1	—	—	—	1	1	
	下顎骨	骨端部	L	1	—	—	—	—	—	1	3	
		骨幹	L	—	—	1	—	—	—	1		
		破片	LR 不明	—	—	1	—	—	—	1		
	環椎	完形	—	—	1	—	—	—	—	1	1	
	軸椎	完形	—	—	—	2	—	—	—	2	3	
		椎体	—	—	—	1	—	—	—	1		
	胸椎	完形	—	—	2	—	—	—	—	2	12	
		骨幹	—	1	2	—	—	—	—	3		
		椎体	—	—	1	4	—	—	—	5		
		破片	—	—	—	2	—	—	—	2		
	腰椎	椎体	—	—	1	—	—	—	—	1	1	
	椎骨	破片	—	—	—	2	—	—	—	2	2	
	肩甲骨	完形	L	—	—	1	—	—	—	1	10	
		骨端部	L	—	—	1	1	—	2	4		
			R	2	—	2	—	—	—	4		
		骨幹	L	—	—	1	—	—	—	1		
	上腕骨	骨端部	L	—	—	3	—	—	—	3	9	
			R	—	—	2	—	—	1	3		
		骨端のみ	R	—	—	2	—	—	—	2		
		破片	LR 不明	—	—	1	—	—	—	1		
	橈骨	完形	R	—	1	—	—	—	—	1	2	
		骨端部	L	—	—	1	—	—	—	1		
	尺骨	完形	L	—	—	1	—	—	—	1	2	
		骨端部	R	1	—	—	—	—	—	1		
	中手骨 (Ⅲ)	完形	L	—	—	2	—	—	—	2	4	
		骨端部	L	—	—	1	—	—	—	1		
			R	—	—	1	—	—	—	1		
	中手骨 (Ⅲ or Ⅳ)	骨端部	L	—	—	1	—	—	—	1	1	
	中手骨 (Ⅳ)	骨端部	L	1	—	—	—	—	—	1	2	
			R	—	—	1	—	—	—	1		
	中手骨 (Ⅴ)	骨端部	R	—	—	1	—	—	—	1	1	
	寛骨	骨端部	L	—	—	—	—	—	1	1	3	
			R	—	1	—	—	—	—	1		
		破片	LR 不明	—	—	1	—	—	—	1		
	大腿骨	骨端部	L	1	—	2	—	—	—	3	9	
			R	1	—	—	—	—	—	1		
		骨端のみ	L	—	—	1	—	—	—	1		
			R	—	—	2	—	—	—	2		
		骨幹	L	—	—	1	—	—	—	1		
			LR 不明	1	—	—	—	—	—	1		
	脛骨	完形	R	1	—	—	—	—	—	1	7	
		骨端部	L	—	—	1	—	—	—	1		
			R	2	—	1	—	—	—	3		
		骨幹	L	1	—	—	—	—	—	1		
			R	—	1	—	—	—	—	1		
	四肢骨	骨幹	LR 不明	—	—	2	—	—	—	2	5	
		破片	LR 不明	—	—	3	—	—	—	3		
	腓骨	骨端部	LR 不明	—	—	1	—	—	—	1	1	
	踵骨	完形	L	1	—	—	—	—	—	1	2	
			R	—	—	1	—	—	—	1		
	中足骨 (Ⅲ)	骨端部	L	1	—	2	—	—	—	3	3	
	中足骨 (Ⅴ)	骨端部	R	—	—	1	—	—	—	1	1	
	中手・中足骨	骨端部	L	—	—	1	—	—	—	1	1	
	基節骨	完形	L	—	—	—	1	—	—	1	1	
	末節骨	完形	R	—	1	—	—	—	—	1	2	
		骨幹	LR 不明	1	—	—	—	—	—	1		
	肋骨	骨端部	LR 不明	—	1	7	—	—	1	9	42	
		骨幹	LR 不明	5	1	26	—	—	1	33		
	部位不明	骨幹	LR 不明	—	—	1	—	—	—	1	1	
ブタ・イノシシ？	頭蓋骨	破片	LR 不明	—	—	1	—	—	—	1	1	7
	下顎骨	破片	L	—	—	1	—	—	—	1	1	
	足根骨	完形	L	—	—	—	1	—	—	1	1	
	肋骨	骨端部	LR 不明	—	—	1	—	—	—	1	4	
		骨幹	LR 不明	—	—	3	—	—	—	3		
合計				28	14	106	3	1	6	156		

第 35 表　ウシ・ウマ出土一覧

種類	部位	残存状況		層序			遺構		合計		
				Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	石積み 1	土坑 1			
ウシ	下顎骨	骨端部	L	1	—	1	—	—	2	3	38
		破片	LR 不明	—	1	—	—	—	1		
	遊離歯	完形	L	—	—	1	—	—	1	3	
			R	—	1	—	—	—	1		
			LR 不明	—	—	1	—	—	1		
	軸椎	椎体	—	—	—	1	—	—	1	1	
	頸椎	椎体	—	—	—	1	—	—	1	1	
	胸椎	椎体	—	—	—	1	—	—	1	1	
	肩甲骨	骨端部	L	—	—	1	—	—	1	2	
		骨端のみ	L	—	—	1	—	—	1		
	上腕骨	骨端部	L	—	—	1	—	1	2	2	
	橈骨	骨端部	L	—	1	1	—	—	2	2	
	橈側手根骨	完形	R	1	—	—	—	—	1	1	
	中手骨	骨端部	L	—	—	1	—	—	1	4	
			LR 不明	—	—	2	—	—	2		
		破片	LR 不明	—	—	1	—	—	1		
	寛骨	骨幹	R	1	—	—	—	—	1	1	
	脛骨	骨端部	L	—	—	1	—	—	1	2	
		骨幹	R	1	—	—	—	—	1		
	踵骨	骨端部	L	—	—	1	—	—	1	1	
	距骨	完形	L	—	—	1	—	—	1	1	
	中足骨	骨端部	L	1	—	—	—	—	1	3	
			LR 不明	1	—	—	—	—	1		
		破片	LR 不明	—	—	1	—	—	1		
	第 4 中心足根骨	完形	R	—	—	1	—	—	1	2	
			LR 不明	—	—	—	—	1	1		
	基節骨	完形	L	—	—	1	—	—	1	3	
			R	—	—	1	—	—	1		
		骨端部	R	—	—	1	—	—	1		
	末節骨	完形	L	1	—	1	—	—	2	2	
	肋骨	骨端部	LR 不明	—	—	2	—	—	2	3	
		骨幹	LR 不明	—	—	1	—	—	1		
ウシ？	下顎骨	破片	L	—	—	1	—	—	1	1	1
ウシ・ウマ	頭蓋骨	破片	LR 不明	—	—	2	—	—	2	2	31
	胸椎	破片	—	—	—		—	1	1	1	
	椎骨	椎体	—	—	—	3	—	—	3	5	
		破片	—	—	—	2	—	—	2		
	寛骨	骨端部	L	—	—	1	—	—	1	5	
		骨幹	L	—	—	1	—	—	1		
			LR 不明	—	1	—	—	—	1		
		破片	LR 不明	—	—	2	—	—	2		
	脛骨	骨幹	R	—	—	—	1	—	1	1	
	四肢骨	破片	LR 不明	1	—	5	—	—	6	6	
	肋骨	骨幹	LR 不明	1	—	2	—	—	3	5	
		破片	LR 不明	1	—	1	—	—	2		
	部位不明	破片	LR 不明	1	3	2	—	—	6	6	
ウマ	下顎骨	骨端部	L	1	—	—	—	—	1	1	16
	遊離歯	完形	R	—	—	3	—	—	3	3	
	軸椎	椎体	—	—	1	—	—	—	1	1	
	中手骨	骨端部	LR 不明	2	—	—	—	—	2	2	
	大腿骨	完形	L	—	—	1	—	—	1	1	
	脛骨	骨端部	L	—	2	1	—	—	3	3	
	距骨	完形	R	—	—	1	—	—	1	1	
	中足骨	骨端部	L	1	—	—	—	—	1	1	
	中手・中足骨	骨端のみ	LR 不明	—	1	—	—	—	1	1	
	末節骨	完形	L	—	—	1	—	—	1	1	
	肋骨	骨端部	LR 不明	—	—	1	—	—	1	1	
合計				15	11	56	1	3	86		

第 36 表　ジュゴン・海獣・ヤギ・トリ・イヌ・種不明出土一覧

種類	部位	残存状況		表採	層序				遺構			合計		
					Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	石積み 1	土坑 1	土坑 2			
ジュゴン	椎骨	破片	―	—	1	―	―	―	―	―	―	1	1	1
海獣	部位不明	破片	LR 不明	―	―	1	―	―	―	―	―	1	1	1
ヤギ	肩甲骨	骨端部	L	—	1	―	―	―	―	―	―	1	1	2
	橈骨	骨端部	R	—	1	―	―	―	―	―	―	1	1	
トリ	尺骨	骨端部	R	―	―	―	1	―	―	―	―	1	1	1
イヌ	切歯	完形	LR 不明	―	―	1	―	―	―	―	―	1	1	2
	脛骨	骨端部	L	―	―	―	―	―	1	―	―	1	1	
種不明	頭蓋骨	破片	LR 不明	—	3	―	23	―	―	1	―	27	27	156
	下顎骨	破片	R	―	―	1	―	―	―	―	―	1	1	
	椎骨	椎体	―	―	―	―	4	―	―	―	―	4	7	
		破片	―	―	―	1	2	―	―	―	―	3		
	肩甲骨	破片	LR 不明	—	2	―	―	―	―	―	―	2	2	
	四肢骨	破片	LR 不明	—	1	―	―	―	―	―	―	1	1	
	肋骨	骨幹	LR 不明	1	1	5	11	―	1	2	―	21	23	
		破片	LR 不明	—	2	―	―	―	―	―	―	2		
	軟骨？	破片	LR 不明	―	―	―	1	―	―	―	―	1	1	
	部位不明	骨端部	LR 不明	―	―	―	2	―	―	―	―	2	94	
		骨端のみ	LR 不明	―	―	2	―	―	―	1	―	3		
		骨幹	LR 不明	―	―	―	3	1	―	―	―	4		
		破片	LR 不明	1	16	6	57	2	―	2	1	85		
合計				2	28	17	104	3	2	6	1	163		

第 37 表　魚類出土一覧

種類	部位	残存状況		層序				遺構	合計		
				Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	土坑 1			
ダツ科	歯骨	破片	R	1	―	―	―	―	1	1	1
カマス科	歯骨	破片	R	―	―	1	―	―	1	1	1
アジ科	歯骨	破片	L	―	―	1	―	―	1	1	1
タイ科　クロダイ属	前上顎骨	完形	L	―	1	1	―	―	2	2	5
	歯骨	完形	L	―	―	2	―	―	2	3	
		破片	L	―	―	1	―	―	1		
フエフキダイ科　アマミフエフキ型	前上顎骨	完形	L	―	―	―	1	―	1	2	2
		破片	L	―	―	1	―	―	1		
フエフキダイ科	主上顎骨	破片	L	―	―	1	―	―	1	1	11
	歯骨	完形	L	―	1	1	―	―	2	4	
		破片	L	―	―	1	―	1	2		
	角骨	完形	R	―	―	1	―	―	1	2	
		破片	L	―	1	―	―	―	1		
	方骨	破片	R	―	―	1	―	―	1	1	
	口蓋	破片	L	―	―	1	―	―	1	1	
	前鰓蓋骨	破片	L	―	―	1	―	―	1	1	
			R	―	―	1	―	―	1	1	
ベラ科　シロクラベラ型	上咽頭骨	完形	R	―	―	1	―	―	1	1	2
	下咽頭骨	完形	―	―	―	1	―	―	1	1	
ブダイ科	前上顎骨	完形	L	―	―	1	―	―	1	1	1
モンガラカワハギ科	背鰭棘	完形	―	―	―	1	―	―	1	1	1
ハリセンボン科	棘	完形	―	―	―	4	―	―	4	4	4
種不明	頭蓋骨	破片	―	―	―	2	―	―	2	2	29
	前鰓蓋骨	破片	ＬＲ不明	―	1	―	―	―	1	1	
	舌骨	完形	ＬＲ不明	―	―	1	―	―	1	1	
	肩甲骨	破片	L	―	―	1	―	―	1	1	
	椎骨	完形	―	2	―	3	―	―	5	6	
		破片	―	―	―	1	―	―	1		
	背鰭棘	完形	―	―	―	5	―	―	5	7	
		破片	―	―	1	1	―	―	2		
	部位不明	破片	ＬＲ不明	1	―	10	―	―	11	11	
合計				4	5	47	1	1	58		

参考文献

＜土器・陶磁器類＞

・上田秀夫「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』第 2 号　日本貿易陶磁研究会　1982

・森田勉「14 ～ 16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第 2 号　日本貿易陶磁研究会　1982

・小野正敏「15、16 世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第 2 号　日本貿易陶磁研究会　1982

・安里進・上原政昌・家田淳一「擂鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『名護博物館紀要 3 号』 1987

・知念勇・池田栄史・江藤和幸「灰釉碗からみた近世沖縄古窯の編年」『沖縄県立博物館紀要』第 143 号　1988

・今帰仁村教育委員会 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書　第 14 集　1991

・那覇市教育委員会 『壺屋古窯群Ⅰ』 那覇市文化財調査報告書　第 23 集　1992

・沖縄県教育委員会 『湧田古窯群（Ⅰ）』 沖縄県文化財調査報告書　第 111 集　1993

・金武正紀「沖縄から出土したタイ・ベトナム陶磁」『シンポジウム陶磁器が語る交流－九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器』東南アジア考古学会　2004

・新垣力・瀬戸哲也「沖縄における 14 ～ 16 世紀の中国産白磁の再整理」『紀要　沖縄埋文研究 3』沖縄県立埋蔵文化財センター　2005

・瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志「沖縄における貿易陶磁研究」『紀要　沖縄埋文研究 5』沖縄県立埋蔵文化財センター　2007

・「琉球諸島出土キセルの基礎的研究～琉球喫煙文化の研究～」『東京大学考古学研究室研究紀要』第 25 号 東京大学考古学研究室　石井龍太　2011

・新垣力「17 世紀前半～中葉の琉球陶器について－「初期無釉陶器」にみる薩摩焼の影響－」『鹿児島考古』第 43 号　鹿児島考古学会　2013

・瀬戸哲也「14 ～ 16 世紀の沖縄出土龍泉窯系青磁における生産地の模索」『中近世陶磁器の考古学』第 1 巻 2015

・新里亮人『琉球国成立前夜の考古学』 同成社　2018

＜自然遺物関連＞

・沖縄県教育委員会 『石川市　古我地原貝塚－沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告（6）－本文編』 沖縄県文化財調査報告書第 84 集　1987

・勝連町教育委員会 『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－』勝連町の文化財第 11 集　1990

・今帰仁村教育委員会 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第 14 集　1991

・沖縄県教育委員会 『平敷屋トウバル遺跡－ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書第 125 集　1996

・本部町教育委員会 『瀬底島・アンチの上貝塚－個人住宅建設に伴う緊急発掘調査報告－』本部町文化財調査報告書　第 9 集　2009

・沖縄県立埋蔵文化財センター 『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 53 集　2010

・沖縄県立埋蔵文化財センター 『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』前同第 54 集　2010

・沖縄県うるま市教育委員会 『勝連城跡―四の曲輪北区発掘調査報告書―』うるま市文化財調査報告書第 14 集 2011

・沖縄県立埋蔵文化財センター 『首里城跡－銭蔵地区発掘調査報告書－』前同第 77 集　2015

・沖縄県立埋蔵文化財センター 『首里城跡－継世門北地区発掘調査報告書－』前同第 97 集　2018

第Ⅳ章　総括

比屋根地域は、琉球国時代には美里間切に含まれ、『絵図郷村帳 (1649 年)』にその名が見られる。比屋根遺跡が所在する小丘陵は、『琉球国由来記 (1713 年)』に「オシアゲ森（ムイ）」と記載される御嶽であると推定され、「大殿（ウフドゥン）」と呼ばれる比屋根地域の現在の拝所は、同由来記に記載されている「比屋根之殿」に当たると考えられている。また、沖縄市教育委員会が昭和 56 年度に実施した遺跡詳細分布調査でも土器や青磁等の中国産陶磁器、沖縄産陶器等が表採され、グスク時代から近世・近代にかけての遺跡であることが確認されている。これらのことから、比屋根地域がその起源を近世以前にまで遡る古村であることが窺える。

今回の調査においても、近代及び近世からグスク時代に該当する遺物が多く出土しており、比屋根地域ではグスク時代以降、継続して人の営みがあったことが再確認された。出土遺物の中でも、比較的分類可能な資料が多かったのは青磁であり、14 世紀半ばから 16 世紀後半（沖縄分類・瀬戸ほか 2007 のⅣ類からⅦ類相当）のものが認められ、この期間が当遺跡のグスク時代における盛行期と考えられる。

遺構は石積み・集石・貝溜まり・土坑が確認されているが、各遺構の時期は、共伴遺物や検出層位等から判断すると、石積みが戦後、集石・貝溜まりや土坑 1・2 は近世、土坑 3 はグスク時代に該当すると考えられる。石積みは調査区の北東に隣接する、方形状の平坦な区画の土留めのために造られたものと考えられる。この区画は、現在の獅子屋や伊礼門中の拝所が設置される以前は、元々屋敷跡の敷地であった可能性が考えられる。この石積み自体は近代以降の造作であるが、方形状の平坦な区画側の調査区北東側壁面の土層をみると、近世の遺物包含層が厚く堆積しており、この区画の造成は近世まで遡る可能性が高い。各土坑の性格は現時点では不明であるが、集石と貝溜りについては、北東側の方形状の平坦な区画に伴う遺構と考えられる。

今回の調査結果から、少なくとも調査区周辺については、グスク時代から人々の営みがあったことが確実となった。また、近世の造成土の存在は、近世に方形状の平坦な区画を造る大きな敷地造成が行なわれ、戦後にも石積みを造り、現在にいたることが確認された。今回の調査だけでは一概には言えないものの、比屋根遺跡を含む丘陵（オシアゲ森）の複数ある方形状の平坦な区画は古くは近世に造成された可能性が考えられる。

また丘陵全体を見た場合、大殿が所在する丘陵頂上部については、現況では、大きな地形の改変は見受けられない。そのため、丘陵頂上部には、グスク時代の遺構等が残されている可能性が考えられる。また、今後は隣接する他の方形区画についても、その用途を明確化するため、引き続き調査等が必要と考える。

沖縄市東部には、比屋根遺跡と類似する大里エーヤマ遺跡や与儀遺跡が所在している。発掘調査等は行なっていないが、今回の比屋根遺跡の調査成果から、当地域のグスク時代から現集落への変遷の過程の一端を垣間見ることができた。

図 版

調査区の現況（南東より）

調査区の現況（北西より）

調査区の現況（北より）

調査区の現況（南より）

調査区の伐採後状況（南東より）

調査区の伐採後状況（北西より）

調査区の伐採後状況（北より）

調査区の伐採後状況（南より）

図版 4　調査区の現況・伐採後状況

精査後状況全景（西より）

精査後状況全景（南より）

精査後状況詳細１（南西より）

精査後状況詳細２（南西より）

精査後状況詳細３（南西より）

基底石検出状況（南より）

基底石完掘状況（西より）

基底石完掘状況（南より）

図版５　石積み１

精査後状況全景（南西より）

精査後状況全景（北西より）

精査後状況全景（南より）

精査後状況詳細 1（北西より）

精査後状況詳細 2（西より）

精査後状況詳細 3（西より）

精査後状況詳細 4（西より）

精査後状況詳細 5（西より）

図版 6　石積み 2

SP　C～C' 断面　（南より）

SP　C～C' 断面　（南東より）

SP　D～D' 断面　（南より）

SP　D～D' 断面 (南東より）

SP　E～E' 断面　（東より）

SP　E～E' 断面　（南東より）

SP　G～G' 断面　（北西より）

SP　H～H' 断面　（南東より）

図版７　層序

集石検出状況（西より）

集石検出状況（南東より）

集石検出状況（北東より）

集石検出状況（北西より）

貝溜まり検出状況（西より）

貝溜まり検出状況（南東より）

貝溜まり検出状況（北東より）

貝溜まり検出状況（北西より）

図版８　集石・貝溜まり

貝溜まり完掘状況（西より）

貝溜まり完掘状況（南東より）

貝溜まり完掘状況（北東より）

貝溜まり完掘状況（北西より）

獣骨出土状況（南西より）

獣骨出土状況（北西より）

獣骨出土状況（北東より）

獣骨出土状況（北西より）

図版９　貝溜まり・獣骨

土坑１　検出状況（南西より）

土坑１　検出状況（北西より）

土坑１　完掘状況（南西より）

土坑１　完掘状況（北西より）

土坑２　検出状況（南西より）

土坑２　検出状況（南東より）

土坑２　完掘状況（南西より）

土坑２　完掘状況（南東より）

図版 10　土坑１・土坑２

土坑３　検出状況（北西より）

土坑３　検出状況（東より）

土坑３　ピット検出状況（南より）

土坑３　ピットの断面状況（北西より）

土坑３　完掘状況（南より）

土坑３　完掘状況（西より）

土坑３　完掘状況　完掘状況（南西より）

土坑３　調査区外延伸状況（南西より）

図版 11　土坑３・ピット

近世の遺物包含層検出状況（南東より）

近世の造成土検出状況（南東より）

近世の遺物包含層検出状況 (北西より）

近世の造成土検出状況 (北西より）

近世の遺物包含層検出状況（北より）

近世の造成土検出状況（北より）

近世の遺物包含層検出状況（東より）

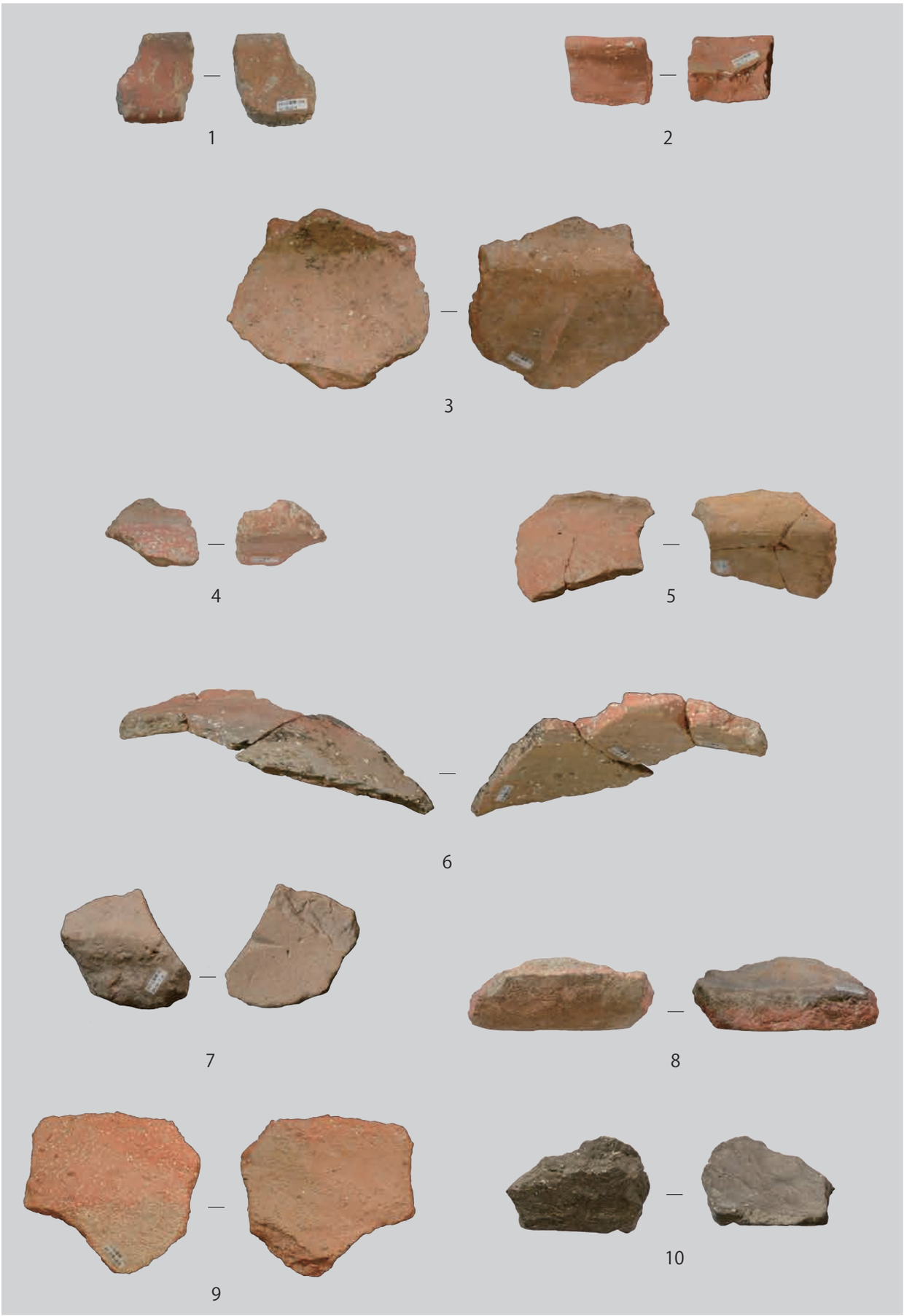
近世の造成土検出状況（東より）

図版 12　近世の遺物包含層・近世の造成土検出状況

調査区完掘状況全景（南東より）

調査区完掘状況全景（東より）

図版 13　完掘状況



図版 14　土器

図版 15　青磁 1

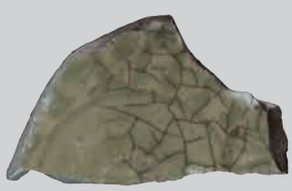
11

10

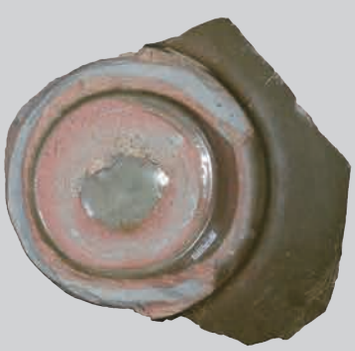
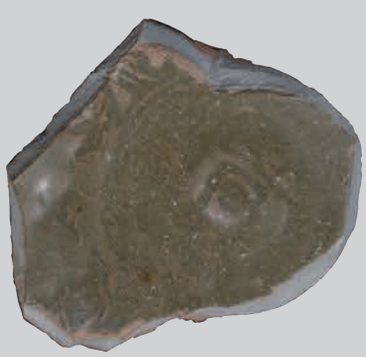
12

13

14

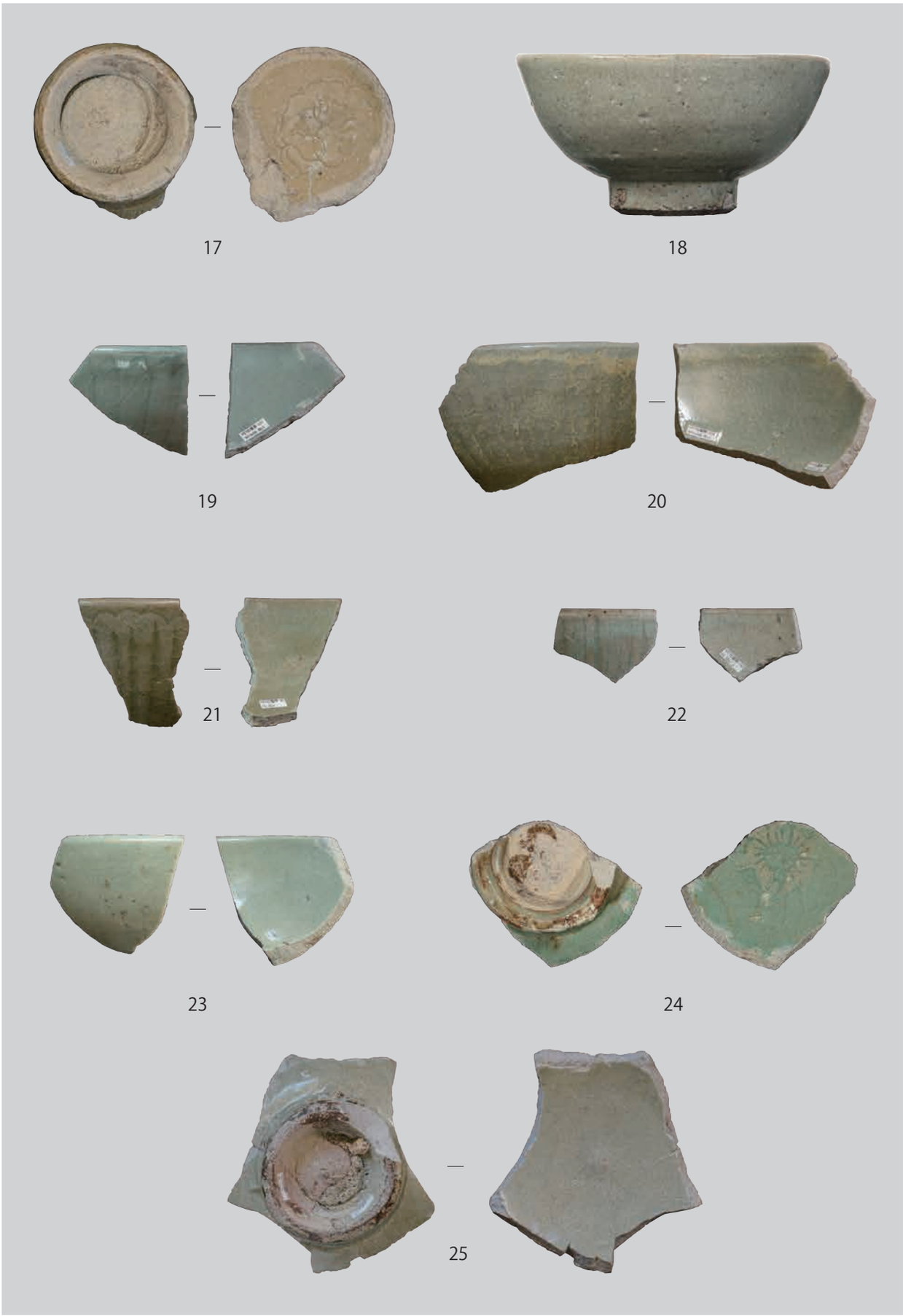


15

16

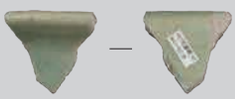
図版 16　青磁 2



図版 17　青磁 3

26

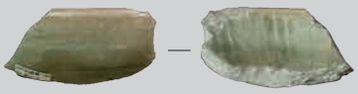
27



28

29

30



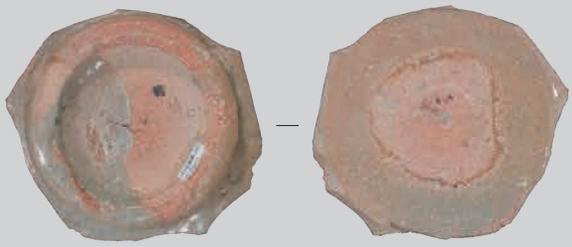
31

32

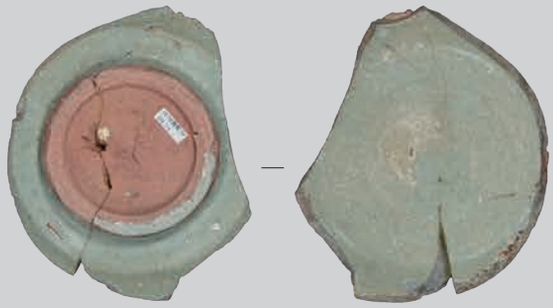
33

34

図版 18　青磁 4

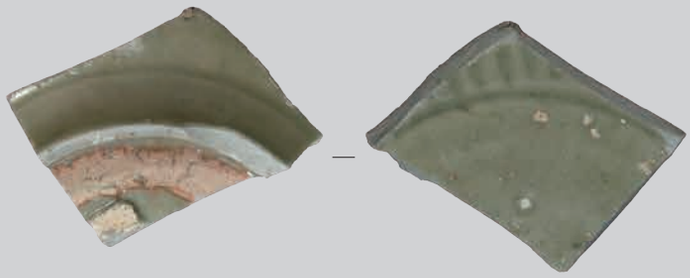


35



36

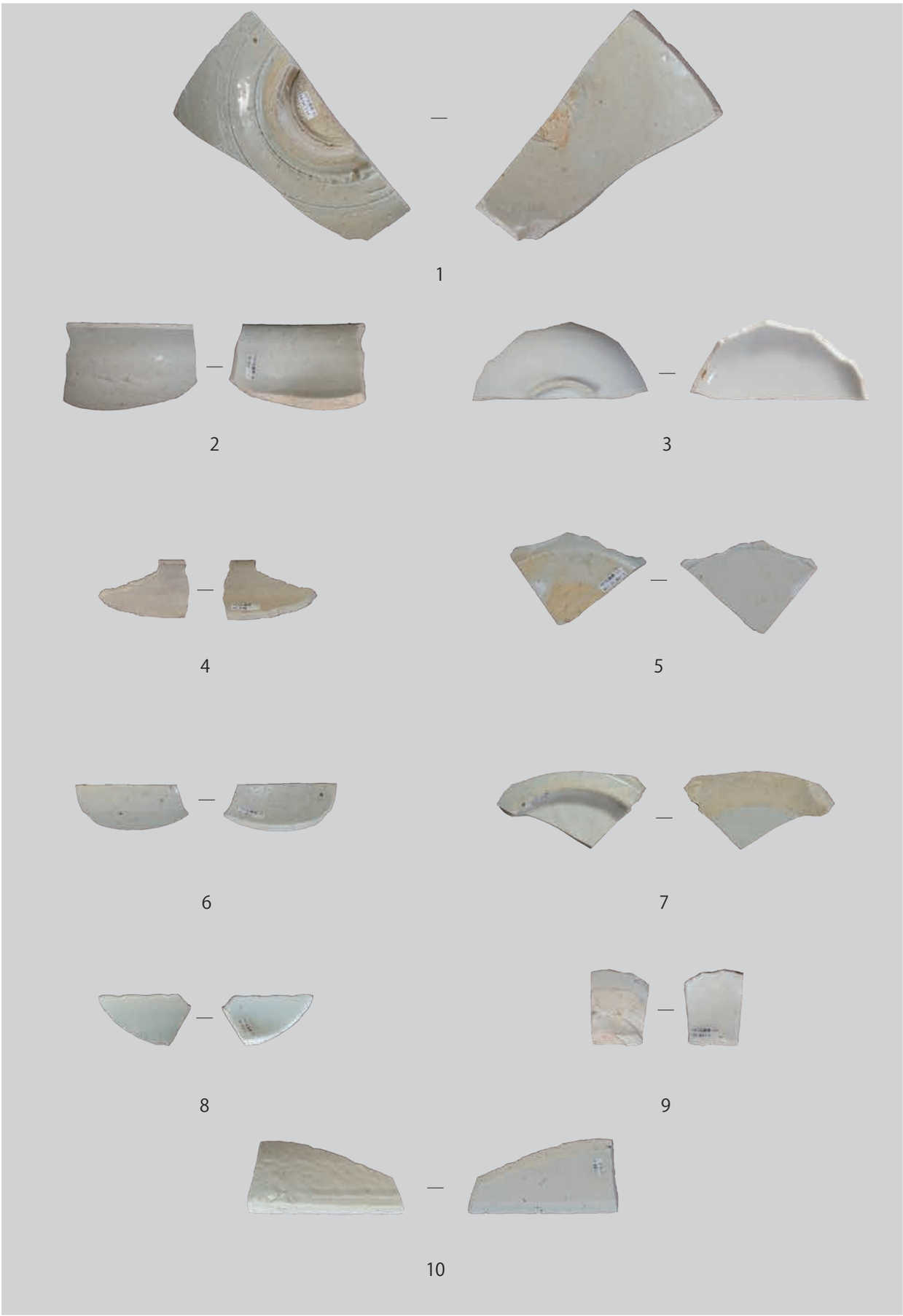
37



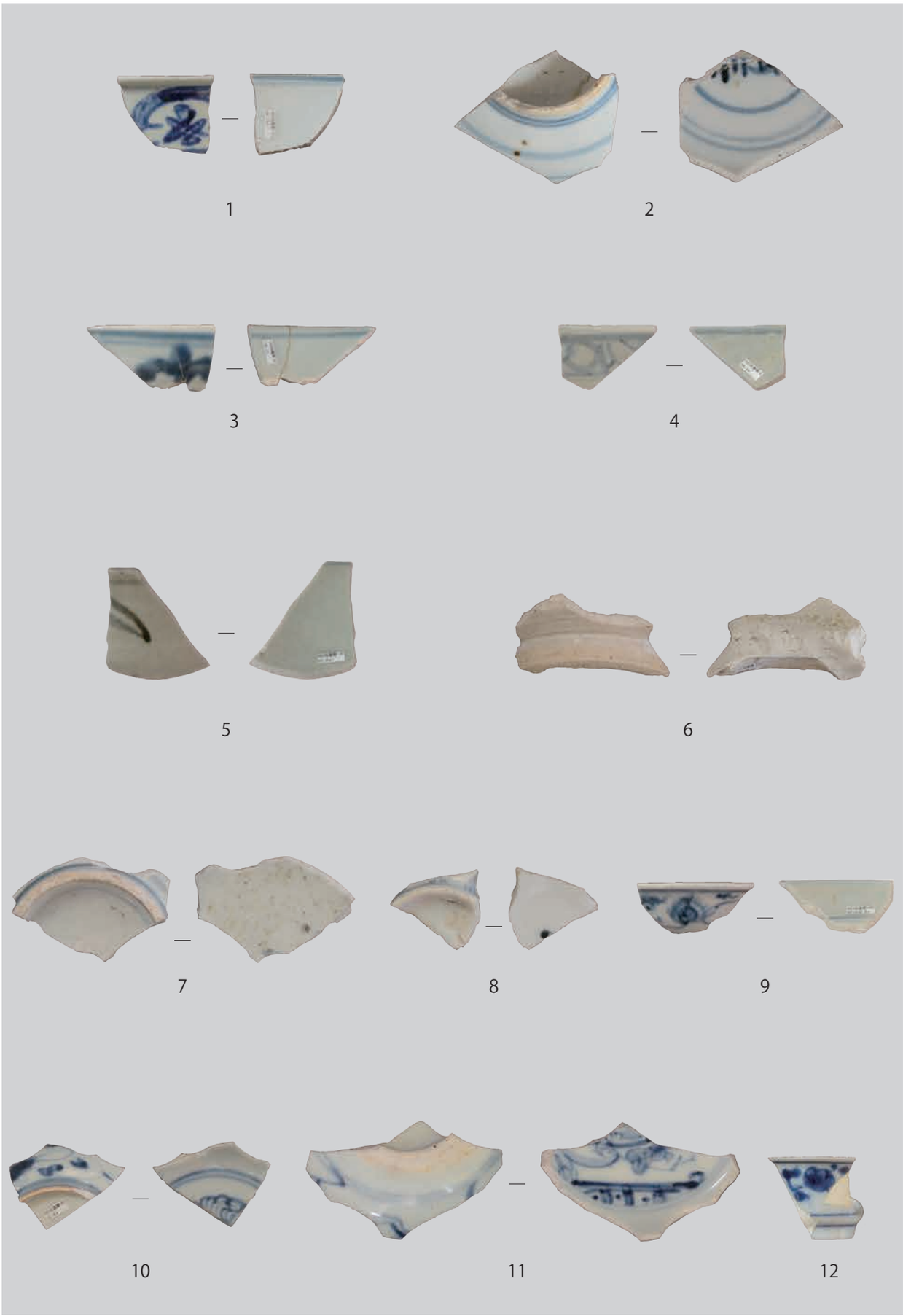
38

39

図版 19　青磁 5



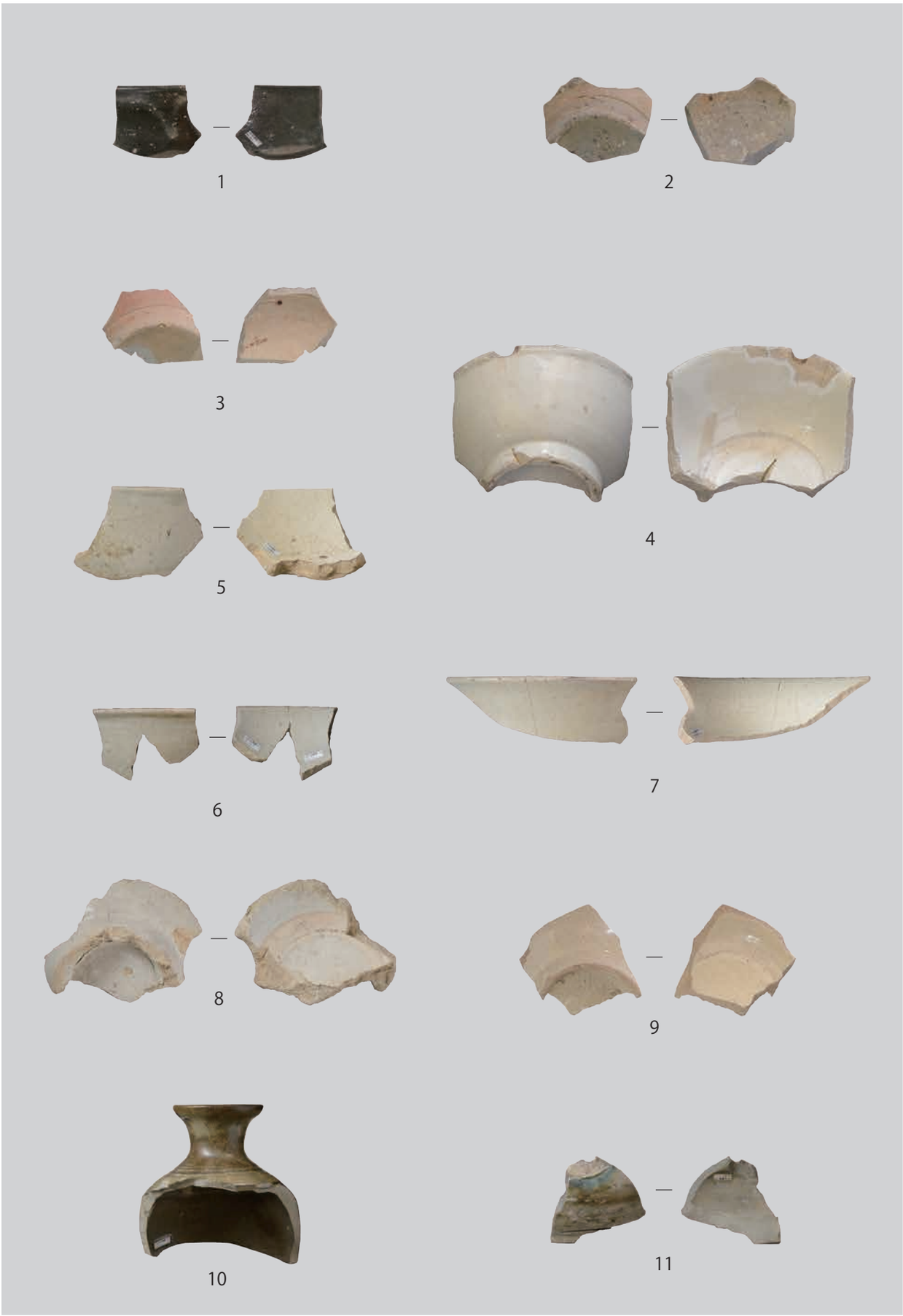
図版 20　白磁



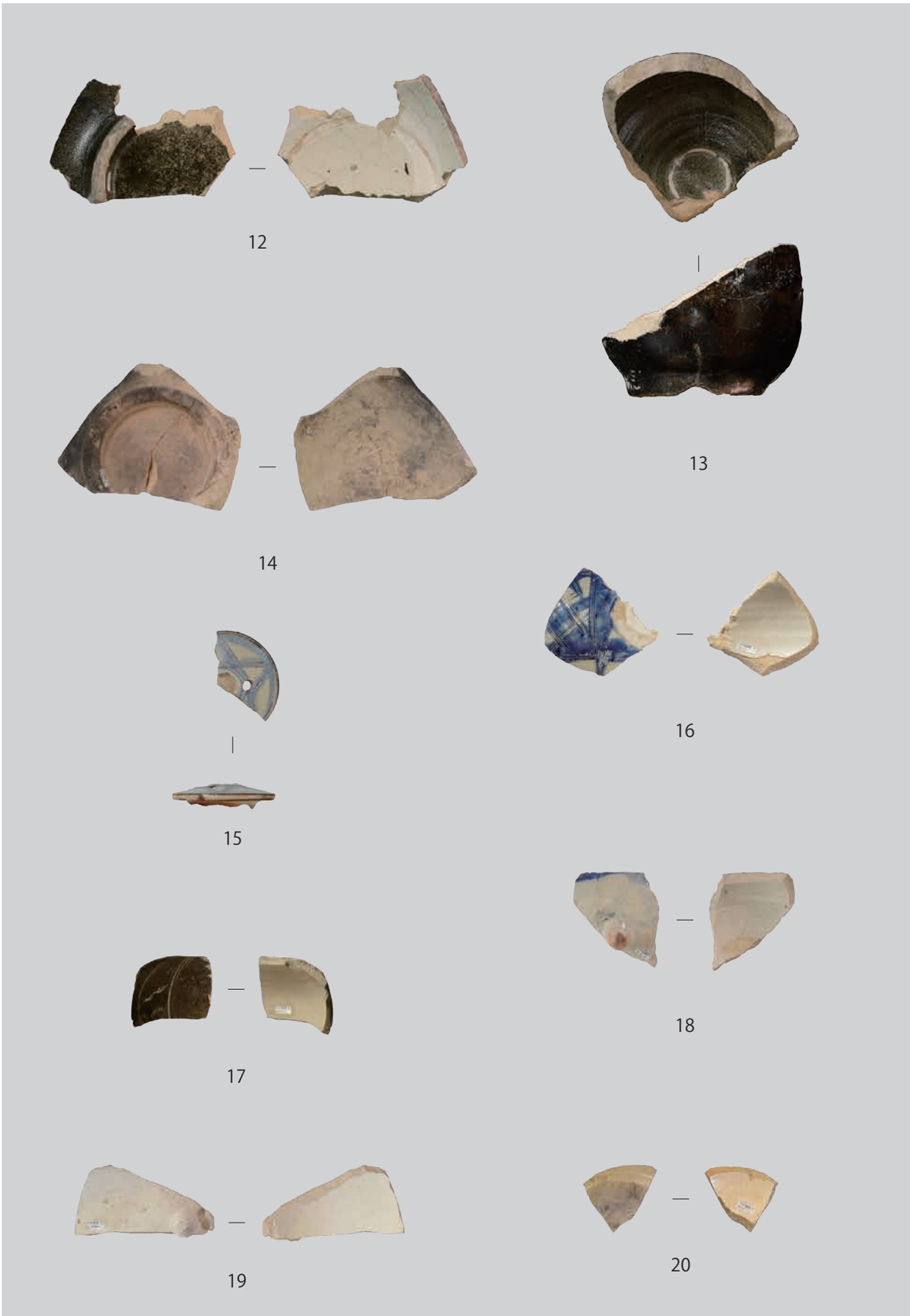
図版 21　青花

図版 22　その他の輸入陶磁器

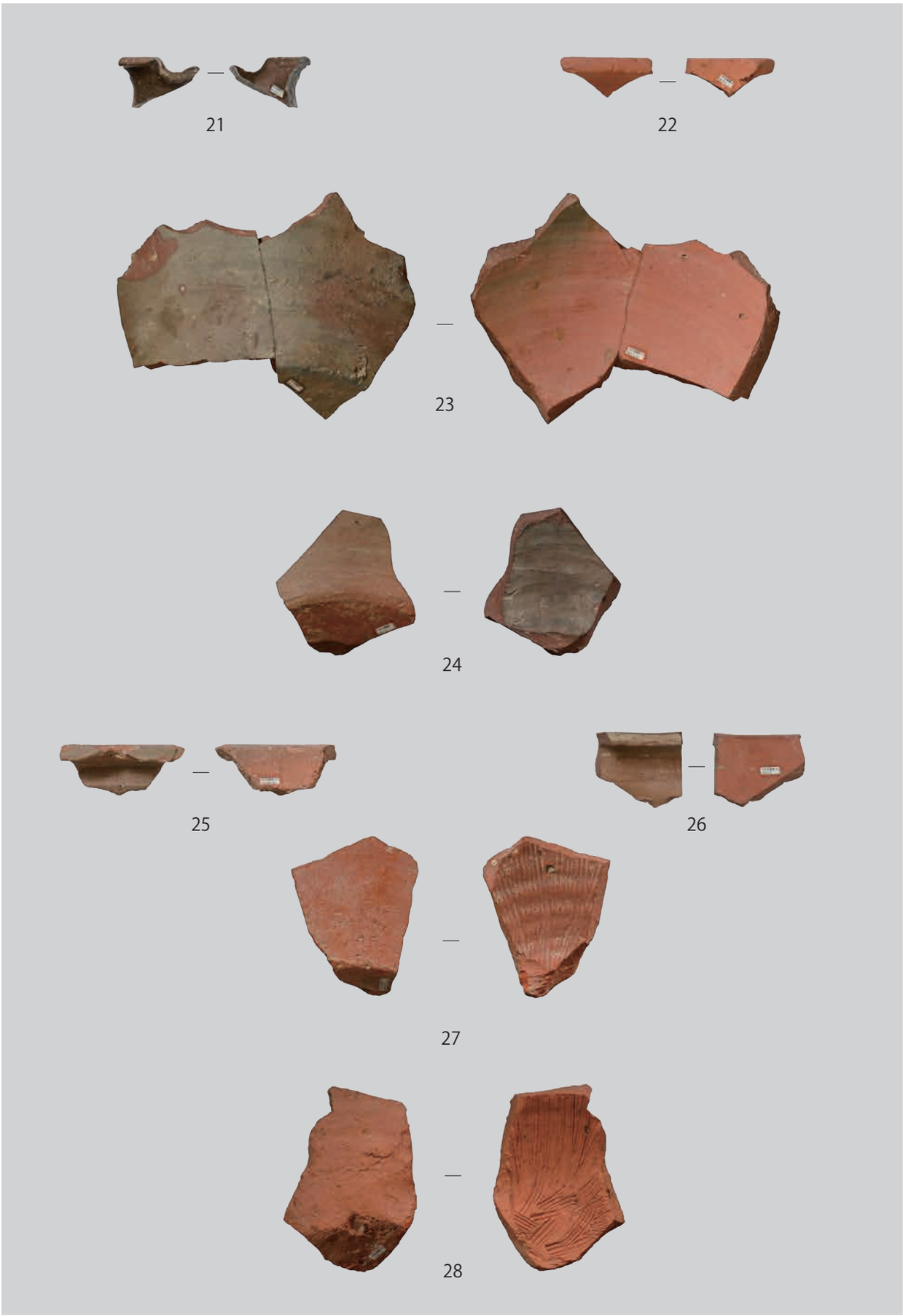
図版 23　本土産陶磁器



図版 24　沖縄産陶器 1

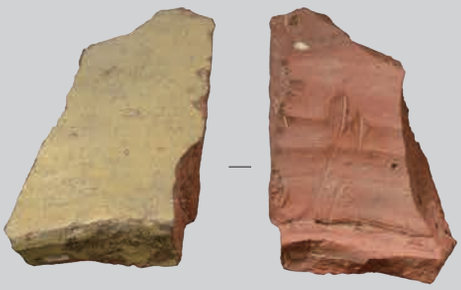


図版 25　沖縄産陶器 2

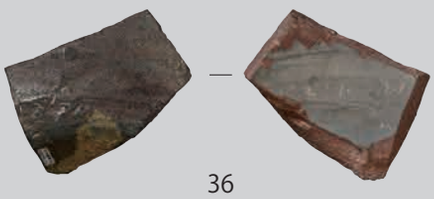


図版 26　沖縄産陶器 3

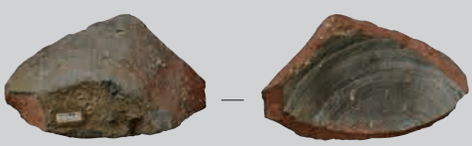
図版 27　沖縄産陶器 4



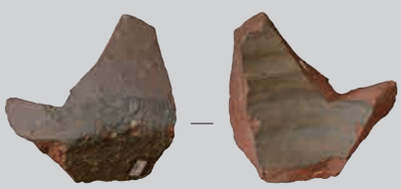
35



36

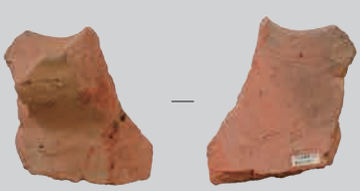


37



38

39



40

41

42

図版 28　沖縄産陶器 5

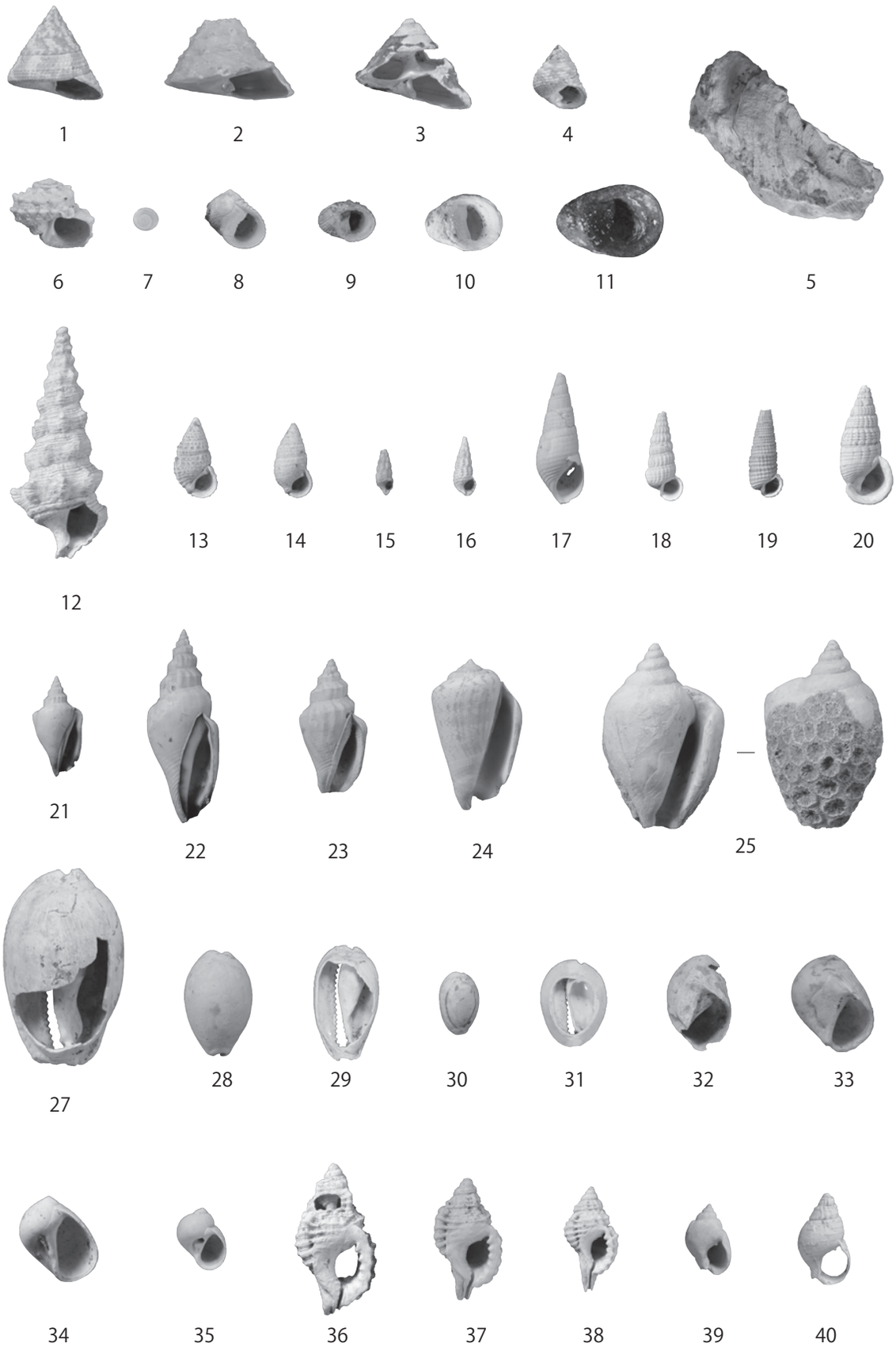
図版 29　円盤状製品・土製品・瓦

図版 30　金属製品 1

図版 31　金属製品 2・銭貨

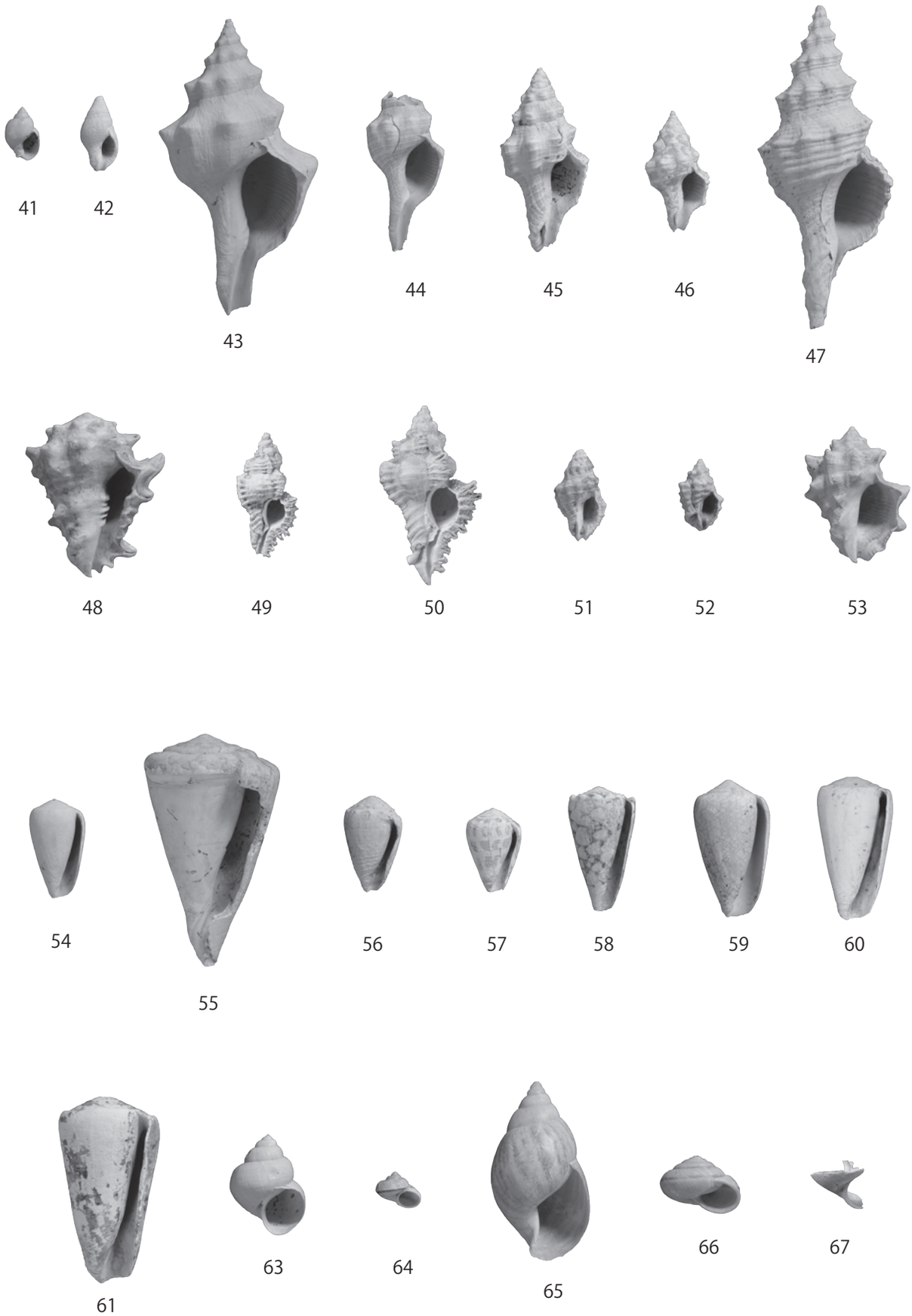
図版 32　石器

図版 33　貝製品・骨製品



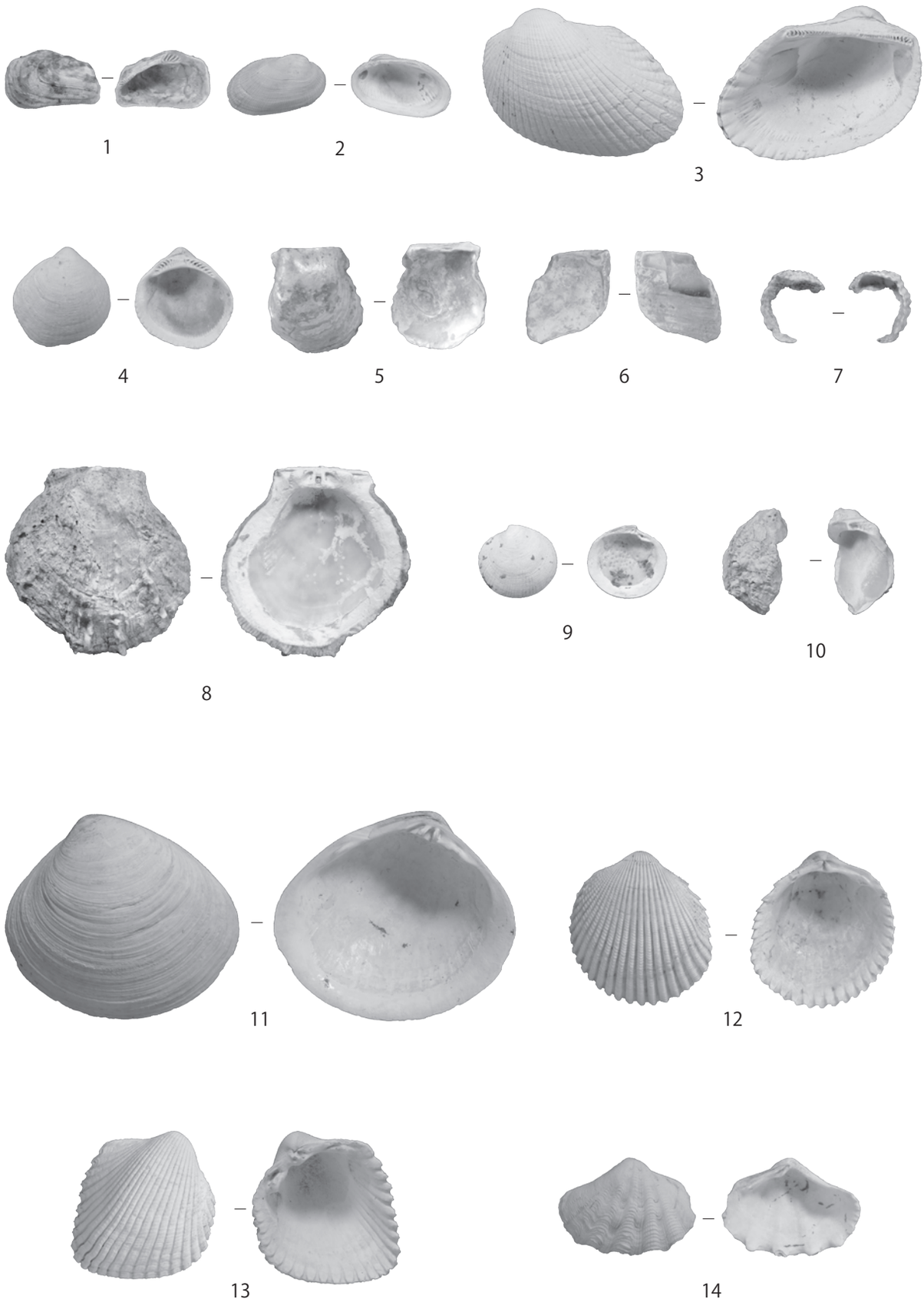
※遺物番号は、第 31 表に準ずる。

図版 34　巻貝 1



※遺物番号は、第 31 表に準ずる。

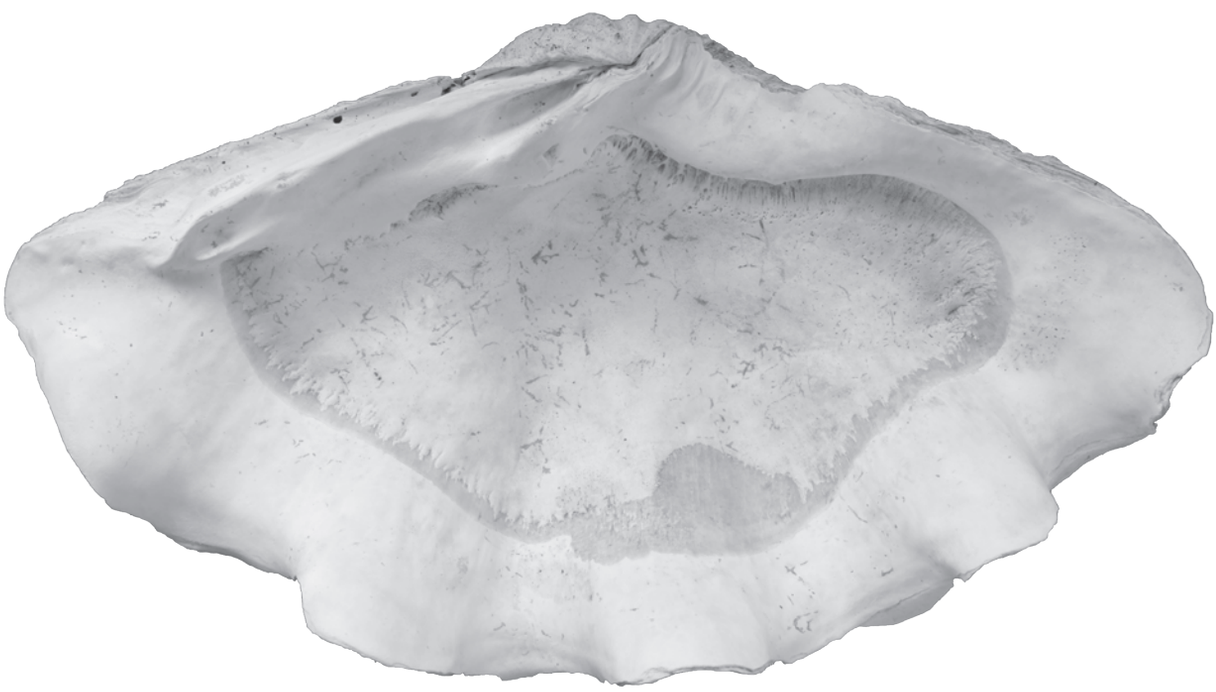
図版 35　巻貝 2

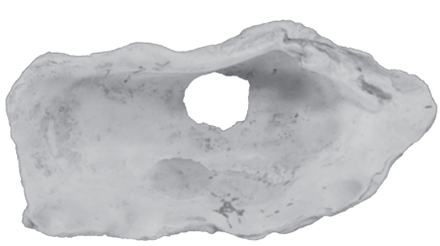


※遺物番号は、第 31 表に準ずる。

図版 36　二枚貝 1

15

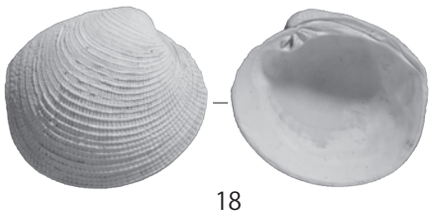


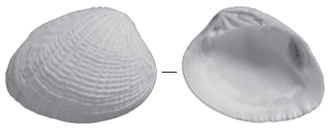


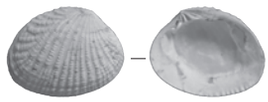
16

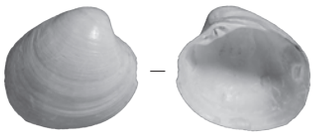
※遺物番号は、第 31 表に準ずる。

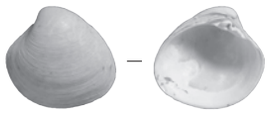
図版 37　二枚貝 2

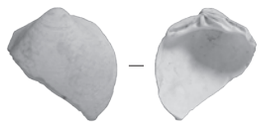

18

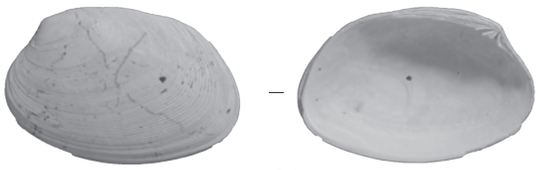

19

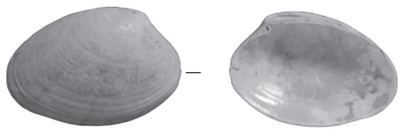

20

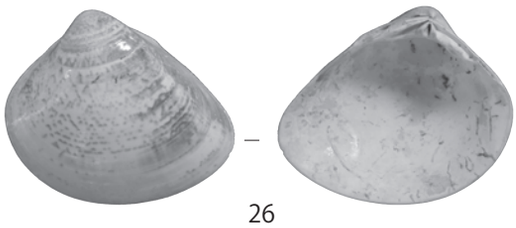

21

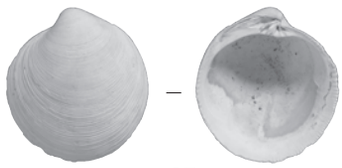

22

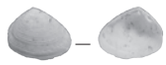

23

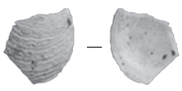

24

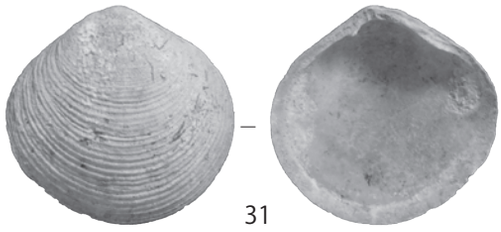

25


26

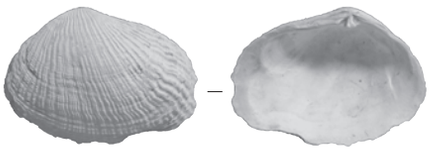

27

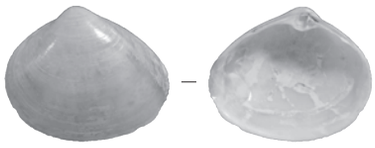

29

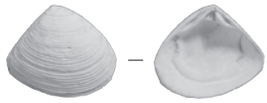

30


31

32

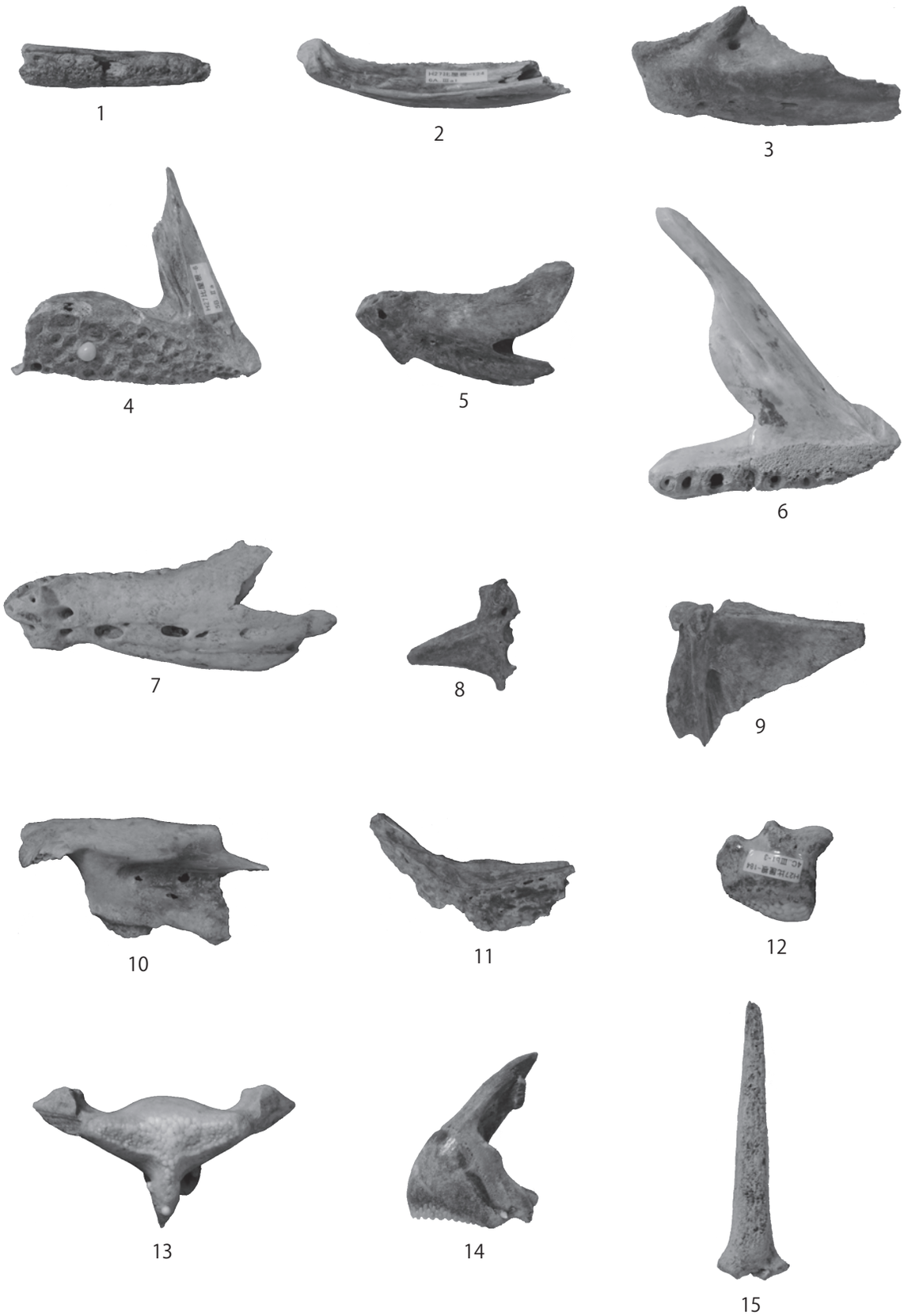

33


34


35

※遺物番号は、第 31 表に準ずる。

図版 38　二枚貝 3

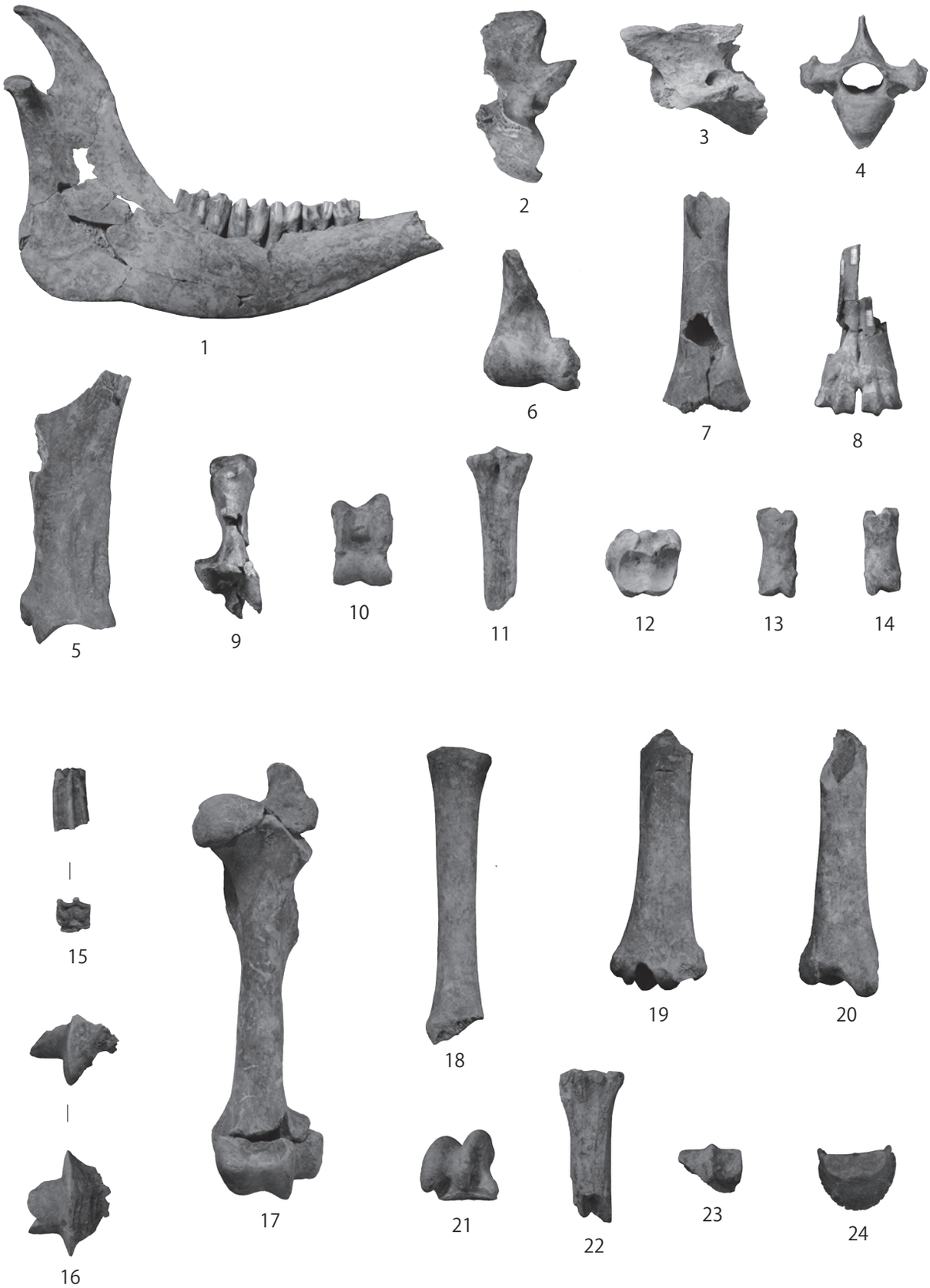


ダツ科　1. 歯骨 R　**カマス科**　2. 歯骨 R　**アジ科**　3. 歯骨 L　**タイ科クロダイ属**　4. 前上顎骨 L、5. 歯骨 L
フエフキダイ科アマミフエフキ型　6. 前上顎骨 L　**フエフキダイ科**　7. 歯骨 L、8. 角骨 R、9. 方骨 R、10. 口蓋 L、11. 前鰓蓋骨 L
ベラ科シロクラベラ型　12. 上咽頭骨 R、13. 下咽頭骨　**ブダイ科**　14. 前上顎 L　**モンガラカワハギ科**　15. 背鰭棘

図版 39　脊椎動物遺体 1

ジュゴン　1. 椎骨　**トリ**　2. 尺骨 R　**イヌ**　3. 切歯 LR 不明　**ヤギ**　4. 橈骨 R　**ブタ・イノシシ**　5. 下顎骨 L、6. 環椎、7. 軸椎、8. 胸椎、9. 肩甲骨 R、10. 上腕骨 R、 11. 中手骨 (Ⅲ) L、12. 脛骨 R、13. 橈骨 R、14. 踵骨 R、15. 中足骨 R、16. 末節骨

図版 40　脊椎動物遺体 2



ウシ　1. 下顎骨 L、2. 軸椎、3. 頸椎、4. 胸椎、5. 肩甲骨 L、6. 上腕骨 L、7. 橈骨 L、8. 中手骨 L、9. 踵骨 L、10. 距骨 L、11. 中足骨 L、12. 第 4 中心足根骨 R、13. 基節骨 R、14. 基節骨 L　**ウマ**　15. 遊離歯 R、16. 軸椎（カットマークあり）、17. 大腿骨 L、18. 中手骨 LR 不明、19. 脛骨 L（カットマークあり）、20. 脛骨 L、21. 距骨 R、22. 中足骨 L、23. 中手・中足骨 LR 不明、24. 末節骨

図版 41　脊椎動物遺体 3

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひやごんいせき
書　　名	比屋根遺跡
副　書　名	災害時緊急避難通路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	―
シリーズ名	沖縄市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 49 集
編 著 者 名	縄田雅重　島田由利佳　川端博明　慶田秀美　譜久里昌代　喜屋武朋子
発 行 機 関	沖縄市教育委員会
編 集 機 関	沖縄市立郷土博物館
所　在　地	〒 904-0031 沖縄県沖縄市上地 2 丁目 19 番 6 号　TEL：098-932-6882
発行年月日	2021（令和 3）年 3 月 19 日

ふりがな	ふりがな	コード						
所収遺跡名	所　在　地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
比屋根遺跡（ひやごんいせき）	沖縄県（おきなわけん） 沖縄市（おきなわし） 比屋根（ひやごん）	47211	―	26° 19′ 01″	127° 49′ 03″	2015.11.18 ～ 2016.02.12	72㎡	道路建設

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
比屋根遺跡	散布地	近代	石積み	土器・カムィヤキ・青磁・白磁・青花・その他の輸入陶磁器・本土産陶磁器・沖縄産陶器・円盤状製品・土製品・瓦・金属製品・銭貨・石器・貝製品・骨製品・貝類遺体・脊椎動物遺体・他	―
		近世	集石・貝溜まり・土坑 1・土坑 2		
		グスク時代（中世）	土坑 3・ピット		

要約

比屋根遺跡は、1981（昭和 56）年度に本市が実施した遺跡詳細分布調査によって遺物散布地として周知されている。今回の調査でも、遺物包含層から土器・外国産陶磁器・貝類遺体・脊椎動物遺体等が多数出土しており、時期的には近代からグスク時代に該当する。出土遺物の中でも比較的分類可能な資料が多かったのは青磁であり、14 世紀半ばから 16 世紀後半の資料が認められたため、この期間が当遺跡のグスク時代における盛行期と考えられる。遺構は近代の石積み、近世の集石・貝溜まり・土坑 1・土坑 2、グスク時代の土坑 3 が確認されているが、土坑についてはその性格が不明である。

調査区の北東に隣接して、元々は屋敷跡の敷地であったと推定される方形状の平坦な区画があり、区画の造成時期は調査区内の層序観察により近世期と想定され、集石や貝溜まりについても、この区画に関連する遺構と考えられる。調査区の周囲には同様の方形状の平坦な区画が複数あり、近世期につくられた可能性がある。

比屋根遺跡

－災害時緊急避難通路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

沖縄市文化財調査報告書　第 49 集

2021（令和 3）年 3 月 19 日　発行

発　行　　沖縄市教育委員会
編　集　　沖縄市立郷土博物館
〒 904-0031　沖縄県沖縄市上地 2-19-6
TEL(098)-932-6882
印　刷　　株式会社　東洋企画印刷
〒 901-0306　沖縄県糸満市西崎町 4 丁目 21-5
TEL(098)-995-4444